江迎町文化財調査報告書　第２集

根引池遺跡

（ねびきいけ）

2000

長崎県江迎町教育委員会

江迎町文化財調査報告書　第２集

根引池遺跡

発刊にあたって

江迎町では，平成８年に調査しました広久保遺跡につづき，今回２回目の発掘調査が実施されました。広久保遺跡では縄文時代の貴重な遺構・遺物が出土しましたが，今回調査がおこなわれました根引池遺跡の調査では，県内でも有数の旧石器時代の遺跡であることがわかりました。このことから数万年前からこの江迎町にも先人の行動の足跡があり，延々とその歴史が息づいていたことが理解できます。このように貴重な文化遺産が江迎町に残っていることを誇りに思い，今後もこのような文化遺産を守っていくことが私達にとっての使命であります。このような文化遺産の保護・継承につきましては，町民の皆様のますますの御理解が必要不可欠であると思います。

この調査報告書が多くの人の文化財の愛護の精神と学問研究の一助となれば幸いです。

平成12年３月31日

江迎町教育委員会教育長　赤　木　孝　夫

例　　言

1．本報告は，中山間地域総合整備事業に伴う根引池遺跡の発掘調査報告である。

2．調査は江迎町教育委員会が事業主体となり，長崎県教育庁文化課が調査を担当した。
　調査は平成10年11月24日～同年12月３日に実施した範囲確認調査をもとに，平成11年６月７日～同年７月15日まで調査を実施した。

3．調査主体者および担当者は次のとおりである。

調査主体	江迎町教育委員会	教育長	赤木　孝夫
	同	教育次長	森下　武彦
	同	社会教育係長	綿川　勝英
調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	福田　一志
		文化財調査員	中村　　幸

4．橘　昌信先生（別府大学教授）には現地指導をいただいた。

5．遺物の実測は，松尾美代子・徳永妙子・黒川英子・近藤慶子の協力を得て中村・福田が行い，製図は渡辺洋子・中村・福田がおこなった。図版の製作については小林利恵子・斉藤いづみ・近藤千鶴・田中由美子の協力を得た。写真は調査分を福田が，遺物写真は本田秀樹・大浦雅宏の協力を得て中村が担当した。

6．本遺跡の遺物・写真・図面等については長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。

7．本書は第２章を中村が，他については福田が執筆した。

8．本書の編集は福田がおこなった。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯・方法……1

第２章　地理的・歴史的環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……4

第３章　調　　査……7
　第１節　層　　位……7
　第２節　遺　　構……9
　第３節　遺跡出土の石器素材……10

第４章　遺物分布……12
　第１節　石材別遺物分布……12
　第２節　接合資料の分布……15

第５章　遺　　物……15

第６章　接合資料……49

第７章　ま と め……62

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　根引池周辺図（1/10,000）……1
第３図　グリッド配置図（1/1,000）……2
第４図　根引池遺跡周辺の地形図（1/50,000）……3
第５図　根引池遺跡と周辺の遺跡・地形（1/25,000）……4
第６図　根引池Ｂ地点採集の石器（2/3）……5
第７図　根引池Ｂ地点採集の石器（2/3）……6

第８図　土層図（Ｓ＝1/60）……8
第９図　集石遺構図……9
第10図　遺跡周辺の黒曜石原産地……11
第11図　遺物分布図（石材別）……13
第12図　遺物分布図（石材別）……14
第13図　接合関係図……15
第14図　ナイフ形石器（2/3）……17
第15図　ナイフ形石器・彫器（2/3）……18
第16図　削器・掻器（2/3）……19
第17図　その他の石器（2/3）……21
第18図　ナイフ形石器の分布……22
第19図　石核（2/3）……24
第20図　石核（2/3）……25
第21図　石核（2/3）……26
第22図　石核（2/3）……27
第23図　剥片（黒曜石Ａ－１）（2/3）……29
第24図　剥片（黒曜石Ａ－１）（2/3）……30
第25図　剥片（黒曜石Ａ－１）（2/3）……31
第26図　剥片（黒曜石Ａ－１）（2/3）……32
第27図　剥片（黒曜石Ａ－２）（2/3）……34
第28図　剥片（黒曜石Ａ－２）（2/3）……35
第29図　剥片（黒曜石Ａ－２）（2/3）……36
第30図　剥片（黒曜石Ａ－２）（2/3）……37
第31図　剥片（黒曜石Ａ－２）（2/3）……38
第32図　剥片（黒曜石Ｂ）（2/3）……39
第33図　剥片（黒曜石Ｂ）（2/3）……40
第34図　剥片（黒曜石Ｂ）（2/3）……41
第35図　剥片（玄武岩）（2/3）……42
第36図　出土遺物の石材別割合……47
第37図　器種の割合……47
第38図　石材別器種の割合……48
第39図　ナイフ形石器長幅表……48
第40図　剥片の長さと幅の相関表……49
第41図　石核・剥片間接合……50

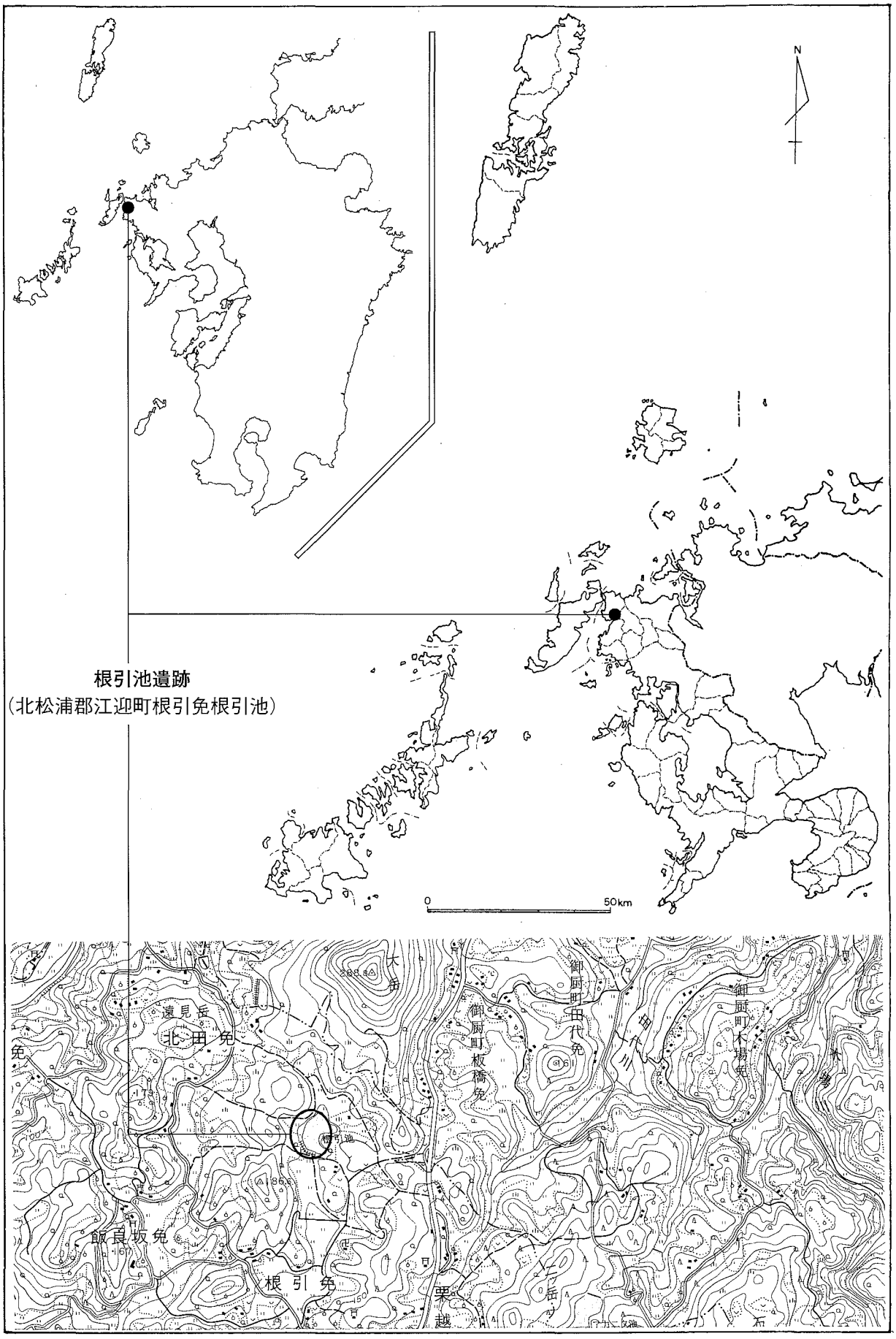
第42図　接合資料１……52
第43図　接合資料２……53
第44図　接合資料３～５……54
第45図　接合資料６～８……55
第46図　接合資料９……56
第47図　接合資料10……57
第48図　剥片間接合関係図……58
第49図　剥片間接合……59
第50図　剥片間接合……60
第51図　剥片間接合……61

表　目　次

表１　遺物計測表①……43
表２　遺物計測表②……44
表３　遺物計測表③……45
表４　遺物計測表④……46

図　版　目　次

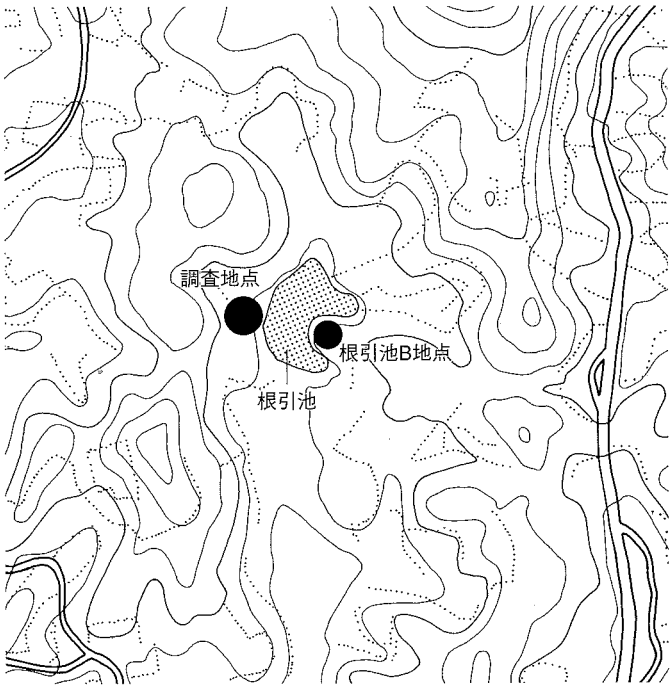
図版１　遺跡遠景・近景……69
図版２　土層・遺構……70
図版３　第４ユニットの状況……71
図版４　第１ユニット遺物出土状況……72
図版５　根引池Ｂ地点の土層状況……73
図版６　ナイフ形石器・彫器・スクレイパー……74
図版７　接合資料１……75
図版８　接合資料２……76
図版９　接合資料３～６……77
図版10　接合資料７・８……78
図版11　接合資料９・10……79


N
根引池遺跡
(北松浦郡江迎町根引免根引池)
0
50km
遠見岳
北田免
御厨町板橋免
御厨町田代免
御厨町木場免
飯良坂免
根引免
栗越
根引池

第1図　遺跡位置図

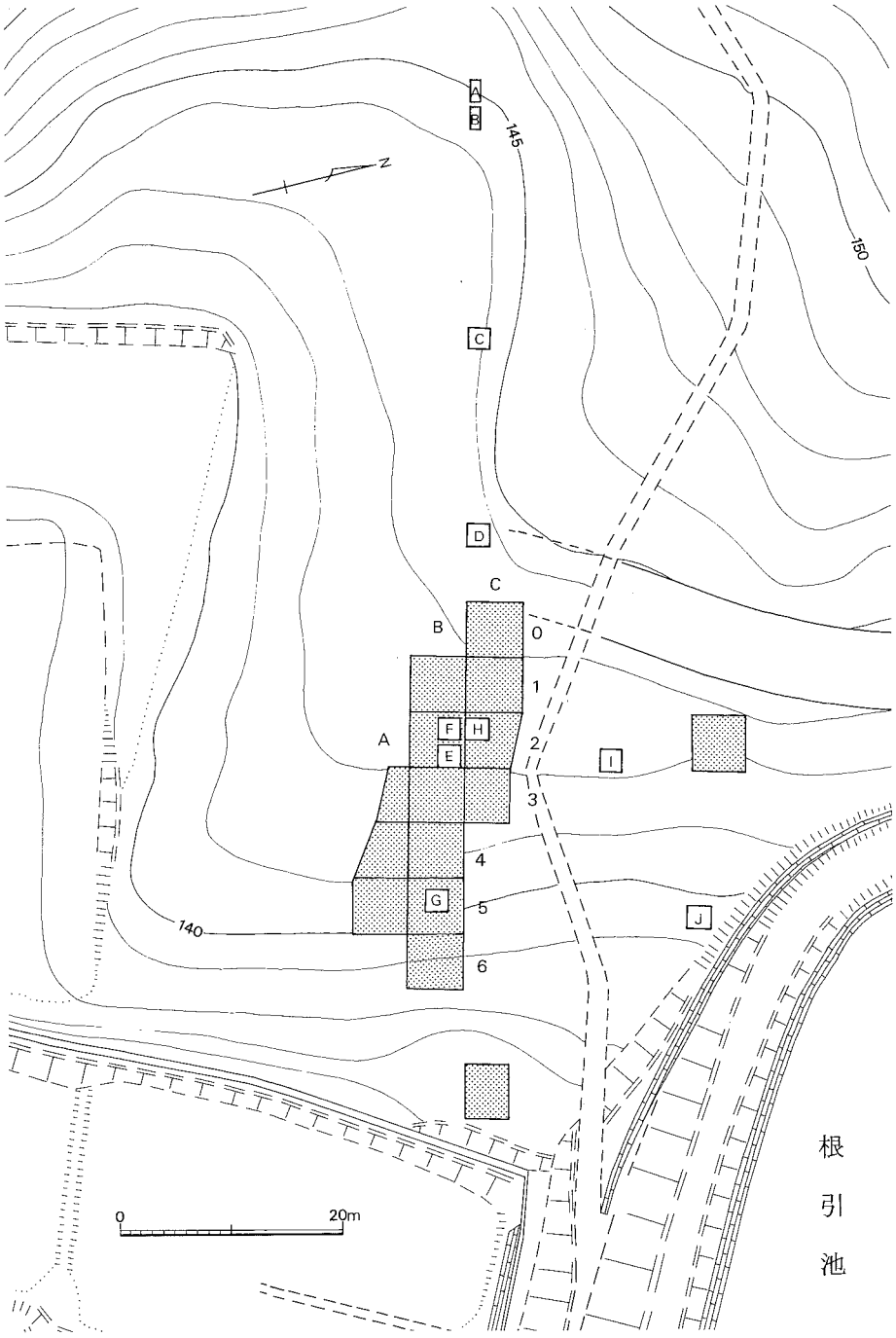
第１章　調査に至る経緯・方法

北松北部地区広域農道計画事業の一環として江迎・松浦間の農道取付け工事に伴い，根引池の周辺に道路が開通する計画があった。県文化課は，この計画に伴い平成10年度に根引池周辺の分布調査を実施した。根引池周辺は以前より旧石器時代の遺跡と知られ，特に池の東側に位置する舌状台地（仮に根引池Ｂ地点とする）からは多くの遺物が採集されている。今回，農道の取り付けが行われる場所は，根引池Ｂ地点の北西側，標高140ｍを測る東西に延びた丘陵から山麓に至る部分であった。分布調査時には，灌木が多く急傾斜面に見え，本来の遺跡中心からも外れるなど判断に苦しむところもあったが，池の周辺に立地することから，今回工事にかかる地域の範囲確認調査の必要性があると判断し，平成10年11月24日～12月３日まで，範囲確認調査をおこなった。範囲確認調査は，２×２ｍのグリッドを基本に北西側（本報告では西と表記する）からＡ～Ｊの10箇所設定した（第３図）。調査前の状況では，かなりの急傾斜面と考えられた地域であったが，灌木を取り除くと西側は緩斜面で東側にいくほど斜度がきつくなることがわかった。調査の結果，グリッドＡ～Ｄ・Ｊ区については遺物の出土は無く，表土下は玄武岩の地山に達する状況であった。ただし，緩斜面であるグリッドＦ～Ｈ区については押型文土器やナイフ形石器などが出土し，グリッド設定区域の東側に遺物包含層があることが判明した。Ｉ区については押型文土器が１点のみ出土し，周辺を精査する必要があるとの考えからこの地域を含めた380㎡を本調査の対象とした。平成11年度に本調査を実施することとなり，事業主体が県北振興局と江迎町，調査主体が江迎町教育委員会，県教育委員会が調査を実施することとなった。本調査は，平成11年６月７日～７月15日に実施し，農道のセンター杭を基本に５×５ｍのグリッドを設定することから始まり，南北にＡ～Ｃ，東西に０～５までの番号付けをおこないグリッド番号とした。範囲確認時のグリッドＩ区周辺については範囲確認調査時に１点押型文土器が出土したため範囲を拡張したが，遺物の出土は無く，周辺は堤の堤防構築の際の土取りなどにより削平された部分が多いことや，包含層自体も薄いことなどから調査は道路を中心におこなうこととなった。また，道路部分についても西側については，範囲確認調査の際に包含層が消滅していることが確認されていることや，東側についても急傾斜面であることから包含層自体が流失していることなどの事実から，調査範囲を限定せざるをえなかっ



第２図　根引池周辺図（1／10,000）

た。道路部分の調査ということもあって，東西に長い区域での調査となり，かなり限定された調査区となった。遺物の取り上げについては，遺物のほとんどが３層出土で旧石器時代を中心とすることから，３層の調査を重点的におこない，ドットマップを作成した。１・２層出土の遺物については，グリッド番号と層位で取り上げた。ドットマップとして記録した遺物の総数は，978点である。



A～Ｊは
範囲確認調査壙
を示す

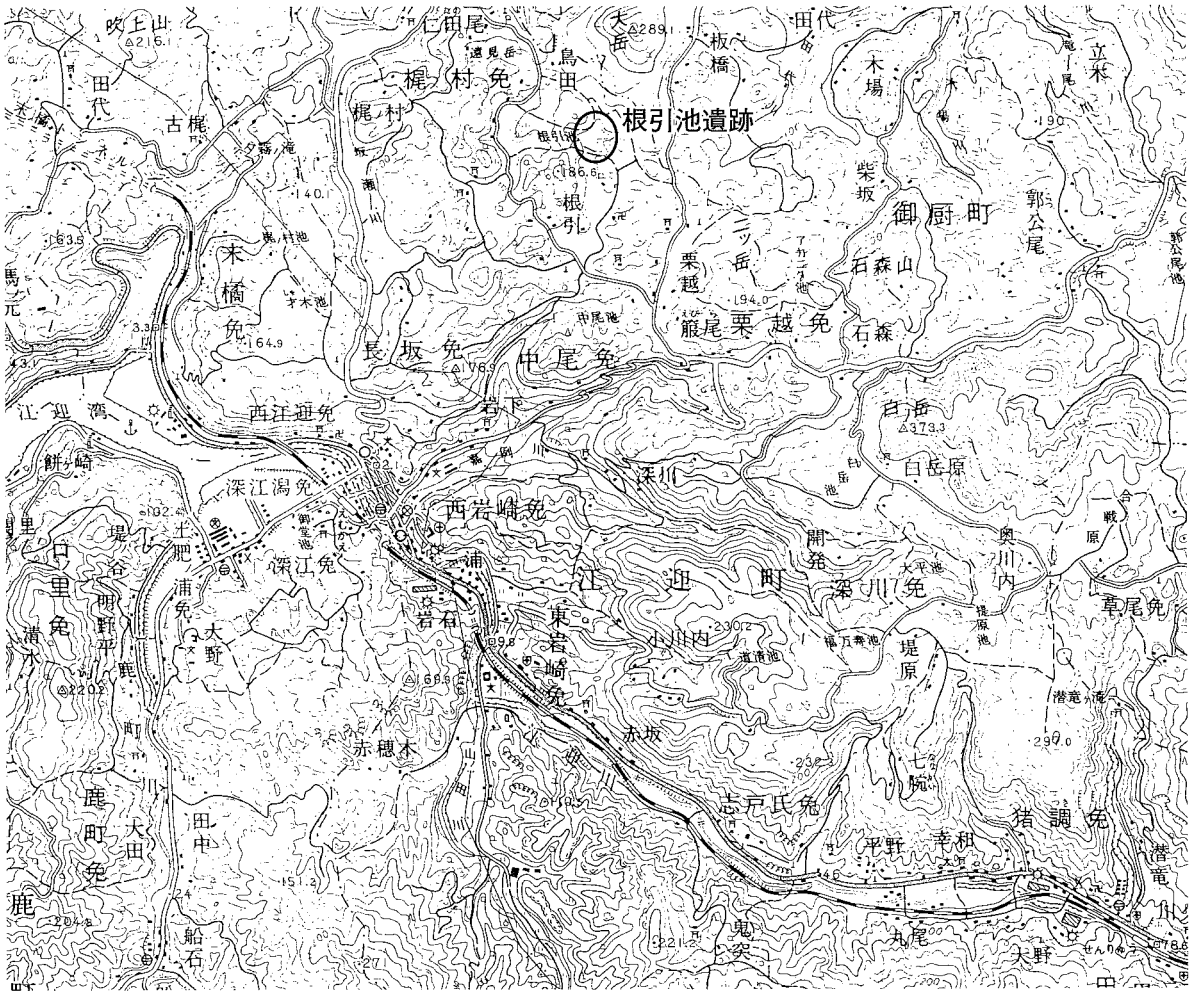
第３図　グリッド配置図（1／1,000）

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

江迎町は，北松浦郡のほぼ中央に位置している。東は佐々川断層線，潜竜鉱のボタ山，その北にある峰々と，潜竜の滝を結ぶ線で吉井町に境し，北は白岳，石森などの山々で松浦市と分界して，坂瀬川をはさんで田平町に連なる。南は鷲尾岳の連山を以て佐々町に接し，西は江迎川をはさんで鹿町町に隣している。またその一部は開けて江迎湾となり，平戸海峡をへだてて平戸島を望んでいる。

江迎の基盤となる地層は，約4000万～5000万年前の堆積による水成岩（砂岩）で，地質時代の新生代第三紀に属する。その後40万～50万年前の更新世に，地殻の弱線に沿って火山活動が旺盛となり，多大の流動性溶岩（玄武岩）を噴出した。いわゆる北松玄武岩台地である。籠尾，草ノ尾，根引，梶ノ村より，御厨，南田方面に広がる高さ200m前後の赤土の台地は，この溶岩台地の表面である。この溶岩が冷却するに伴って江迎川の浸食が始まり，現在のようなＶ字状の浸食谷を形成した。この溶岩台地の側面を，江迎川が浸食する面はかなりの急傾斜を呈し，基盤の水成岩の面になると緩傾斜となる。これは河川の浸食に対する，火成岩と水成岩の岩質の相異からきたもので，溶岩の赤土の地域になると傾斜が甚だしく，峡谷的な状態となる。江迎町より御厨に行く途中の谷（中尾谷）がその良い例である。



第４図　根引池遺跡周辺の地形図（1／50,000）

第２節　歴史的環境

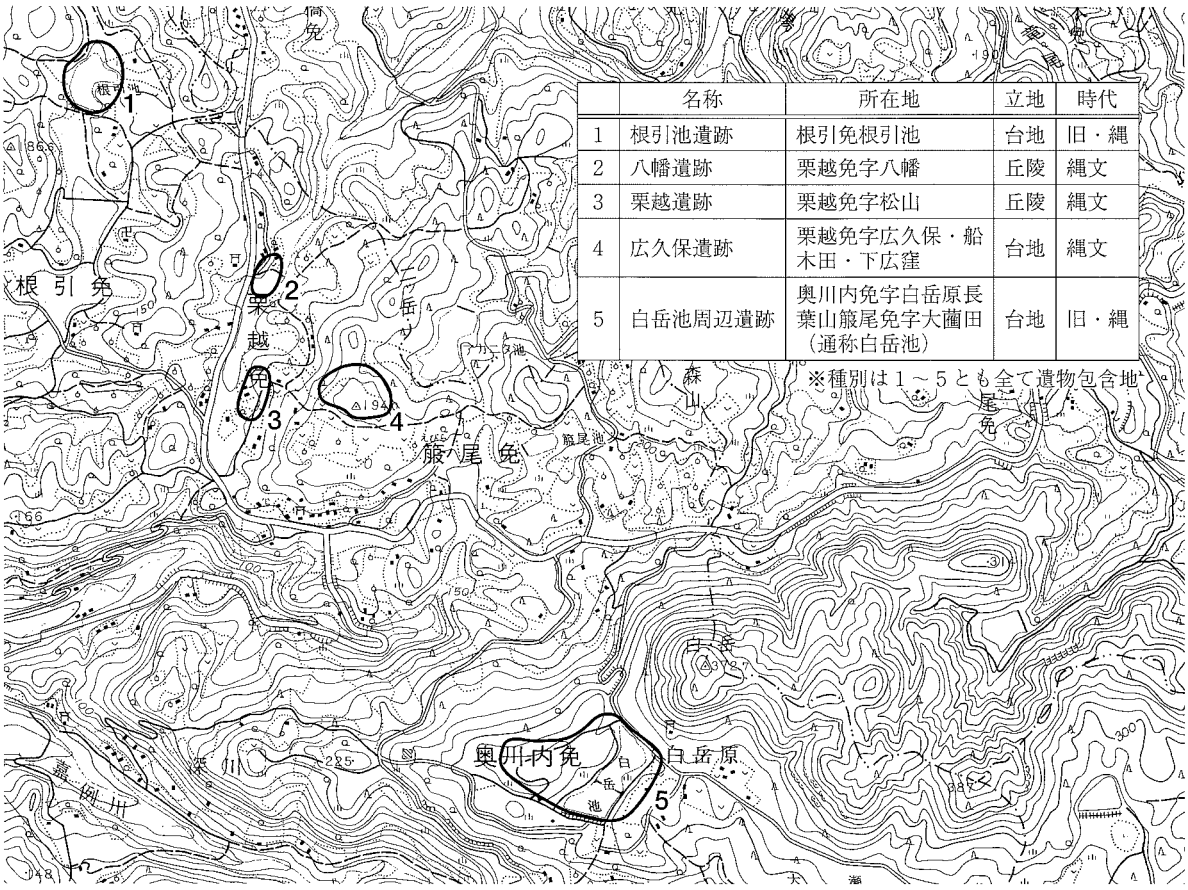
江迎町の歴史的環境については，「広久保遺跡」（古門・渡辺編1998）の報文に，県北における時代別の遺跡分布および記述がまとめてあるので，ここでは根引池遺跡の周辺遺跡として特に広久保遺跡，白岳遺跡（村川編1985）をとりあげる。

【広久保遺跡】

江迎町栗越免所在。江迎町の北東部に位置する。二ツ岳から派生する丘陵には標高180mの等高線に沿って東西200m，南北150mほどの平坦部が形成されており，その一帯が広久保遺跡として周知されている。ここより北西方面に直線距離で約1.5kmほど行った地点に根引池遺跡がある。出土遺物は，石器については，ナイフ形石器などの旧石器から，石槍などの縄文時代草創期に所属するもの，縄文時代早期（打製石鏃・掻器・削器類が主体を占める）のものが出土している。土器は，県北の調査では初めて出土した縄文早期中葉末の手向山式土器など，全体で264点が出土している。遺構は，集石遺構とこれも県北で初めて煙道付き炉穴（連穴土坑）を確認した。

【白岳遺跡】

江迎町奥川内免所在。白岳は北松半島の北方台地にあり，江迎，松浦市御厨，吉井町の三市町村にまたがる373.7mの山である。調査地は，標高250～254mに位置し，湧水地点に土堤を築いて作った溜池の周辺に立地する。遺物は，ナイフ形石器３点，スクレーパー６点，使用痕ある剥片５点，打面再生剥片１点，石鏃１点，剥片72点，砕片９点，石核３点等である。



	名称	所在地	立地	時代
1	根引池遺跡	根引免根引池	台地	旧・縄
2	八幡遺跡	栗越免字八幡	丘陵	縄文
3	栗越遺跡	栗越免字松山	丘陵	縄文
4	広久保遺跡	栗越免字広久保・船木田・下広窪	台地	縄文
5	白岳池周辺遺跡	奥川内免字白岳原長葉山箙尾免字大薗田（通称白岳池）	台地	旧・縄

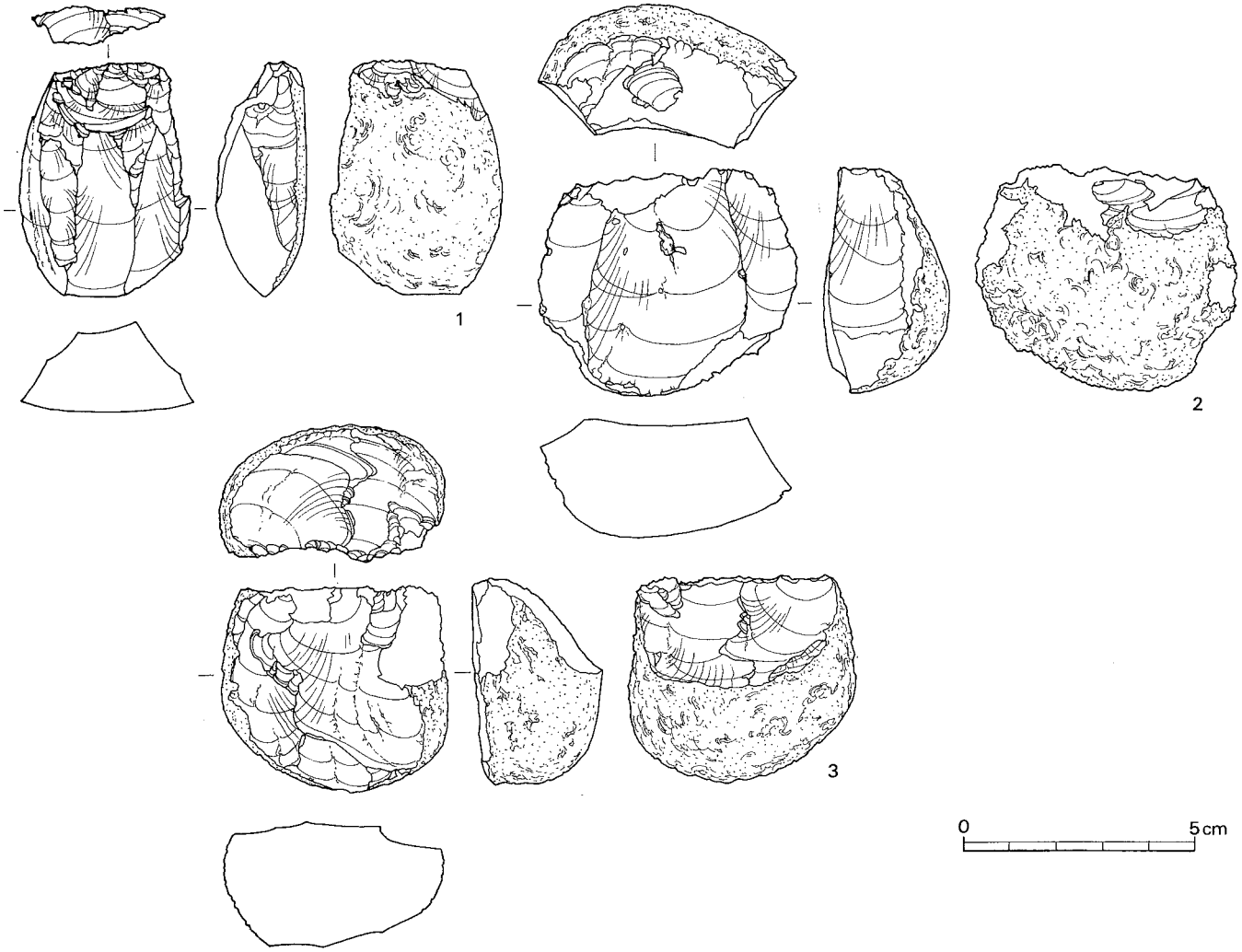
※種別は１～５とも全て遺物包含地

第５図　根引池遺跡と周辺の遺跡・地形（1／25,000）

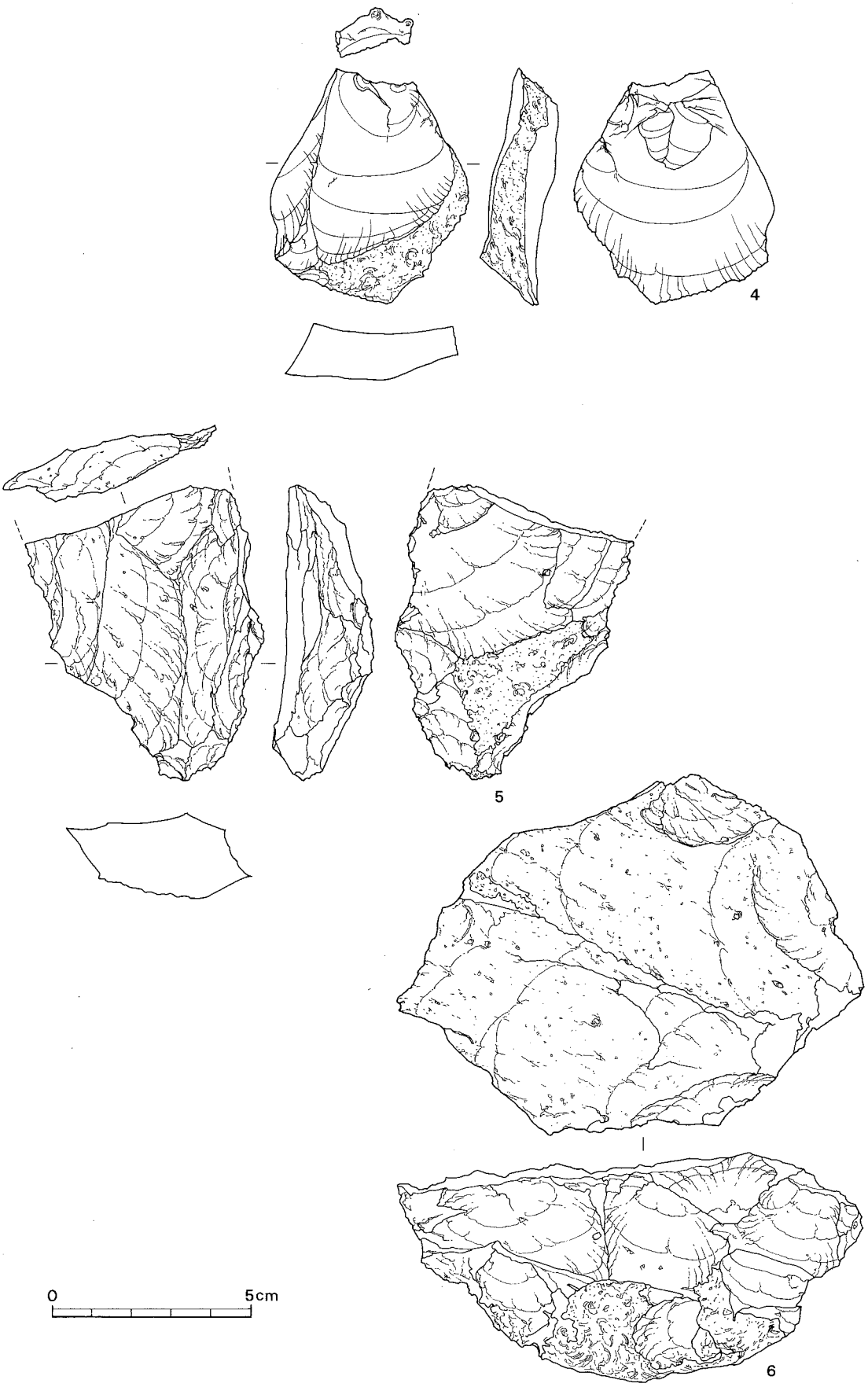
【根引池遺跡Ｂ地点】

今回の調査区以外の根引池周辺地でも，遺物が６点採集された。ここでは本調査地点を根引池遺跡として報告し，採集地点をＢ地点と称して若干ではあるが報告する。Ｂ地点は，本調査地点から北の方面に所在し，踏査時は煙草の畑地であった。現地は池の方に向かって下る緩やかな傾斜地であり，遺物の採集箇所は畑地と道との切り通しの断面部分であった。遺物の出土状況は，明黄色粘質土層（本調査地点で確認した第Ⅲ層）から１が断面採集された。２，３は表採である。１の採集箇所より約１ｍ下の粘土層からは４，６が断面採集された。５は４，６の採集地点近くの礫混じりの粘土層から断面採集された。本地点の層位は，二次堆積の可能性も否めないが１の出土状況から本調査地点の層位と同じ状況であると考えられる。採集した遺物は，４のフレイク以外はすべて石核である。

1 は漆黒色の黒曜石を素材とする石核である。打面を斜めに形成し，縦長剥片を得たものである。**2** の石核は，茶色の流理紋が入った黒曜石製で，わずかに紅色の斑が入る。図面上では見通した角度上わかりにくいが，打面は急傾斜を呈する。剥片剥離作業は後述の３と異なり，剥離面と剥離面の稜を落としながら行っている。**3** は茶色の流理紋が入った黒曜石製の石核である。打面が斜めに形成され



第６図　根引池Ｂ地点採集の石器（２／３）



第７図　根引池Ｂ地点採集の石器（２／３）

ており，非常に薄い幅広の剥片を剥離している。

4はフレイクであり，青灰色を呈した黒曜石である。打面は急傾斜を呈しており，縁辺に剥離痕・使用痕などは認められない。**5**は玄武岩を石材とした石核である。剥離面の数および方向は変異に富み，また剥片剥離作業の頻度が高く，かなり薄い。**6**は玄武岩製の石核で円盤状を呈する。背面に自然面を残している。４～６は１～３よりも約１ｍ下の粘土層から採集された。

【引用・参考文献】

江迎町教育委員会1968「江迎町の自然」「江迎町の歴史」『江迎町郷土誌』

江迎町教育委員会1998『広久保遺跡』江迎町文化財調査報告書第１集

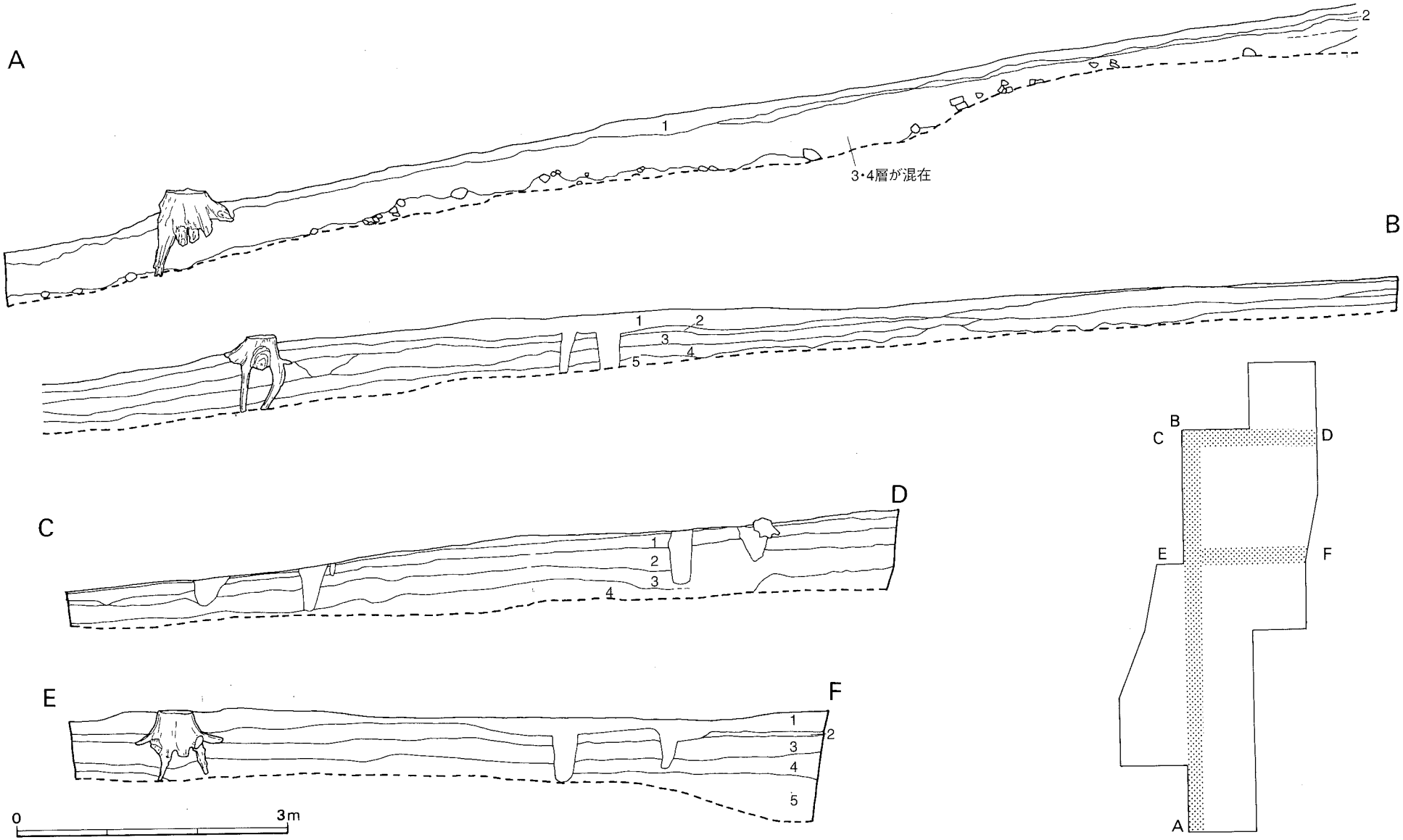
長崎県教育委員会1987「白岳遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ｖ』長崎県文化財調査報告書第86集

長崎県教育委員会1995『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第119集

第３章　調　　査

第１節　層　　位

北松（北松浦郡）地域はいわゆる北松玄武岩地帯の上にあるため，基盤岩近くは拳大の玄武岩円礫が基盤から遊離した形で出土する。したがって，この地域では通常この段階で調査は終了することになる。北松地区一帯では，基盤の玄武岩と表土との厚さは薄く，調査の際には新旧混在して遺物が出土することから，層位によって時代の新旧を理解するのは困難な状況にある。ただし，鞍部などには玄武岩風化土層が厚く堆積することがあり，平戸の堤西牟田遺跡のようにいくつかの文化層が検出され，ＡＴも検出されるなど，良好な堆積状況を呈する場合もある（萩原1985）。本遺跡では，表土である１層から，５層まで層位が確認されたが，南側では基盤の玄武岩と表土までの層厚は薄く，３層直下に基盤岩があり表土から基盤までの層厚は30cm位であった。調査区，北側では表土から基盤まで層厚１ｍ30cmを測り，調査区の北側に向けて基盤が傾斜し，傾斜面に沿って玄武岩風化土層が厚く堆積した状況を呈している。調査区の東西方向は，現在も東に向かって傾斜しているが，基盤岩の方向もほぼ現在の傾斜角と同様に東側に傾斜する。ただし，調査区の０列から３列までは緩傾斜面であるが，４列以降は急傾斜面となり，遺物も拡散する傾向にある。また，東側では３層と４層以下の土層が混入した状況を呈し，土層的にも乱れた状況を呈する。以下土層について説明する。



第８図　土層図（Ｓ＝1／60）

1層　表土（腐植土）層厚10cm前後を測る。

2層　層厚５～20cm前後で灰白色を呈し，砂粒状の堆積物。上部が削平された所が多く，本来現況よりも幾分層厚は厚いものと思われる。縄文早期押型文土器を包含する。

3層　明黄褐色粘質土。弱粘性で幾分フカフカした状況を呈する。礫の混入はない。旧石器時代の遺物はこの層から出土。上部に押型文土器を若干含む。

4層　灰白色粘質土層。３層より粘性が強く，白っぽい。一部では３層と４層上部との区別が不明瞭な所もある。旧石器時代の遺物が若干出土するが，３層に帰属するものが，落ち込んだものと考えられ，本来は無遺物層と考えられる。

5層　赤黄褐色粘土層。完全に粘土化しており，下部にいくほど赤味と硬度を増し，堅く締まった層になる。下部になると玄武岩風化礫が出土し始める。無遺物層。

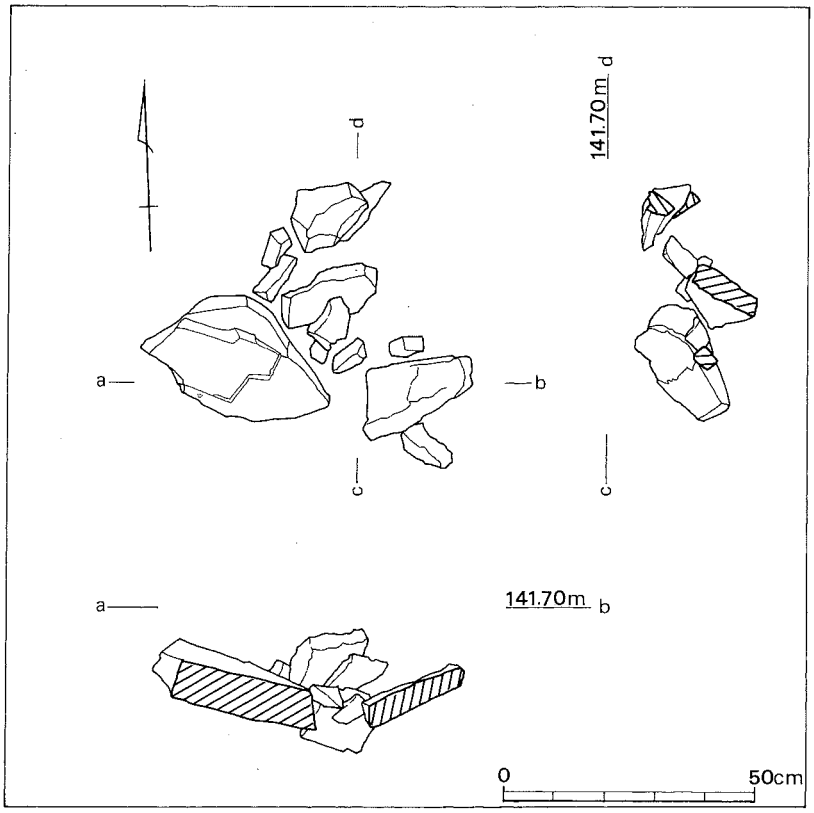
ここで調査の主対象となる３層は，５・４層が谷間に堆積し，ほぼ水平堆積した後に堆積したものと思われ，Ｃ－０・１区，Ｂ－１～３区ではかなり良好な堆積であった。先にも述べたようにＢ－４～５区は３・４・５層が混在した層になり，層位的にはかなり掴みにくい状況であった。このことからも，この付近が基盤岩の傾斜変化点にあたるものと思われる。

本遺跡の主体となる旧石器時代の遺物のほとんどは３層からの出土であり，生活面が４層上にあったと判断され，若干出土した縄文早期の生活面は３層上にあったものと判断される。中・前期旧石器の遺物の出土が４・５層から期待されたが，遺物の出土は皆無であった。層位的には遺物のほとんどが３層一括であり，３層堆積の時間幅を無視するならば極めて一括性の強い石器群として捉えることができよう。これを検証するためにも遺物分布，遺物についてその特徴から検証する必要がある。

萩原博文1985『堤西牟田遺跡』平戸市教育委員会

第２節　遺　　構

調査区中央部より，集石遺構が１基検出された。３層下部に配置されており，扁平の玄武岩礫を左右対称に斜めに２枚置き，その周辺に玄武岩の小礫を置いた状況であった。大きな礫で30cm四方で，赤く変色しているが，玄武岩そのものの変色なのか，あるいは被熱痕なのかは定かではない。周辺にカーボン・焼土は検出できなかった。３層は基本的に礫を含まない



第９図　集石遺構図

層であることや，基盤近くで出土する玄武岩がほぼ円礫であるのに対し，扁平な玄武岩を使用している点で，厳選されたものを使用したことが窺われる。また，３層下部，４層直上から検出されており，この面が旧石器時代の生活面であったと考えられる。

第３節　遺跡出土の石器素材

遺物分布・石器の説明，表・グラフに石器素材を記すにあたって，黒曜石等の原材について記すこととする。本遺跡出土の旧石器時代の遺物素材は，ほぼ黒曜石で占められるがその他に玄武岩・玉髄・グリーンタフがある。玄武岩までは積極的に石器素材として利用されているが，玉髄は散見される程度で素材の主体とはなっていないのが現状である。従って，素材別の分布については玉髄については割愛した。素材の主体となる黒曜石は，いくつかの個体資料があり供給源が複数あった可能性が示唆できる。このことから黒曜石の原産地として本遺跡と至近距離にある牟田産の黒曜石と，本遺跡の黒曜石の比較をおこなう必要があるとの見地から，本遺跡出土の黒曜石の観察と，牟田産黒曜石との比較をおこなう。

遺跡出土の黒曜石

長崎県には黒曜石の原産地が数多く知られ，それぞれの黒曜石が多様な特徴を備えていることから，肉眼観察による大まかな原産地の特定もなされている。根引池遺跡出土の黒曜石も肉眼観察から，色調・外皮面・風化面について幾つかの特徴があり，接合においても有功な指標となっている。この個々の特徴が原産地の相違からくるものか，あるいは肉眼観察で相違するとしたものが一箇所の原産地で出土するものなのかを照合する必要性があると考える。本来理化学的な方法で判断する必要があるが，今回は遺跡出土の黒曜石の特徴と，遺跡から至近距離にある黒曜石原産地，牟田産の黒曜石との肉眼観察による比較のなかで検討していく。

本遺跡出土の黒曜石についてその特徴を列挙すると大きく次の３種に分類できる。

①黒曜石Ａ－１　漆黒色で不純物がなく亜円礫を呈する。小礫の外表皮は細かい自然面に覆われるが，大形のものは凹凸が激しい。

②黒曜石Ａ－２　基本的に漆黒色であるが，縞流理が入りその部分だけが風化すると薄い茶色に変色する。また表面の風化部分も薄い茶色でコーティングした様になる。ただし，流理と流理の間は漆黒色を呈することから，破片だけでは判断がつかない場合がある。

③黒曜石Ｂ　青灰色を呈する。青味が強く，風化すると表面が灰色を帯びる。

以上，遺跡出土の黒曜石は肉眼観察によれば３つに大きく分類できる。ただし，黒曜石Ａ－２の縞流理や，薄い茶色は風化によって現出するものと思われ，新しく原石を割った時点では漆黒色を呈し，黒曜石Ａ－１とＡ－２の色の相違は確認は出来ない。

牟田産黒曜石の特徴

松浦市の星鹿半島には牟田第一と牟田第二とされる黒曜石原産地が知られている（藁科・東村1994）。

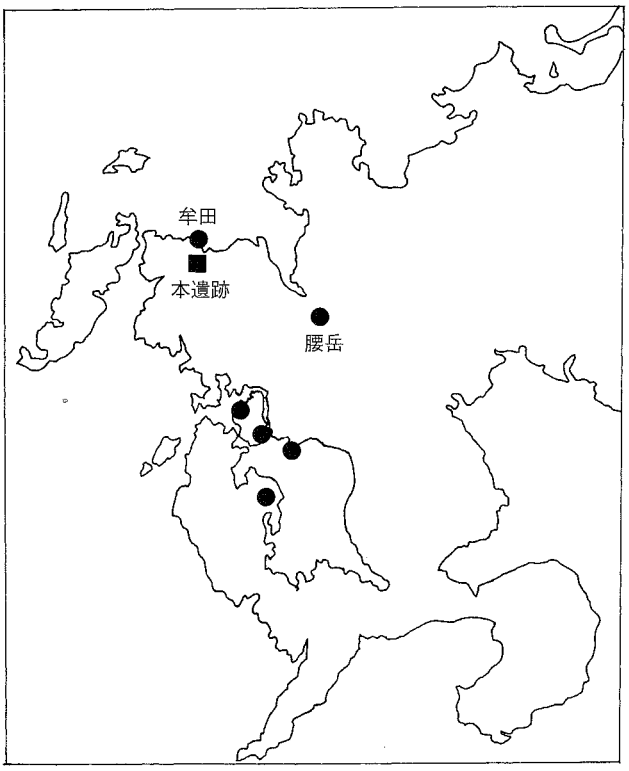
牟田の黒曜石原産地は，本遺跡との距離が約５kmと一番至近距離にあることから，遺跡に供給された黒曜石の多くは，牟田産の黒曜石で占められているものと予想できる。牟田産の黒曜石については坂田邦洋の研究によれば，「牟田産の黒曜石は腰岳産の黒曜石よりさらに良質でほとんど不純物を含まない。九州で最も良質の」と形容されている（坂田1982)。今回，牟田の黒曜石を採集することができたことから採集品の数に限定されるが，遺跡出土の黒曜石との対比をおこなうべく，牟田産黒曜石の特徴を列記したい。今回採集した資料は大きく①～③の３つに分けることができる。

① 漆黒色黒曜石の一群で，不純物の混入がなく，坂田の示したいわゆる牟田産黒曜石である。本遺跡分類の黒曜石Ａ－１・Ａ－２である。縞流理が入るものが含まれると思われるが，風化した段階で薄い茶色が現出することから原石そのものを現段階で剥離しても本報告分類の黒曜石Ａ－１に相当するかあるいはＡ－２かは即断できない。

② 青色を基調とする黒曜石で，風化するとやや灰色をおびる。これは本遺跡出土の黒曜石Ｂにあたる。このような青灰色を呈する黒曜石は淀姫系の黒曜石に多く，青灰色の黒曜石の石器については淀姫系と即断されるケースが多かったようである。今回の採集品の中にこの青灰色系の黒曜石が見出せたことは，少なくとも本遺跡出土の青灰色黒曜石は，至近距離である牟田産のものである可能性を持つものと思われる。

③ 漆黒色地に赤茶色の縞状の模様が入るものがある。この黒曜石についてはすでに以前から知られていたが，同類のものとして山下が大崎半島において発見し報告した黒曜石に類似するものであろう（山下1998)。

以上，大きく３つに分類できる黒曜石が牟田産の黒曜石の中にあり，本遺跡出土の素材となるもののほとんどが牟田産の黒曜石に認められるといっても過言ではなかろう。後期旧石器時代の多くの遺跡では，原産地が一箇所にほぼ限定される遺跡は少なく，遠隔地からの石材の搬入が頻繁におこなわれていたとされる。本遺跡の状況は，原産地に近いという条件のもと，一原産地でほとんどの黒曜石の供給を賄っていた可能性がある遺跡として特筆されるものであろう。ただし，本遺跡にも伊万里の腰岳産の黒曜石が４，５点出土していることから，他地域との交流をもっていたことは事実である。今後，山下が指摘するように，一原産地＝一黒曜石の認識は捨てる必要があり，根引池遺跡の原石についても更に理化学的方法で牟田産黒曜石と本遺跡出土の黒曜石について追求しなければならない。



第10図　遺跡周辺の黒曜石原産地

本報告中においては黒曜石Ａ－１・Ａ－２・黒曜石Ｂを基本に黒曜石を分類し，表・グラフに標記する。ただし，Ａ－１とＡ－２の分類については小片になると判断が付きかねる場合が多いため，単にＡと標記する場合もあり，全体の遺物について厳密に分離することはできない。玄武岩についてはＣとして記号化する。

坂田邦洋　1982『九州の黒燿石』史学論叢第十三号

藁科哲夫・東村武信　1994「５　百花台・百花台東遺跡出土のサヌカイト・黒燿石製遺物の原材産地分析」『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告　第８冊

山下　実　1998「赤い模様の黒燿石」『旧石器考古学』57　旧石器文化談話会

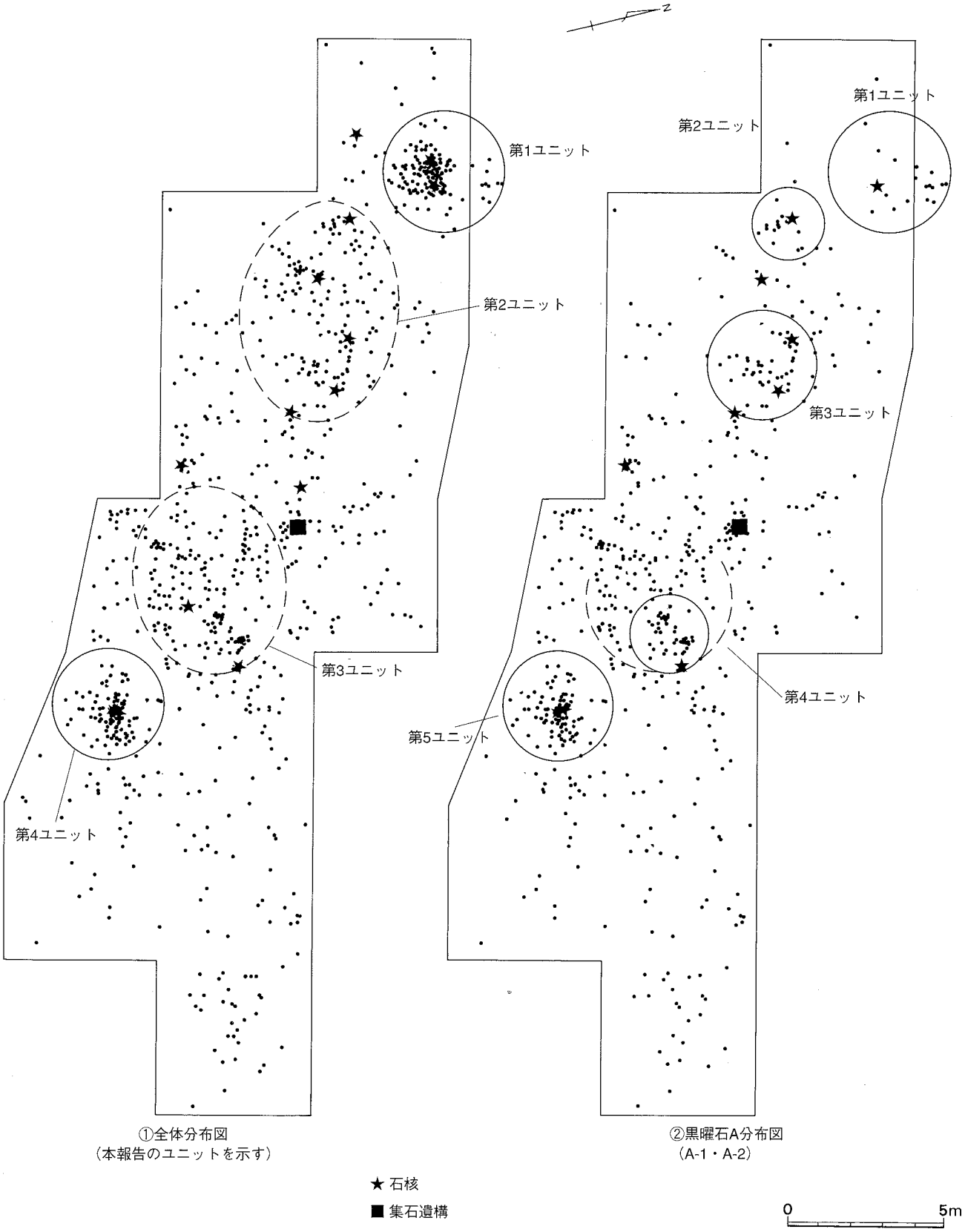
第４章　遺物分布

第１節　石材別遺物分布

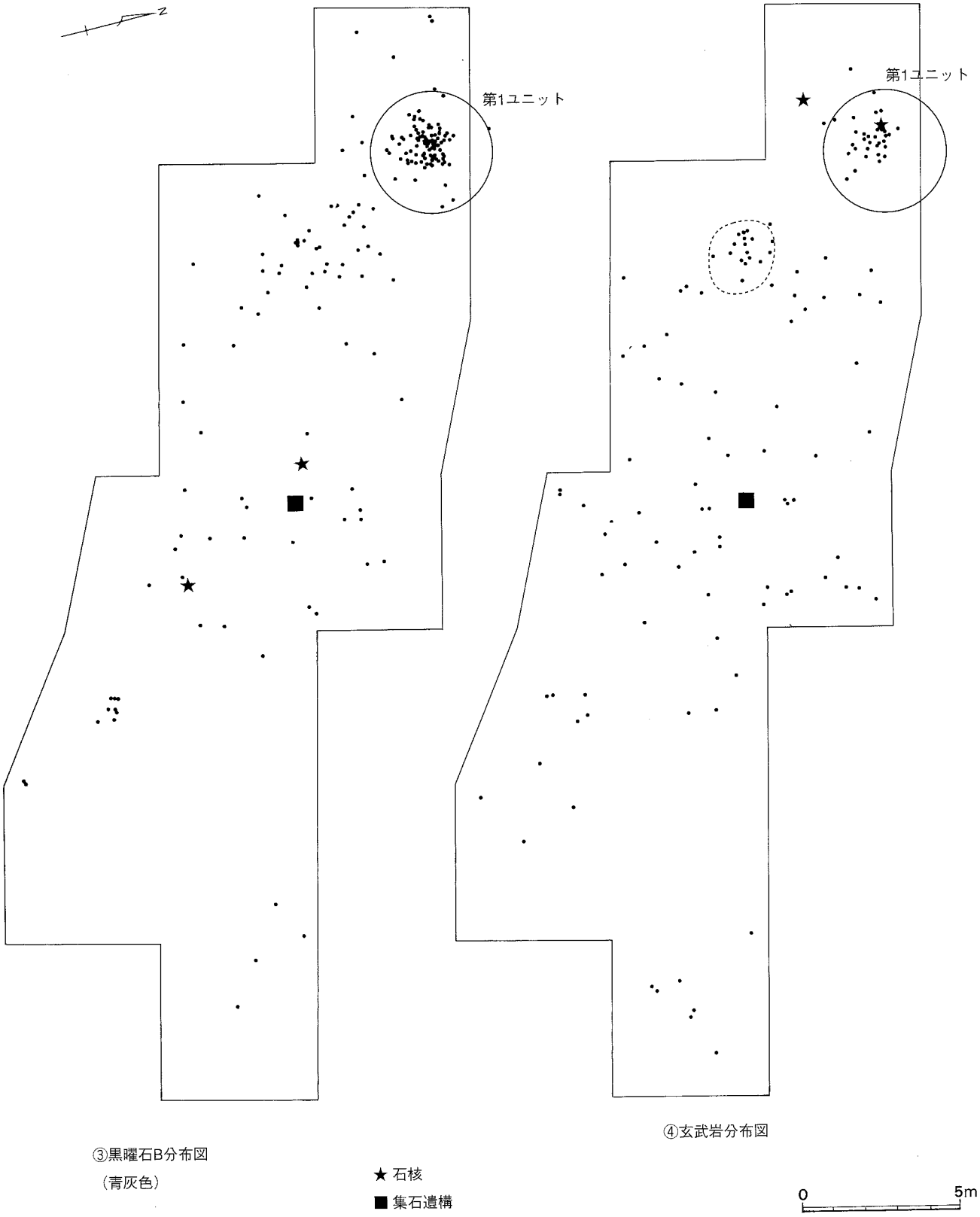
ドットマップとして記録した遺物は978点にのぼる。これらの全体の分布と，石材別の分布を第11図に示した。全体図では調査区全体にかけて遺物が出土しているが，東側（図面下側が東）では分布がやや散在的になっている。これは地形的に東側にいくほど傾斜が急になり，当時の生活域においても避けられた地域であった結果であろう。遺物分布が濃厚な部分は緩傾斜面，あるいはほぼフラットな地形であることや，石核を中心とした接合関係が認められることから，グリッドの４列以西がおもな生活圏であったことが想像できる。さて，全体分布のなかでグリッド４列以西については幾つかのユニットを設定した。この設定をするにあたっては，石材別に分布図②～④を作成し，各々のユニットを重ねることで全体の分布図の中で最終的にユニット設定をおこなった。ここにおけるユニットは，石核と剥片との接合関係において設定したもので，各ユニット＝剥片剥離作業の場として捉えることができる。また，ここではチップ類も含めたため，黒曜石Ａ－１とＡ－２の分類はひじょうに困難であるため黒曜石Ａとしてまとめた。

○黒曜石Ａの分布からみた集中区　個体的には接合資料等を考慮し，５つのユニットを設定した。第１ユニットでは分布は希薄であるが，確実に一つの分布域が独立していることや，黒曜石Ｂ・玄武岩の分布なども考慮し範囲を設定した。第２ユニットは，黒曜石Ａ－２の石核を中心とする接合関係のなかで捉えた。第３ユニットは，接合関係等は希薄なものの，石核と剥片の局所的な集中からユニットとして扱った。第４ユニットについては，石核と剥片の集中と接合関係が際だつことからこの部分をユニットとして扱った。なお，この周辺の大きなまとまりは，第４ユニットの広がりとして捉えた。第５ユニットは第１ユニットと同様石核を中心として際だった遺物の集中と，接合関係からユニットとして範囲を設定した。黒曜石ＡについてはＡ－１とＡ－２の分離ができていないため，全体分布のユニットと重なってしまった。おおまかでもさらに細分することができるものと思われるが，今回は，黒曜石Ａとして一括して分布を示した。

○黒曜石Ｂの分布からみた集中区　１つのユニットのみで構成され，局所的に集中する。ユニット東側に散漫的な広がりと，石核が２点場所を異にして存在する。第１ユニットは石核を持たない，剥片



第11図　遺物分布図（石材別）

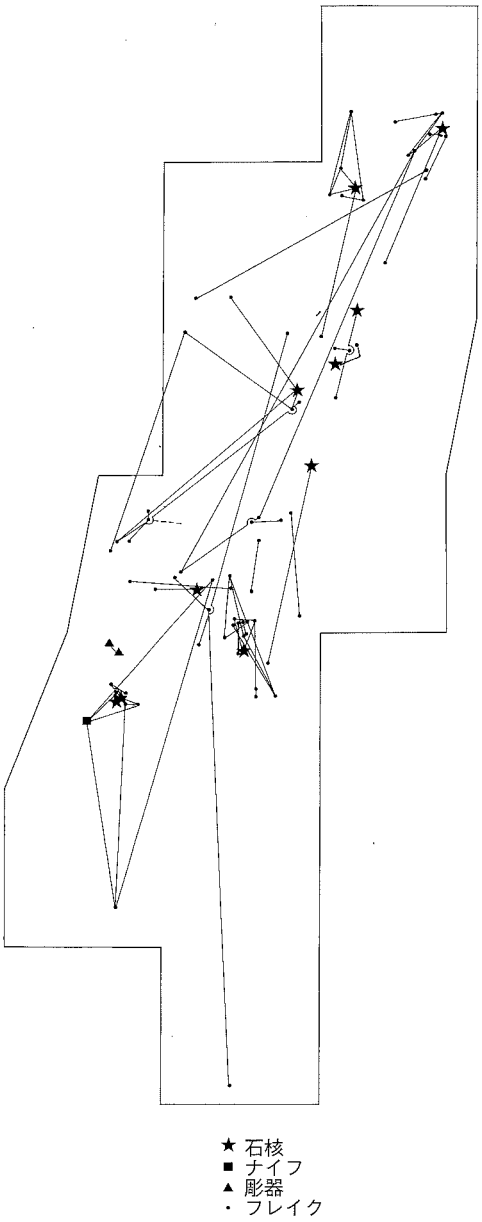


第12図　遺物分布図（石材別）

とチップの集中ユニットとして位置づけできる。

○黒曜石Cの分布からみた集中区　黒曜石Bの分布同様，1つのユニットのみである。石核と剥片の接合資料で構成される。破線で囲んだ部分は縄文時代の剥片とみられ，剥片が不定形で石材的にみても第1ユニットの玄武岩に比べ雑なものが集中することから縄文時代の所産と断定した。

○全体分布　以上3つの石材から全体の分布図と重ね併せ，今回の調査区全体としてユニットを設定したものが①の全体の分布図に示した4つのユニットである。以後本報告のユニットについては全体分布図の第1～第4ユニットついて述べるものとする。ユニット各々の構造的な特徴については後述する。



第13図　接合関係図

第2節　接合資料の分布

接合資料は石核と剥片接合10例，剥片間接合（折断面接合を含む）14例，石器再生に関わる接合（グレイバーの刃部再生）1例の合計25例をみる。接合は20m以上の距離をおいて接合するものを最大に，多くのケースがある。分布図から，第1ユニットを中心にする接合が第2ユニットに及ぶもの，第2ユニットの接合が第3ユニットに及ぶケース，第3ユニットに中心を持つものが第4ユニットに及ぶもの，第1ユニットの接合が第3ユニットに及ぶケースなど，各ユニットは相互に関連しあう状況がみて取れる。このなかで第4ユニットの接合は比較的安定しており，ユニット内に納まっている。このように，ユニット間での接合がある以上，これらのユニット群はほぼ同一時期に形成された可能性を持つものと接合資料からも指摘できよう。

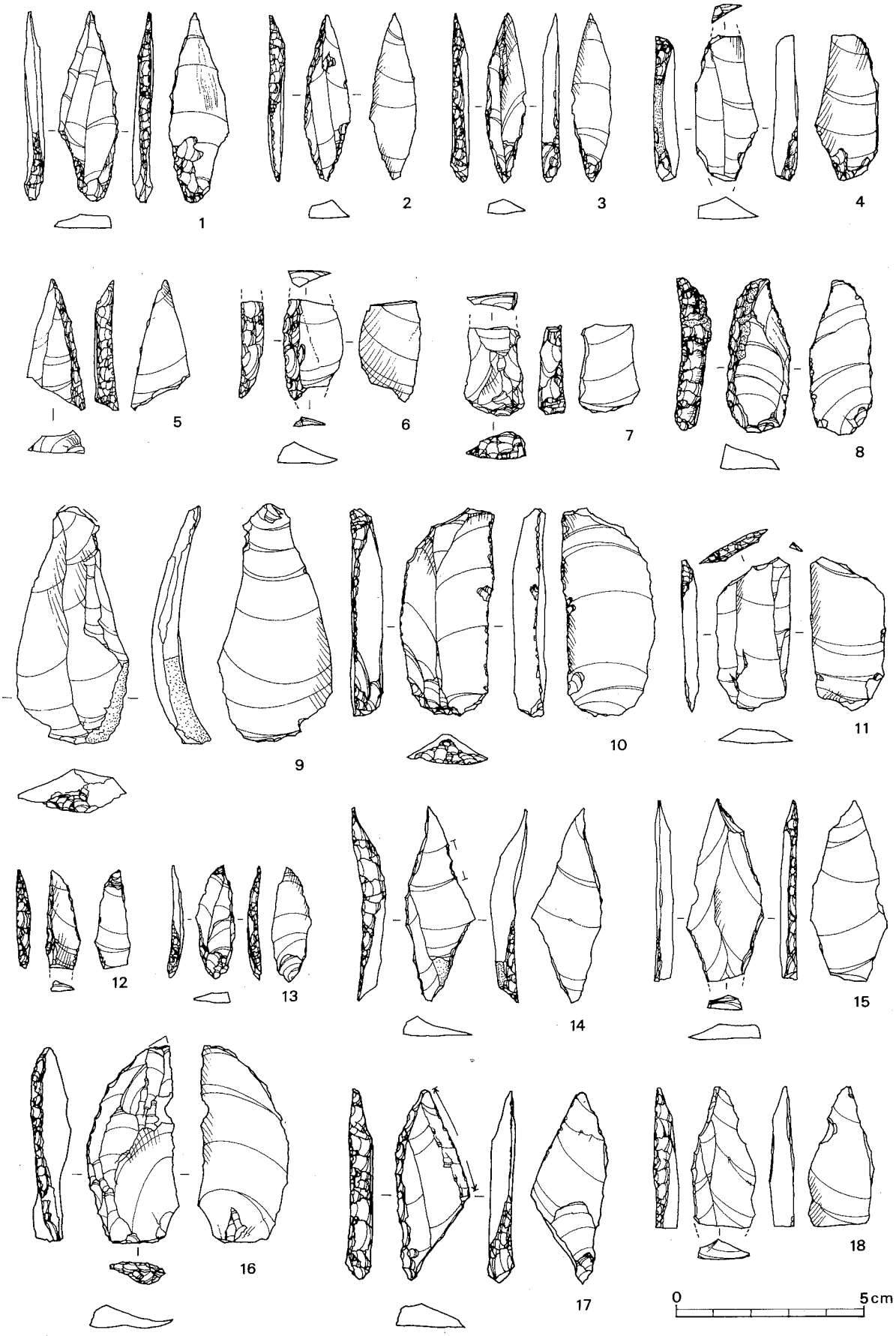
第5章　遺　　物

根引池遺跡では3層を中心に旧石器時代の遺物が出土しており，層位としては一括性の強い一群といえる。ただし，風化土層である以上，3層の堆積がどのくらいの時間幅をもっているのかについては判断に苦しむところであり，3層中でどのような石器群がひとつの単位となるのか，また，石器群相互の時間的先後関係についても，石器や剥片剥離を一つの判断基準にせざるをえないのが現状である。ただし，3層出土の遺物は，細石器・剥片

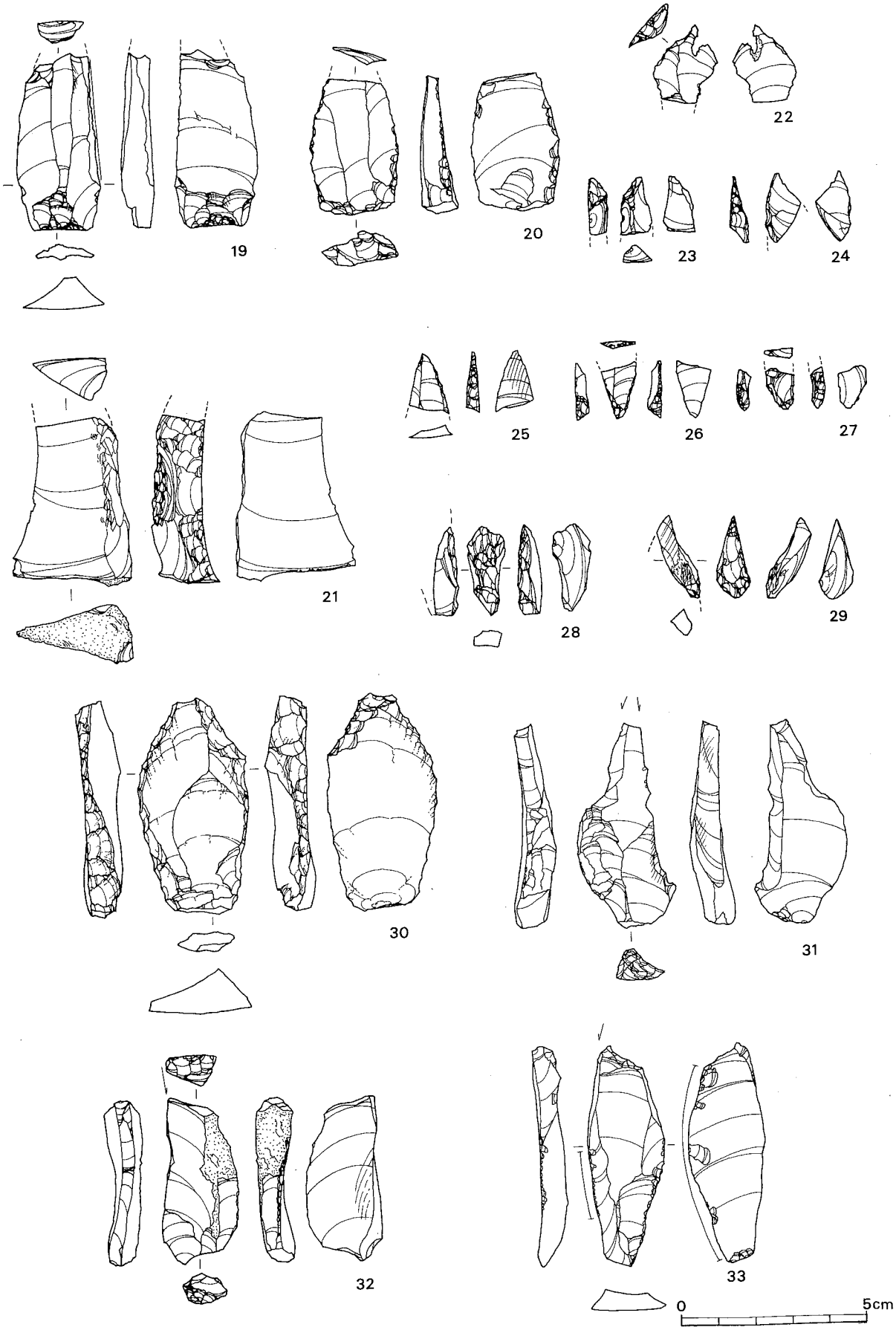
尖頭器・台形石器などを含まないナイフ形石器を中心とするものであることから極めて一括性の強い資料と判断できる。

ナイフ形石器

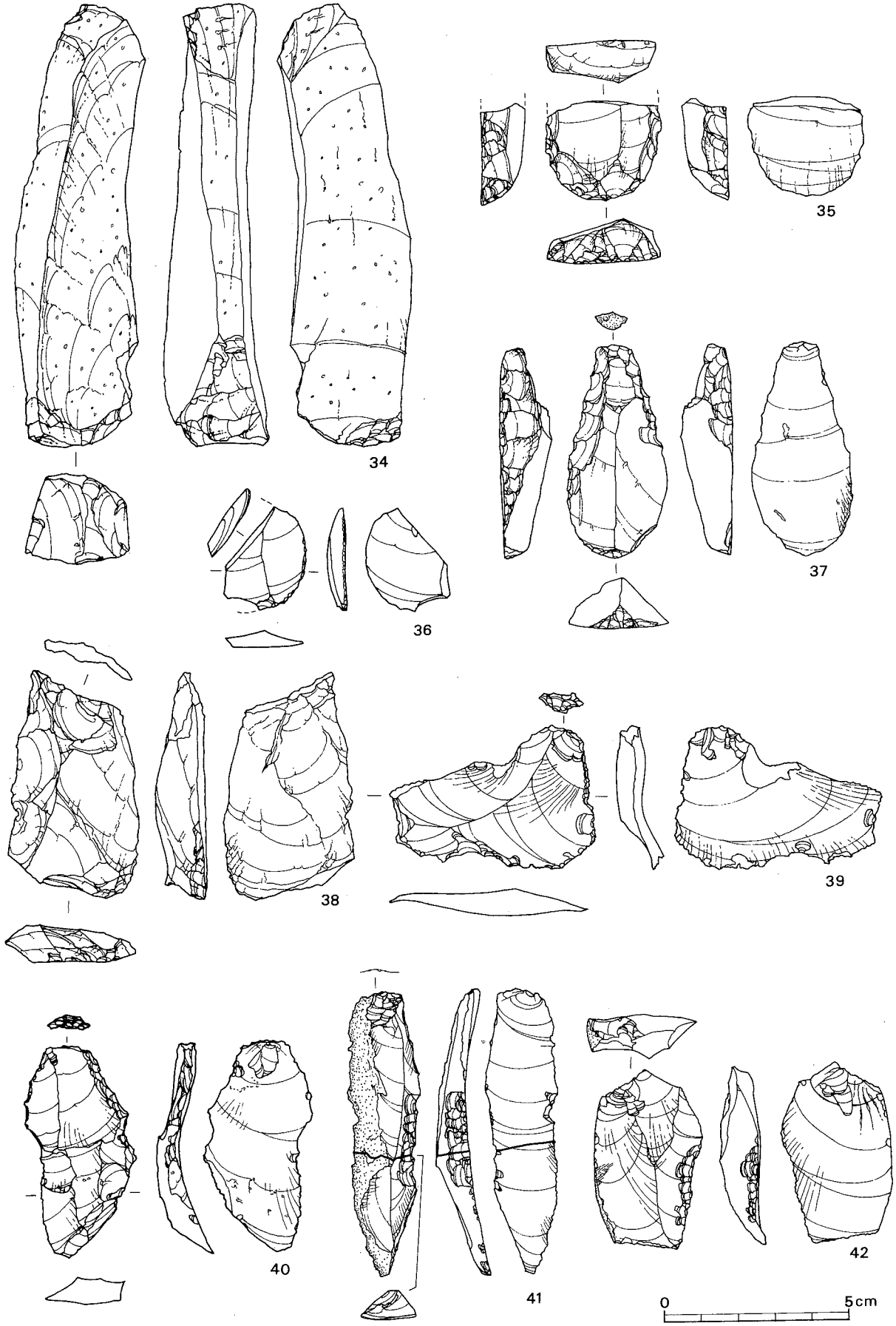
黒曜石製29点，玄武岩製１点が出土している。１～13は黒曜石Ａ－１・Ａ－２を素材とする一群である。１～５は柳葉形のナイフ形石器，６～９はその他のナイフ，10・11は小型の柳葉形ナイフとして大きく分類した。**1**は諫早市所在の柿崎遺跡（福田1981）出土のいわゆる柿崎型ナイフそのものであり，柳葉形の器体に基部裏面加工を施し，片側が湾曲するように作り出したものである。先端部裏面に刃部に並行する数条の擦痕が観察される。石核と接合関係にある。基部側が折損しているが，**4**の資料も柿崎型ナイフの範疇に含まれるものであろう。**2**・**3**は幅に対し，全長が長く両端先鋭のものである。２については，器体全体の摩滅痕の状況や，流理の状況から本遺跡唯一の腰岳産黒曜石製の石核と同一母岩と判断される資料である。**5**は他に比べやや肉厚であるが，整った縦長剥片を使用したものである。器体中央部より主要剥離面側から折れている。**9**は剥片の末端部に一部ブランティングを施しただけのものだがナイフの範疇で取り扱った。**10**・**11**については器体中心に対し，斜めにブランティング加工したものである。特に10は，先端部から基部にいたるまでブランティング加工をし，刃部には顕著な刃こぼれ痕や，背面の上部に擦痕が認められる。機能的に切るという作業が想定されのでは無いだろうか。**12**・**13**は柳葉形の小形ナイフ形石器。極めて先鋭で小形ながら丁寧なブランティング加工を施している。この資料については，熊本県狸谷遺跡（木崎・隈1987）・長崎県平戸市堤西牟田遺跡（萩原1985）・同佐世保市上原遺跡（福田1986）・百花台遺跡（田川・副島・伴1988）のＡＴ下位出土の小形ナイフ形石器に類似しており，この遺跡の時期決定に大きな鍵を握るものであろう。14～21については青灰色の黒曜石素材のナイフ形石器の一群である。先の漆黒色の黒曜石の一群と素材そのものに変化がある。その変化とは，縦長剥片を基調とするものの，幅広で薄めの剥片を使用していることである。幅広の剥片である分，ブランティング加工をかなりおこなう必要があり，先のナイフの一群が，素材をあまり変形することなくナイフとしていることと異なる。ただし，19・20については，あきらかに通常の縦長剥片を素材としており，青灰色黒曜石のなかでも幾つかの剥片剥離技術が看取される。青灰色黒曜石のナイフ形石器の一群の中でも特徴的なナイフとして先に述べた19・20が挙げられる。**19**は打面を残すが，打面側から表裏に対し，器体を薄くする作業を執拗におこない，ブランティング加工は先端部のみに止まる。**20**については基部にのみ細かなブランティング加工を施すもので，素材を生かした先鋭なナイフに仕上げている。**21**についてはやや湾曲した分厚い剥片を使用し，ブランティング面も１cm以上を測るなど通常のナイフ形石器の形状を逸脱する形態である。22～29はナイフ形石器の破損部等である。**25**・**26**は，12・13の小形ナイフとの共通性があり，**25**・**28**・**29**についてはナイフ形石器の刃部再生にかかわると思われる資料ある。玄武岩製ナイフは30の１点のみである。**30**は打面を残存させ，剥片の周囲にブランティング加工を施す。背面の旧剥離痕から，稜を除去しようとの意志が剥片剥離の段階から働いており，中央に大きな剥離痕が観察される。先端部主要剥離面側に平坦剥離をおこない，最後に背面斜め上方より剥離をおこなっている。最後の



第14図　ナイフ形石器（2／3）



第15図　ナイフ形石器・彫器（2／3）



第16図　削器・掻器（2／3）

加工は，先端部の折れにともなう調整なのか，グレイバーファシット的な意味があるのか判然としない。以上30点のナイフ形石器について石材別に説明を加えたが，黒曜石について細別すると，黒曜石Aが（2～7）の13点（内，2と22は腰岳産），黒曜石Bが（1・8・9・11・27・29）の6点，黒曜石Cが（14～21・24・28）の10点である。ほぼ牟田産の黒曜石で占められていると判断される。

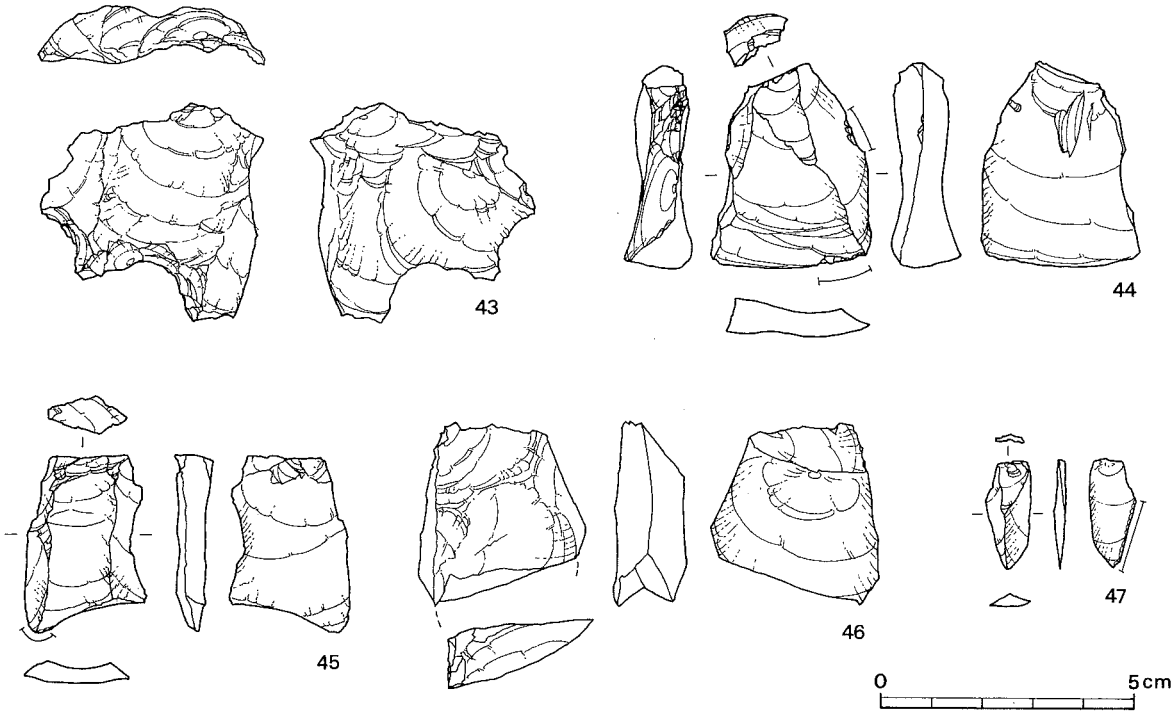
萩原博文1985『堤西牟田遺跡』平戸市教育委員会
萩原博文1985『堤西牟田遺跡（Ⅱ）』平戸市教育委員会
福田一志1986「四　旧石器時代の遺物」『上原遺跡』長崎県文化財調査報告書　第81集
田川　肇・副島和明・伴耕一郎1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書　第92集

彫　　器

彫器は3点出土しているが，31と33は接合関係にある。**31**は打面部が厚く大形の縦長剥片を素材とする。打面は幅の大きな調整打面であるが，打点は限定された点状の打点，つまり間接打法によって剥離したと思われる剥片を使用したと思われる。剥片末端部をブランティングによって調整し，2回のファシットを入れている。3回目のファシットにより，器体中央部が2分割され，結果的に33の彫器を作り出している。31から分離した33は，さらにファシットをいれ彫器としている。器体のほぼ全周にわたって微細な剥落痕が認められるが，彫刀面のサイドには一部にしか認められない。通常の彫器の使用痕の在り方と同様である。**32**は右上面に自然面を一部残すもので，31と同様に調整打面のやや厚みのある剥片を素材としている。剥片末端部をブランティングよって調整し，そのブランティング面よりファシットを形成するなど，基本的に31・33彫器と同様な調整方法をとる。ファシット面には使用痕等は認められない。32については風化が激しく，全面黄茶褐色を呈する。3点共に黒曜石A－2を素材とする。

掻器・削器

エンド・スクレイパー5点が出土している。石材としては玄武岩製4点，黒曜石A－1，1点である。**34**は大形の板状剥片を折断した長方形の素材の一端に，直角に近い角度で刃部を作り出している。反対の部分についても加工を入れ，スクレイパーとしての機能をもったと思われる。長さが12cm程あり，ちょうど手の平に納まる大きさでエンド・スクレイパーとしては，かなり大形のものの部類に入るであろう。**35**は分厚い縦長剥片の末端に弧を描くように急角度で刃部の形成をおこなう。上端が欠損するが，典型的なエンド・スクレイパーといえよう。**36**は薄いやや幅のある剥片を使用したもので，左側辺は欠損しているが右側辺に細かな調整をおこない，ラウンド・スクレイパー状に仕上げる。他のエンド・スクレイパーに比べ加工が稚拙であることから同列には比較できないであろう。**37**は自然打面を残す断面三角形の縦長剥片を素材とする。中央にある稜の除去作業をおこなっているが途中でヒンジを形成している。打面付近から器体中央部まで丁寧なブランティング加工を施し，剥片の末端部に刃部としての加工をおこなっている。打面側のブランティングはシャフトの装着を連想させる。**38**は玄武岩の縦長剥片を使用しており，打面も残存する。剥片末端部に二次加工を施し，刃部として

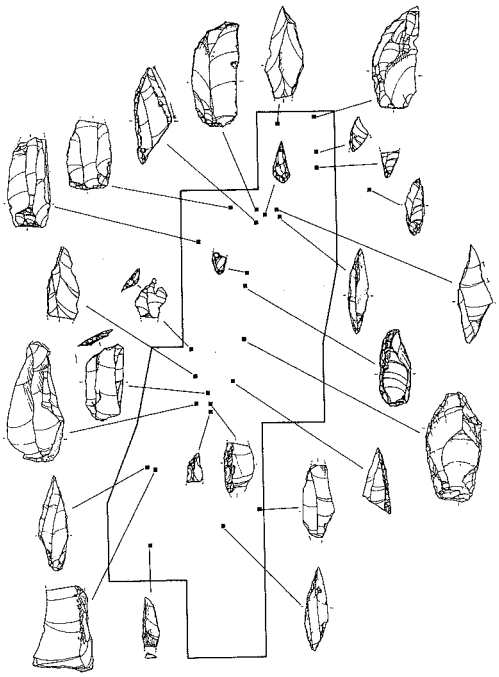


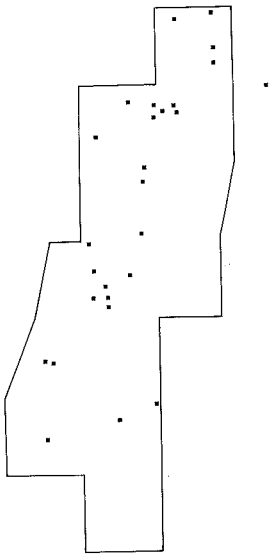
第17図　その他の石器（２／３）

いる。以上４点が典型的なエンド・スクレイパーである。本遺跡の場合スクレイパー類が少ない中で，エンド・スクレイパーが幾つか見られることは，この遺跡の大きな特徴として挙げられよう。この他に39～42に剥片の一部を加工したスクレイパーを挙げた。**39**については幅広の剥片の端部中央部を加工し，コンケイブ・スクレイパー状に作り出している。**40～42**については，縦長剥片の一側辺を加工することに共通性を持つ。特に41・42は，側辺の中央部に加工が集中し，緩くカーブを描いていることから，骨角器などの加工具などに使用されたものではないだろうか。

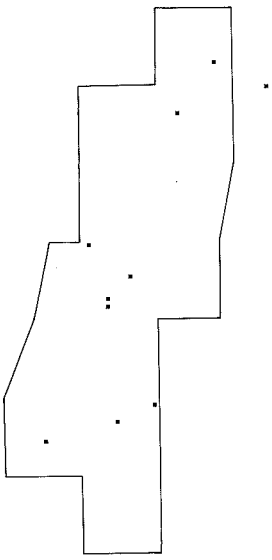
その他の石器

黒曜石・玄武岩の石器以外に玉髄あるいは蛋白石製の遺物が数点出土したので報告する。**43**は横長の不定形剥片の末端を刃部としたコンケイブ・スクレイパーである。２箇所に刃部を作り出している。**44**は，打面が分厚い縦長剥片を意識した剥片を使用した二次加工剥片である。先端部の一部に使用痕が観察でき，左側辺は主要剥離面に向かって背面より調整加工を施している。**45**は，44と同様に剥片の端部に使用痕が観察される。**46**は，分厚い打面をもつ厚みのある縦長剥片であるが，下部が折断？されている。**47**は，チップ状の縦長剥片の一辺に微細な二次加工をしたものである。この他にグリーンタフの剥片等があるが，これらの石器は全体的に調整が稚拙で，打面がほぼ平坦打面であることに大きな特徴がある。以上，特殊素材の石器・剥片等について紹介したが，本遺跡の石器素材としては１％にも満たない。あるいは古い石器群に位置づけられる可能性も考えられるがＡＴ前後の石器群についても，少数ながら旧来の素材石器が含まれることが知られていることから，あるいは本遺跡の石器群の時期決定を示唆する石器群なのかも知れない。

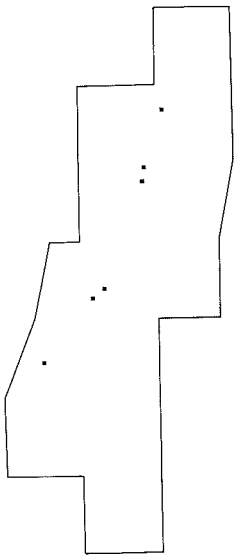




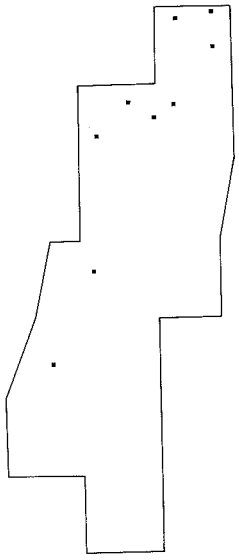
ナイフ形石器全体分布図



黒曜石A-1素材のナイフ分布



黒曜石A-2素材のナイフ分布



黒曜石B素材のナイフ分布

第18図　ナイフ形石器の分布

ナイフ形石器の分布

ナイフ形石器27点の分布を石材別（黒曜石Ａ－１・Ａ－２・Ｂ）に示したものが第18図である。①は全体図で集中区が幾つか見られ，先に示したユニットとの相関関係が指摘できる。特に集中を見せる部分は第２ユニットと第３ユニット周辺である。第２ユニットは石核は黒曜石Ａ－２の石核を中心とするユニットであるが，このユニットでは黒曜石Ａ－２素材のナイフは先端部が残存するのみであり，別素材の黒曜石Ｂのナイフ形石器が多く出土する。黒曜石Ｂが際だって出土した第１ユニットで製作された製品がユニット内には出土せず，やや距離をおいて周辺に出土することは，第２ユニットでその主体となる黒曜石Ａ－２の製品が少数である状況と同様の傾向であり，剥片剥離の場と石器

の使用の場がやや相違することが指摘できよう。第１ユニットでは少数である黒曜石Ａ－１は，その剥片素材と近似した小型のナイフ形石器が出土している。ただ，石核が出土していない。第３ユニットでは，黒曜石Ａ－１の石核・剥片が多く接合しており，ナイフ形石器も黒曜石Ａ－１のものが多い傾向にあり，先の第１ユニット・第２ユニットとはパターンを異にする。第３ユニットの場合，剥片剥離と製品の加工とがこの場で行われた可能性を示唆しておく。第４ユニットでは１点のナイフと石核が接合しており，しかもナイフに使用痕が観察されるなど，剥片剥離・製品加工・使用の場が同じであったという可能性を指摘できよう。

石　　核

石核は表土出土の１点を含めて，15点出土しており，調査面積からするとかなりの数にのぼると判断できる。15点の石核は縦長剥片を目的とするものが主体を占めるが，一部横長剥片の石核もあり，技術的には幾通りかの剥片剥離技術が存在したと思われる。剥片剥離技術については，接合資料の項で説明することとし，ここでは15点の石核を石材別に順次説明をおこなう。

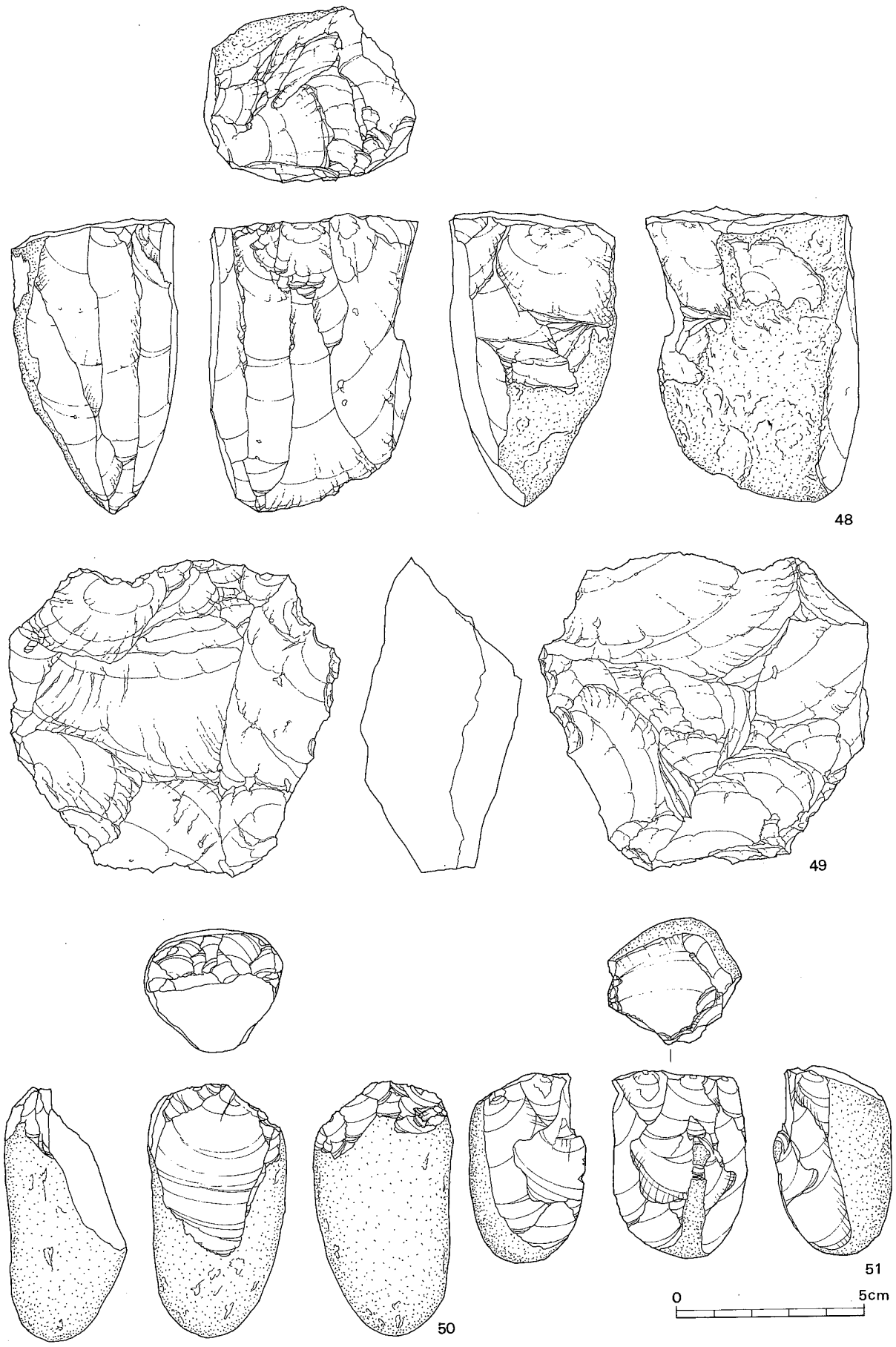
48は玄武岩製の縦長剥片石核である。非常に緻密な玄武岩で，不純物をあまり含んでいない。剥片８点が接合しており，剥離面の観察同様整った縦長剥片が剥離されている。打面は，緻密な打面調整を何回もおこない剥離面との打角はおおよそ90度を計る。裏面や側辺に一部自然面を残すものの，半円周状に剥片剥離をおこなっており，ナイフ形石器の素材を剥離したものと考えられる。ただし，遺跡内にはこの石核を素材とした石器を見いだすことはできなかった。第１ユニット内にあり，多くの剥片・チップとともに出土したことから，この場で剥片剥離をおこなった後に廃棄され，目的的剥片はユニット外に持ち出されたものと判断できる。黒曜石以外の素材で，本資料のような整った縦長剥片石核の存在は，西北九州のなかでは佐賀の東分遺跡や老松山遺跡などに散見することができるが，打面調整の在り方などに相違を見せる。

49は大形の玄武岩の側辺を加工して，円板状に加工し，縁辺から交互に剥片剥離をおこなった資料である。剥離面を打面として次の剥離を交互に順次加えていくために，側縁は山形を呈する。本資料から剥離された剥片や石器の出土はなく，単独で出土した感があり，他の資料の出土パターンと相違する。

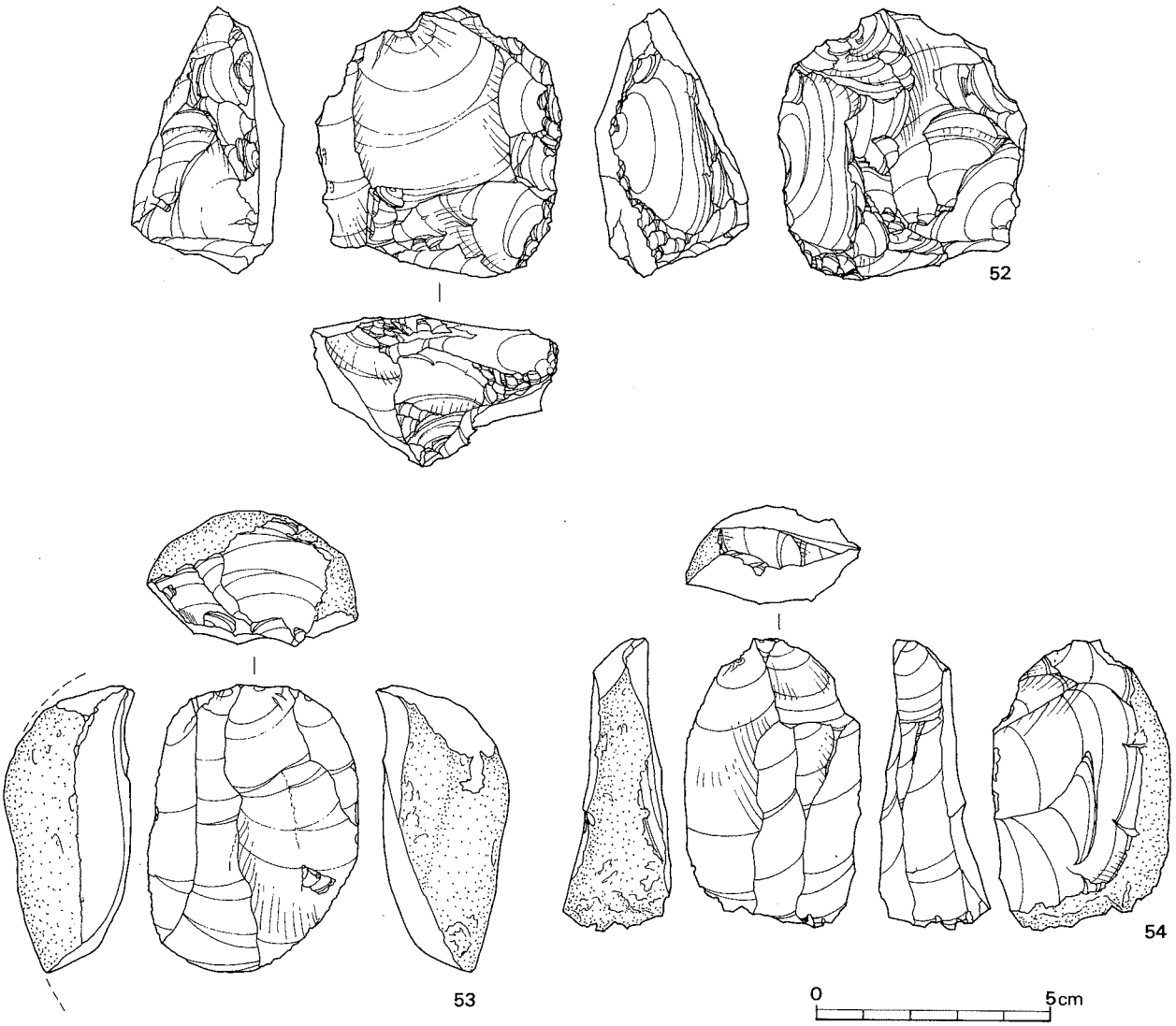
50は茶褐色に風化した黒曜石を使用したもので，丁寧な打面調整により傾斜角の強い打面を形成しているが，剥片剥離は一回に止まりその後廃棄されたものである。最初の剥離が予想したものと相違した結果であろう。第１ユニット内の資料である。**51**も茶褐色黒曜石の小円礫を使用しているが，打面は平坦であり打点を後退させて剥片剥離をおこなったため打面が鋸歯状を呈する。この資料も目的の剥片は取れなかったものと思われる。50・51のような資料がなにを意味するのか判断がつかない。

52は黒曜石Ａ－２を使用した周辺剥離の円盤状石核である。全体形は図面下側を頂点とする三角形状を呈する。６点の剥片が接合し，薄味の縦長剥片や横長剥片が剥離されるなど，特異な石核である。打面を交互に入れ替えて側面を山形にすることでは資料49に共通する。

53は第４ユニットの中心的石核で黒曜石Ａ－２を使用している。７点の剥片と１点のナイフ形石器



第19図　石核（2／3）

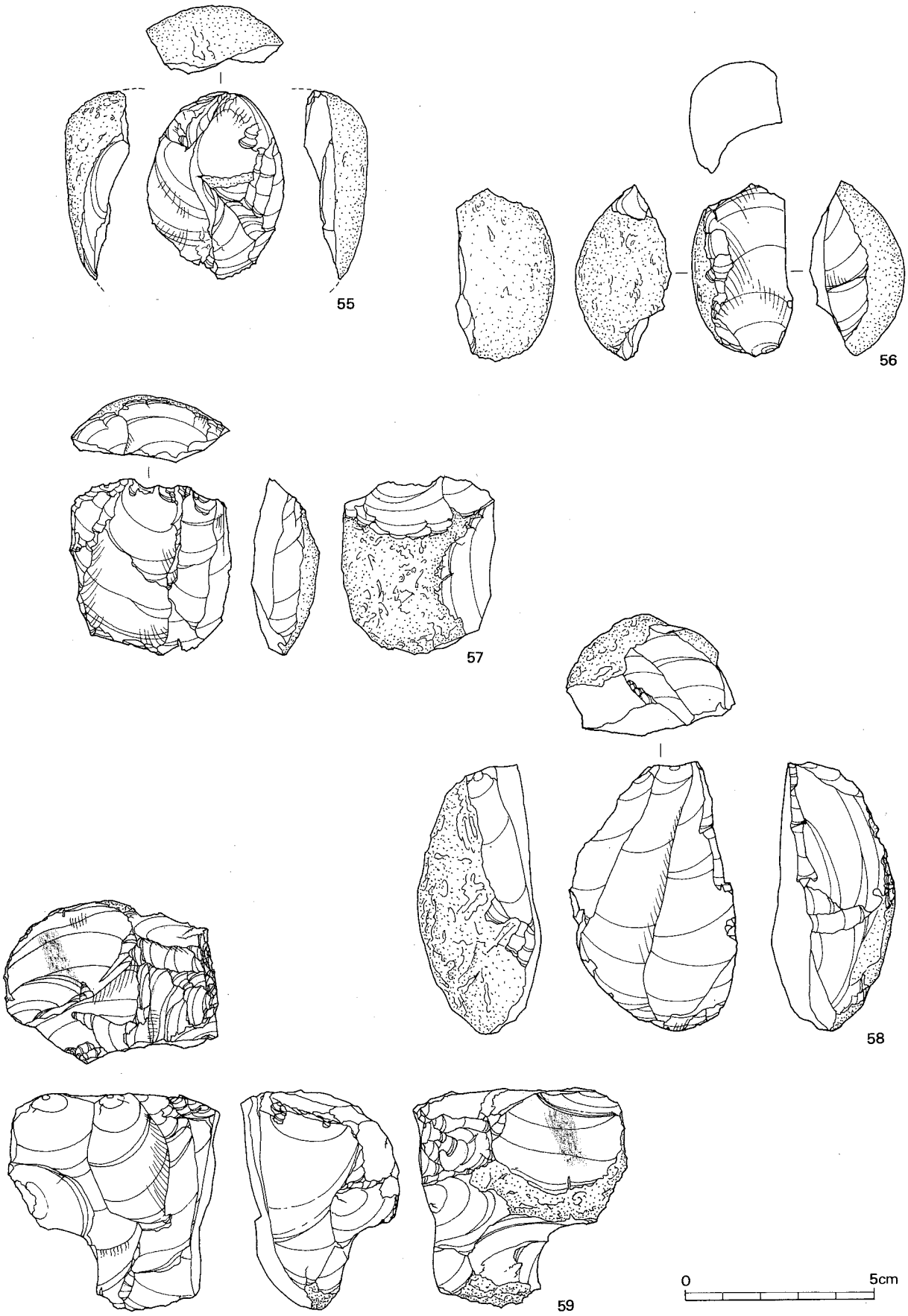


第20図　石核（2／3）

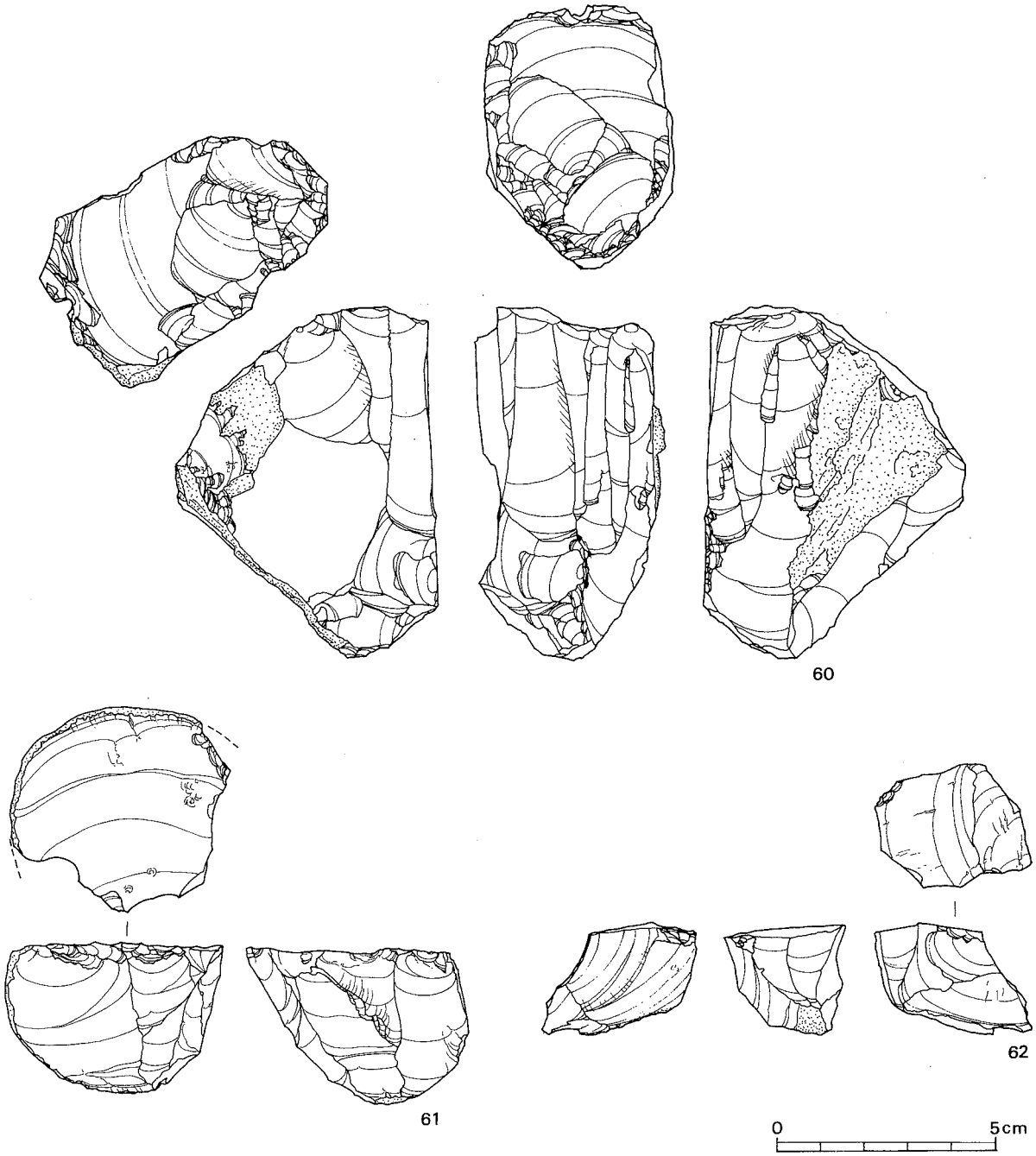
が接合しており，剥片剥離の大方が理解できる資料の一つである。他の黒曜石の縦長剥片石核がシャッポ状の剥片を剥離して急傾斜打面を形成するのに対し，何回かの打面再生をおこなう資料である。基本的には傾斜面を打面としており，他と大差ないであろう。

54は第２ユニットを構成する中心的な石核で７点の剥片が接合している。背面に大きく調整をすることが特徴である。石材は黒曜石Ａ－２で円礫を使用しているが，大幅に調整をおこなっており，この段階では原礫の大きさの推定もできないほどになっている。ただし，接合により原礫面を剥ぐ初期段階から背面調整，剥片剥離の段階が示され，本遺跡の剥片剥離技術の一端を知ることができる資料である。

55は黒曜石Ａ－２の小円礫を使用したもので，台石上で剥離したものと考えられ，上下に圧力がかかり変則的な割れを生じている。その中でも，使用痕ある剥片が接合しており，50・51の資料と違い，剥離した剥片が有効性をもっていたことが証左できる。**56**も同じ小円礫を使用し，初めに打面となるシャッポ状の剥片を剥離し，その後に礫を半割し，小口を剥離面としたものである。礫面が付着した



第21図　石核（2／3）



第22図　石核（2／3）

薄い剥片が剥離され，剥片には使用痕が観察される。この2点は遺跡出土の石核のなかでも小形で，剥片剥離そのものも規制されたものと思われるが，剥離した剥片に使用した痕跡が残るなど，結果的に目的を持っていたことが知れる。

57は，黒曜石A－1を使用し，3点の剥片と接合し，第3ユニットの中心的な遺物である。打面及び側面は早い段階で剥離をおこない，その後は安定した剥片剥離がおこなわれている。打面は急傾斜で平坦であるが，接合した剥片も打面上に調整は見られないことから，打面調整をおこなわずに安定した剥片剥離をおこなった石核として特徴的である。剥片は薄身の縦長剥片が剥離されている。

58は黒曜石A－1を使用したもので，接合資料からシャッポ状の剥片を剥離して打面としており，

54と同様に背面調整をおこなうことが最大の特徴である。

59は，黒曜石Ａ－１である漆黒色黒曜石を使用した石核で第３ユニット内に包括される。打面は一回の大きな剥離によって形成され，その後に細かな打面調整を丁寧におこなっている。打点の上面観は鋸歯状を呈していることから，面に対して打点を後退させ，打面の幅を厚くする意志が見られる。剥離面からも看取できるように，剥片は打面にほぼ最大厚を持つ全体的にやや厚みのある剥片が剥離されたであろう。

60は唯一の腰岳産黒曜石を使用した石核である。素材が角礫であることから打面も長方形を呈し，作業面に対し，急傾斜の打面となっている。打面調整は前面を中心に丁寧におこない，この段階では左右側面からの剥離が優位にたっているため前面観が，尖鋭になっている。打面，形態ともマイクロコアの拡大版の体を呈する。

61は黒曜石Ｂ使用の石核である。原礫を半截して打面を形成し，打点を後退させて剥片剥離をおこなうことから，打面上面観が山形を呈する。剥片は打面と底辺の長さから，他に比べ寸づまりの剥片が確保されたであろう。

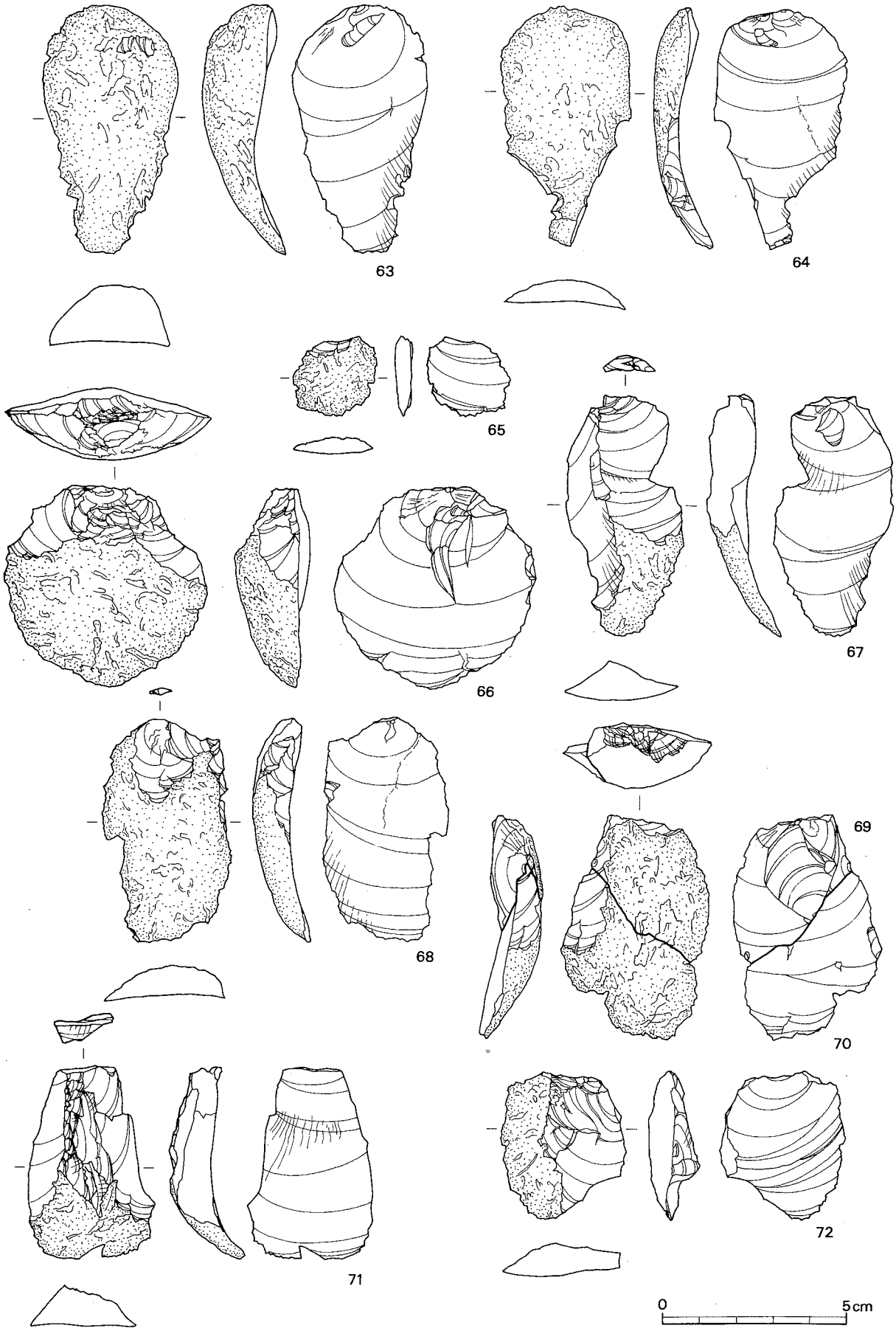
62も黒曜石Ｂ青灰色黒曜石を使用した石核である。正面と左側面の剥離は打面の再生によって切られており，本来はやや大形の石核の底辺部であった可能性が高い。この段階では剥片２枚を剥離したことが復原でき，１点は接合している。この石核が第１ユニットの黒曜石Ｂの剥片に対応する可能性もある。

剥　　片

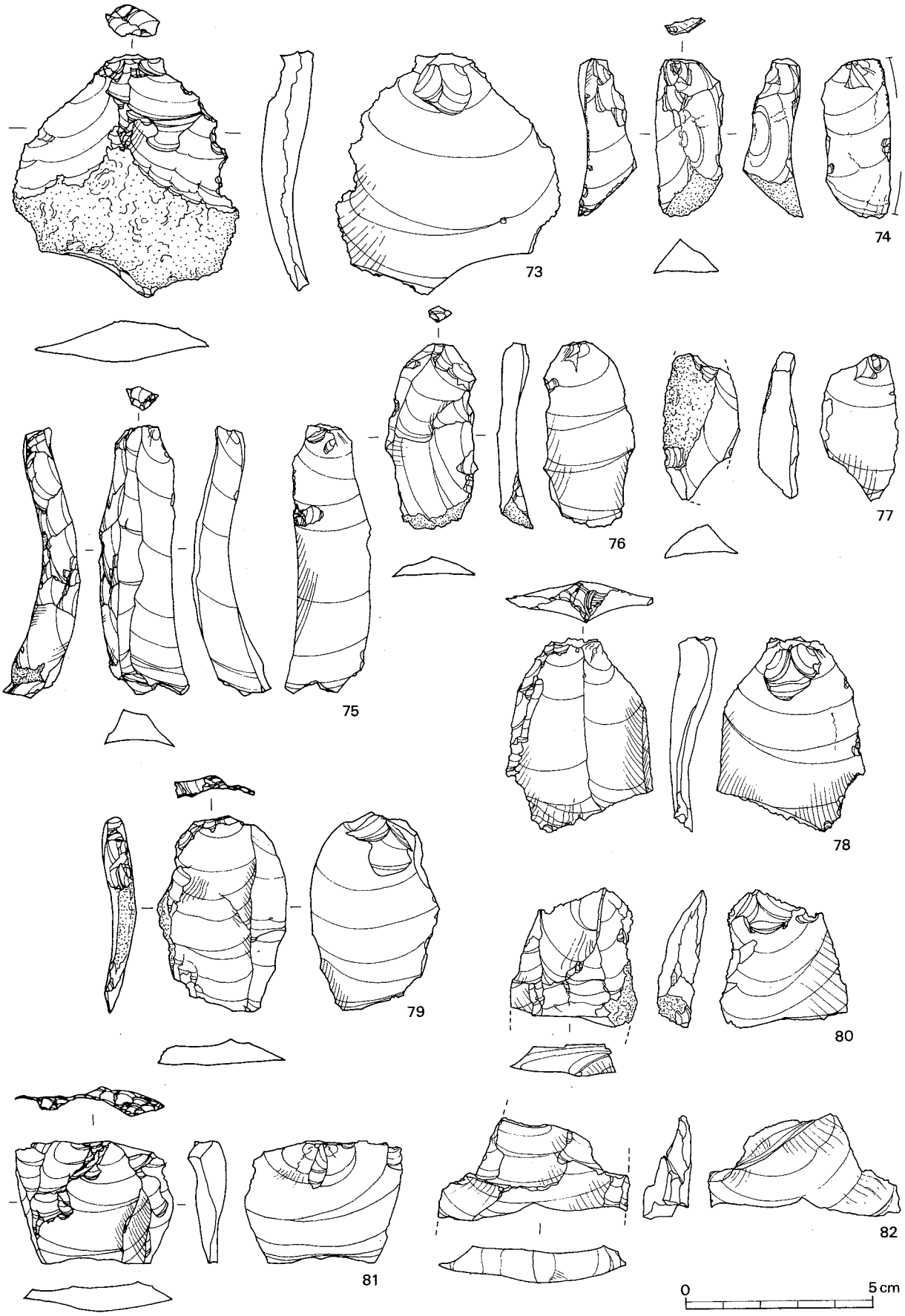
剥片として取り上げる場合，チップとの区分上なにを基準とすればよいかなど難しい問題があるが，ここでは便宜的に幅１cm以上，長さ２cm以上のもの（横長剥片ではその逆）について剥片として扱った。ただし，先の条件を満たさない折断剥片などについてもその形態上剥片として取り上げている。本遺跡の剥片は，遺跡が剥片剥離の一大作業場であったことを示すように，多様な剥片が出土している。剥片剥離の工程の中で剥片は，原礫の粗割の段階の調整剥片，打面調整剥片，作業面確保のための調整剥片などの多様な剥片が剥ぎ取られ，最後に目的的剥片が剥離される。また，目的的剥片を剥離するために順次先ほどの工程の幾つかが繰り返されることになる。目的とする剥片は，その後石器として加工されるため，石器の素材剥片（目的的剥片）は遺跡に残るケースは特別な場合を除いてはほとんど加工されるか，石器素材として外に持ち出される場合が多いものと思われる。本遺跡の剥片についても粗割の段階・調整段階の工程を示唆する剥片が多く，本遺跡出土の石器からみた目的的剥片の出土は少数の出土でしかない。ここでは，黒曜石Ａ－１・Ａ－２（剥片の段階ではＡ－１・Ａ－２の判別は比較的容易である），黒曜石Ｂ，玄武岩の順に本遺跡の剥片について説明していく。

黒曜石Ａ－１の剥片

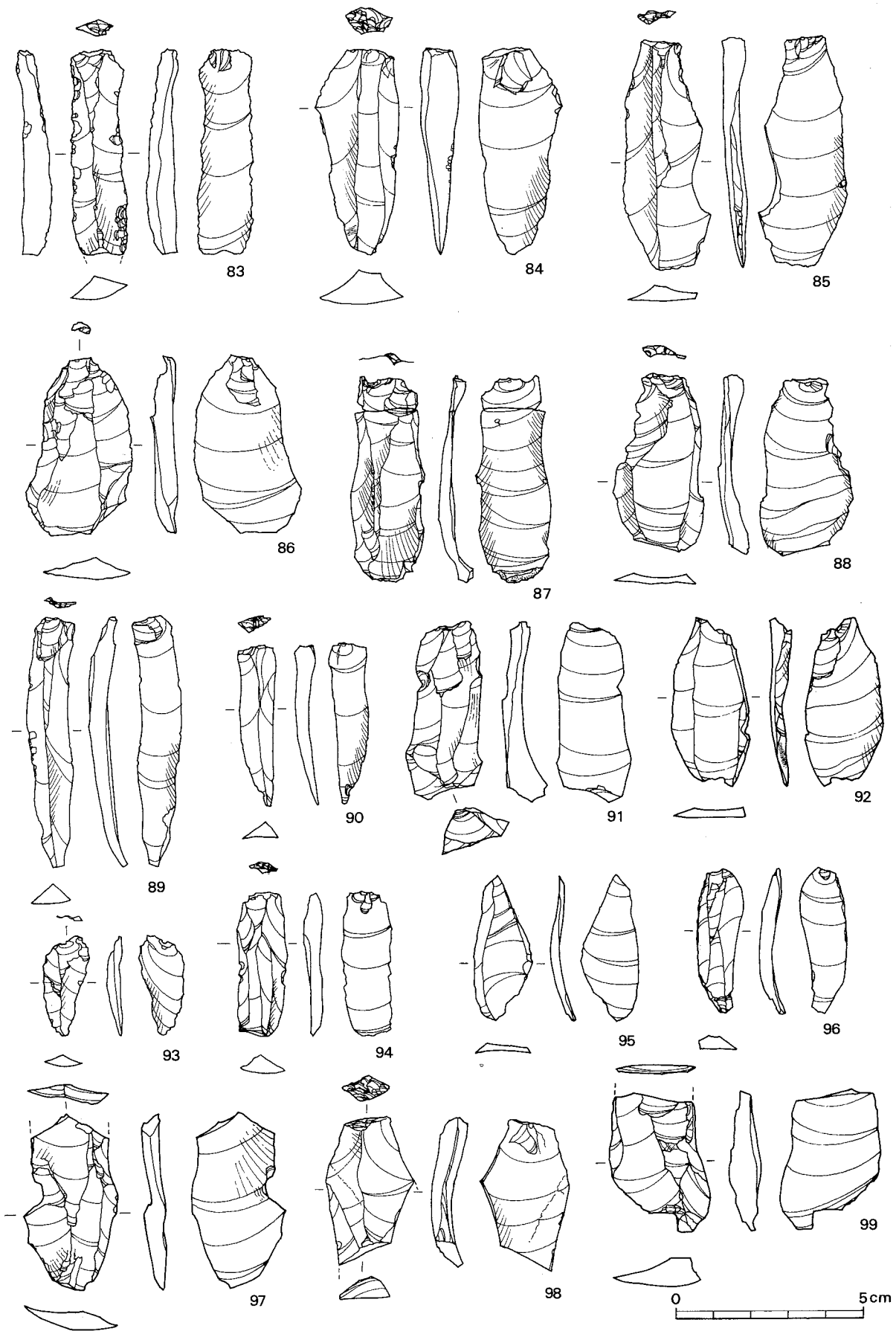
63～102は黒曜石Ａ－１の剥片類である。この中で63～73は，黒曜石の原礫面を多く残し，最初の原礫への調整段階の剥片である。背面はほとんど原礫面に覆われ，腹面は主要剥離面のみで構成される。これらの剥片の打面は，点状になるか，破砕した状況を呈する。かなり強い衝撃を受けたものと



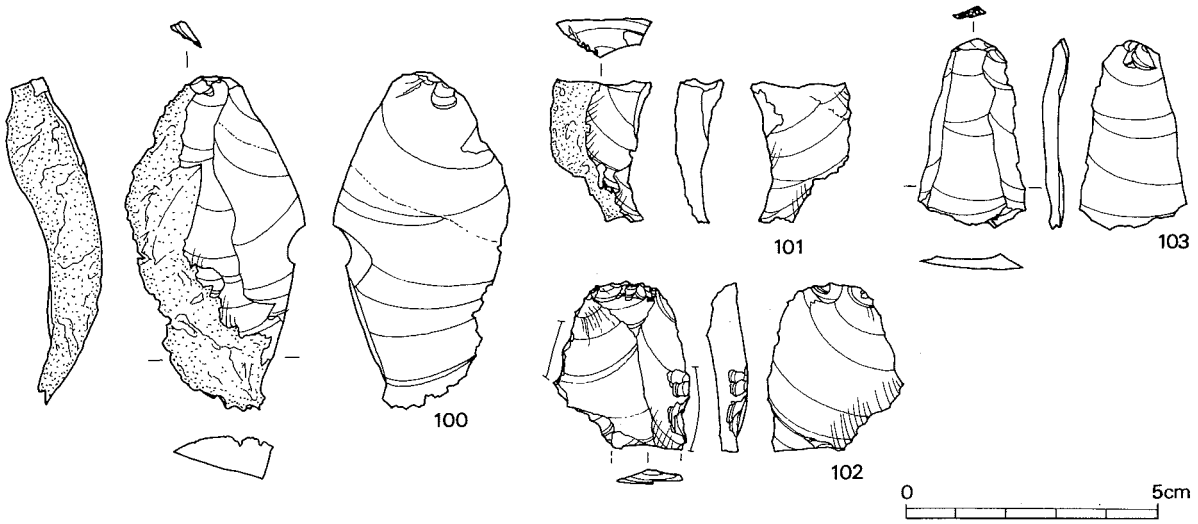
第23図　剥片（黒曜石Ａ－１）（２／３）



第24図　剥片（黒曜石Ａ－１）（２／３）



第25図　剥片（黒曜石Ａ－１）（２／３）



第26図　剥片（黒曜石Ａ－１）（２／３）

思われ，打面の付近はリングが詰まり分厚いことが特徴である。**80・100**の剥片も剥片剥離工程の中でも初期の段階に剥離されたものと思われる。**71**については工程の初期の段階を示すものの，主要剥離面に対し90°打面転移して調整をおこなった痕跡が認められ，石核の側面調整をおこなった資料である。同様な資料は**74・75**などに見られ，細かな側面調整が一般的におこなわれていたことを示唆する資料である。特に75の資料は背面における剥離面から大形の縦長剥片が剥離されたことが看取され，側面調整は剥片剥離以前におこなわれたことを示す資料である。

黒曜石Ａ－１の中でも本遺跡における目的的剥片に比較的近いと思われる一群が83～92にあげた資料である。打面は調整されたものが多いが，剥片の厚みや形状が多様であることと同様に，打面の形状も多様である。**89・90**の資料は，断面三角形で幅が狭い資料で，石核の作業面に残された稜を除去するためのものと考えられる。また，本遺跡ではほとんど見られないが，**95・96**の剥片の様な上下からの剥離痕を腹面に残す資料もある。

黒曜石Ａ－２の剥片

黒曜石Ａ－１と同様，剥片剥離の初期段階を示す剥片104～108・111・112～115が出土している。打面形成に関わるシャッポ状剥片**106・108**が特徴的であるが，66の資料の接合関係や，多くの石核の打面が急傾斜打面であることを考え併せれば，このシャッポ状剥片も原礫に対し，斜め方向から剥離された可能性を考えなければならない。**109・110**の剥片は調整を施した分厚い打面をもった大形剥片である。背面に残されたネガ面からはかなり整った縦長剥片が剥離されたことが窺われるが，幾つかのヒンジも観察され，これを取り除くために大幅に石核の作業面を調整しようとした際に剥離されたものと考える。111～117までは，54の石核に接合する剥片である。大きな特徴は，113～116の剥片で，すべて石核の背面調整のための剥片で，112の剥片を剥離したのちに90°打面を転移して剥離されたものである。カマボコを輪切りにした状況を呈し，石核の形状を大きく変えるほどの背面調整をおこなっている。118～124は石核53との接合資料である。側面調整の痕跡はなく，ネガ面においても縦方向だけが意識されている。**120・121**は直接的に接合関係にあり，121の中央のネガ面に120が接合して

いる。このことから本来断面三角形の稜をもった121は，120を剥離することによって，稜を除去された。つまり，石核上に残された稜をあらかじめ意識的に剥離した際にできた調整剥片が120ということになる。この作業は，ナイフ形石器の素材の断面がほぼ台形になることと共通することから，ナイフ形石器の素材剥片の獲得の際に行われる調整を示すものと思われる。

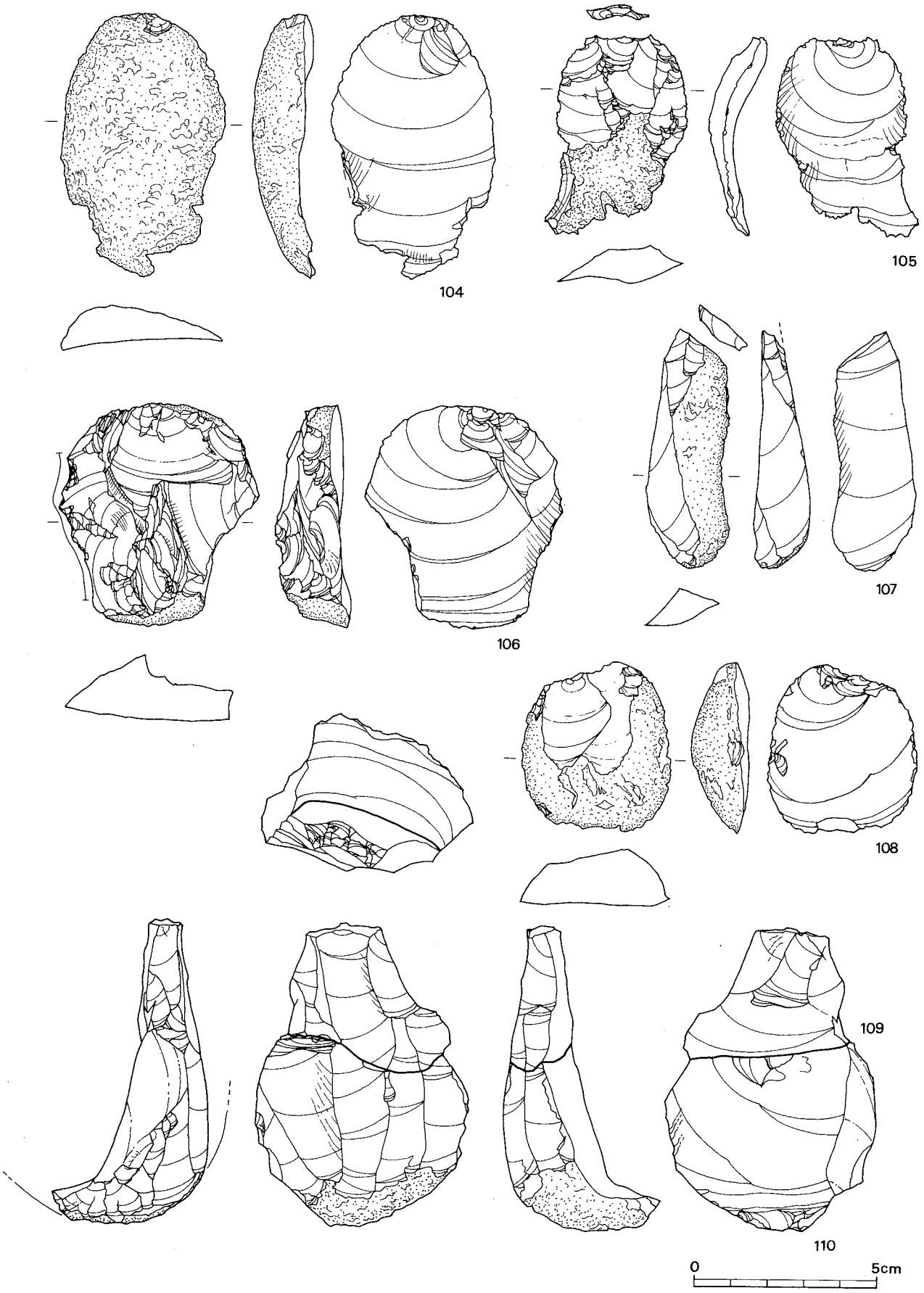
Ａ－２の剥片は素材的に本遺跡のなかでも多数を占めると考えられるが，打面についても点状・線状・打面調整を有するもの，平坦打面のものなど多様である。状態の良いものを図化したが，ナイフ形石器の素材と成りうるものは皆無に近い。

黒曜石Ｂの剥片

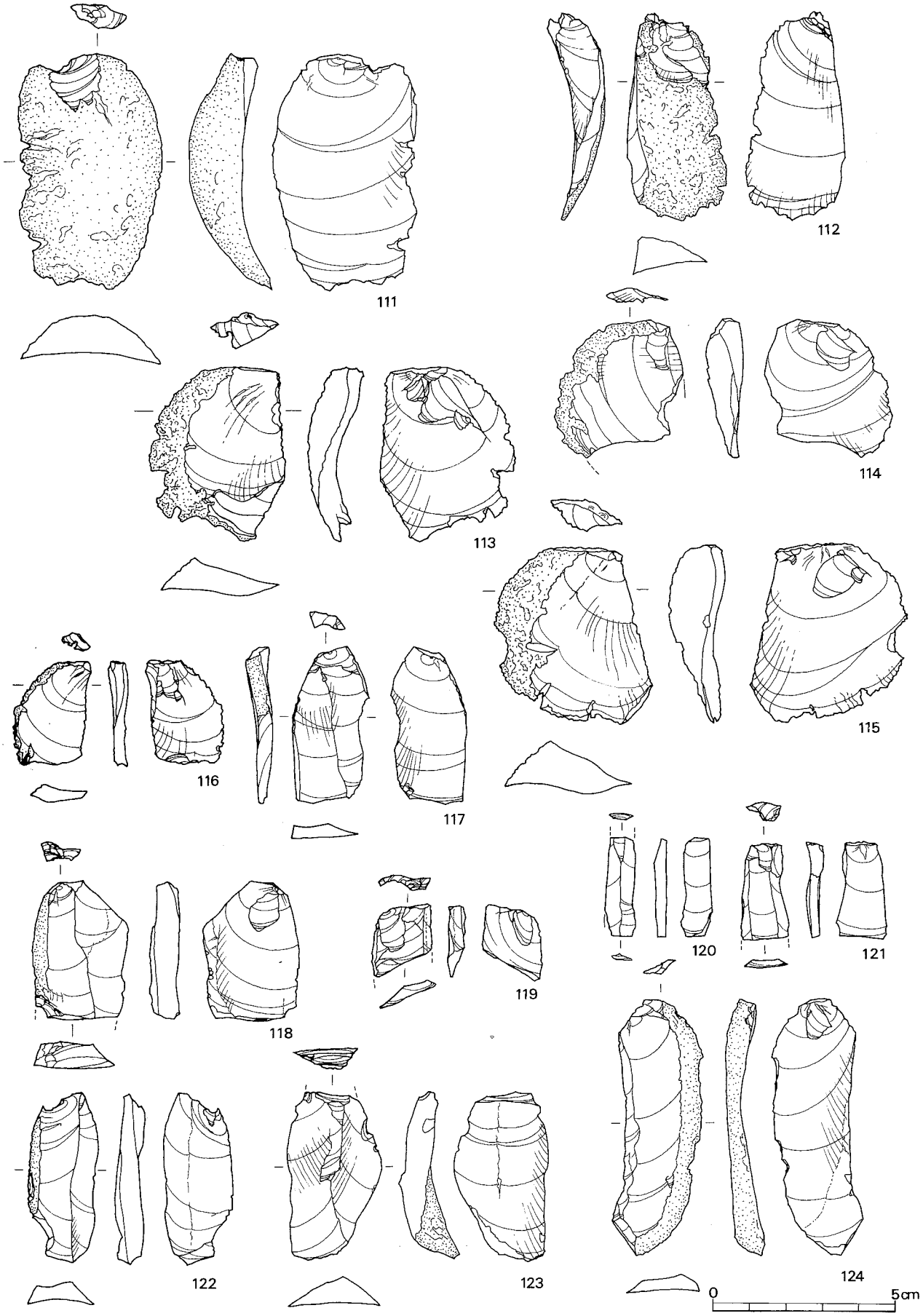
黒曜石Ｂの剥片は，ほぼ第１ユニットからの出土である。176～181などは調整段階で剥離された剥片と考えられる一群である。第１ユニットからの石核の出土はないが，**177・178，178・179**のような接合資料があり，石核調整段階のものと判断される。黒曜石Ｂの剥片の大きな特徴は，薄身であること，縦長剥片を意識しているものの，幅がやや広いことなどにある。**183・189・191**の剥片に見られるように，端部が丸く納まるもの。つまり，力が抜けきれずに石核上でヒンジをおこしたような痕跡が残る剥片があることも特徴的である。また，その痕跡がネガ面に残る剥片**182・201・205**などもあり，第１ユニットにおける剥片剥離技術の一端を示している。打面は，線状打面・調整打面・平坦打面等がある。

玄武岩Ｃの剥片

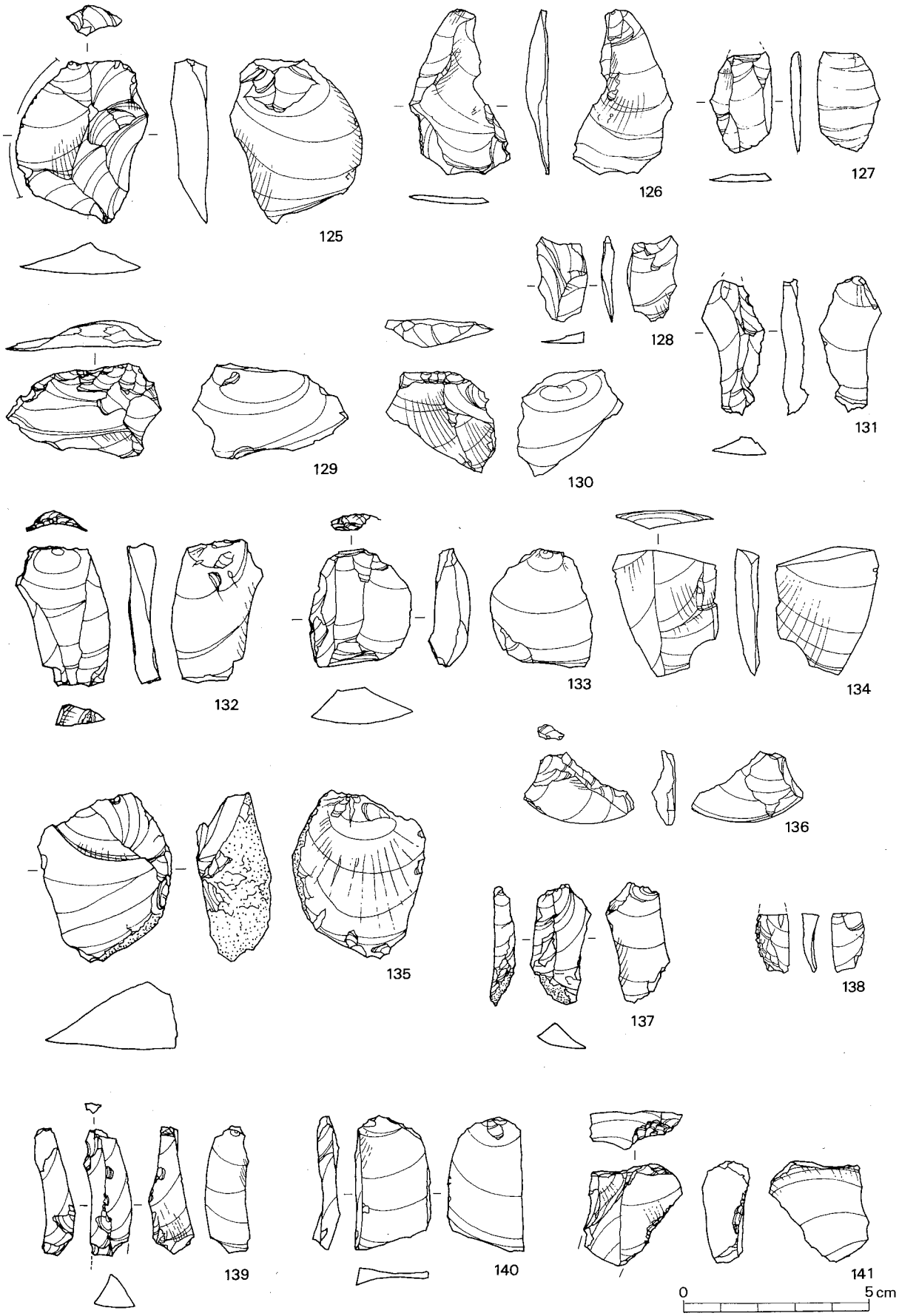
207～216は，石核48と接合関係にある。黒曜石Ｂと同様に第１ユニットを中心に分布する一群で，石核上に残された剥離痕からも看取できるように，縦長剥片剥離に関わる剥片で構成される。**207・208**の剥片は底部に礫面があり，この剥片の剥離の段階で石核底部が内弯し始めたことにより，剥片剥離を終了させざるを得なかったと思われる。剥片上の剥離痕跡や剥片自体から想定される剥片は，幅に対して長さの値が大きいことが大きな特徴であろう。**215**の剥片上の剥離痕の観察から，先に黒曜石Ａ－２の剥片で示した，断面が台形になる剥片を意図した技術がＣの剥片にも看取される。打面については石核上に残された調整痕からも判断できるが，調整打面の剥片が主体である。



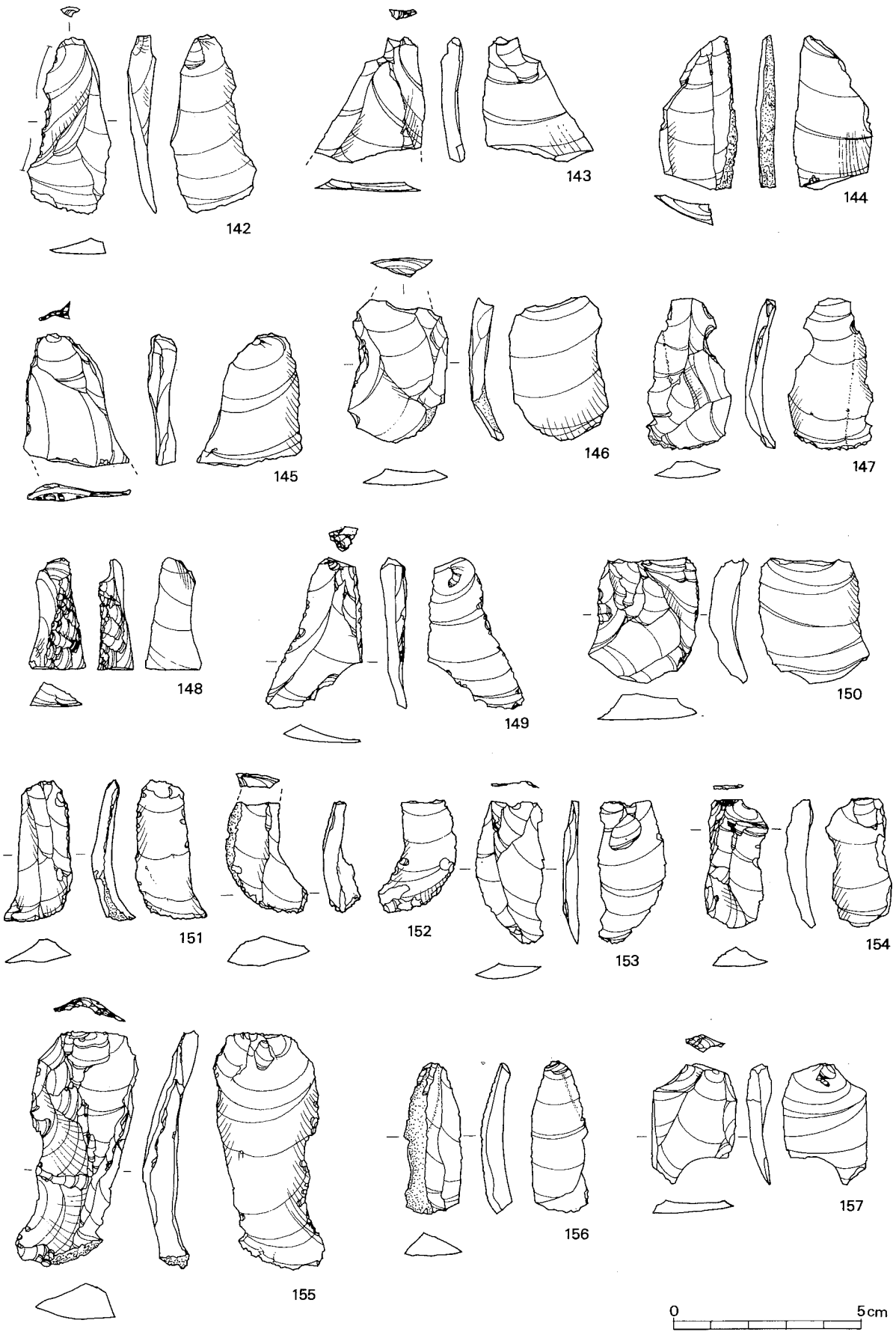
第27図　剥片（黒曜石Ａ－２）（２／３）



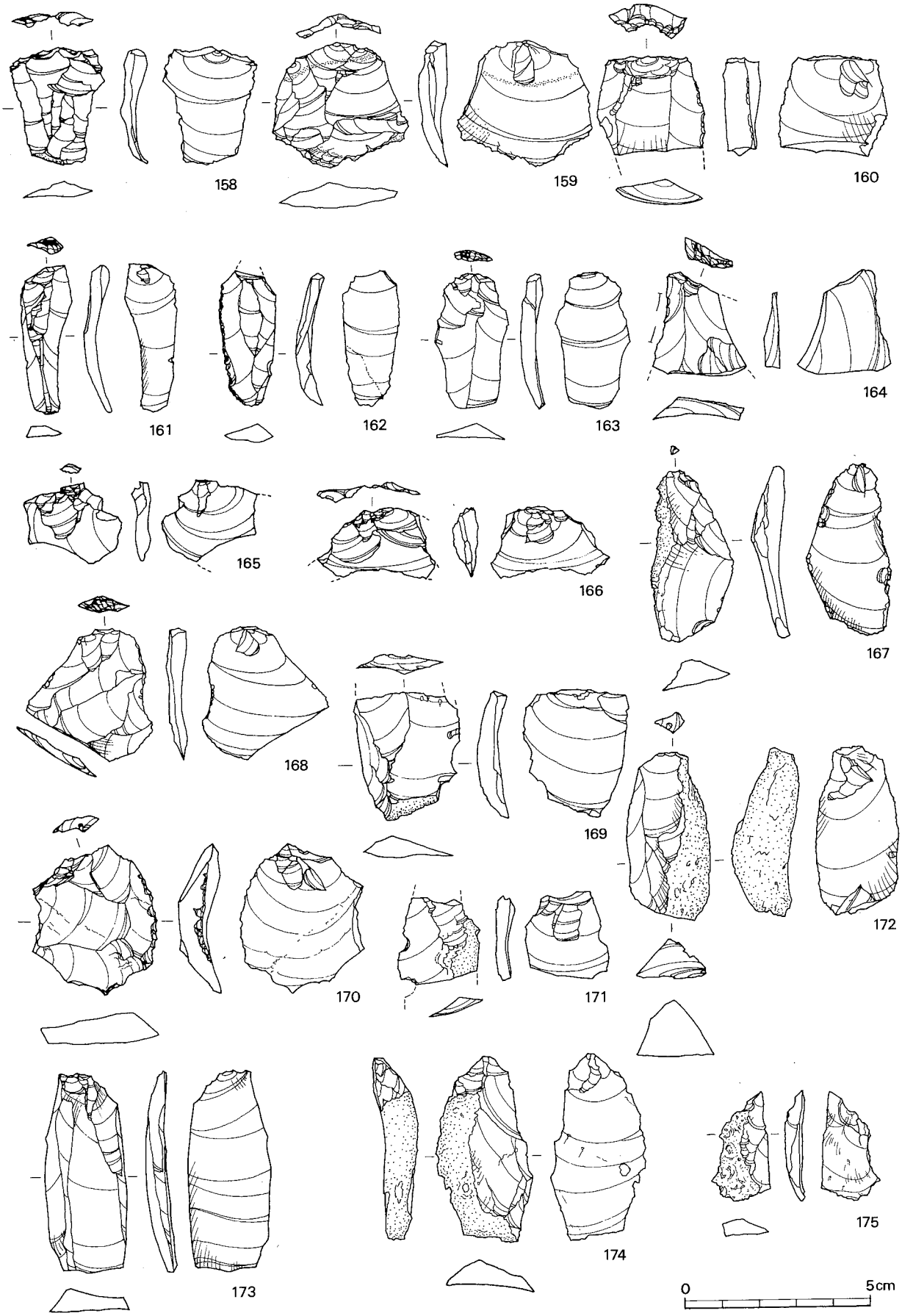
第28図　剥片（黒曜石Ａ－２）（２／３）



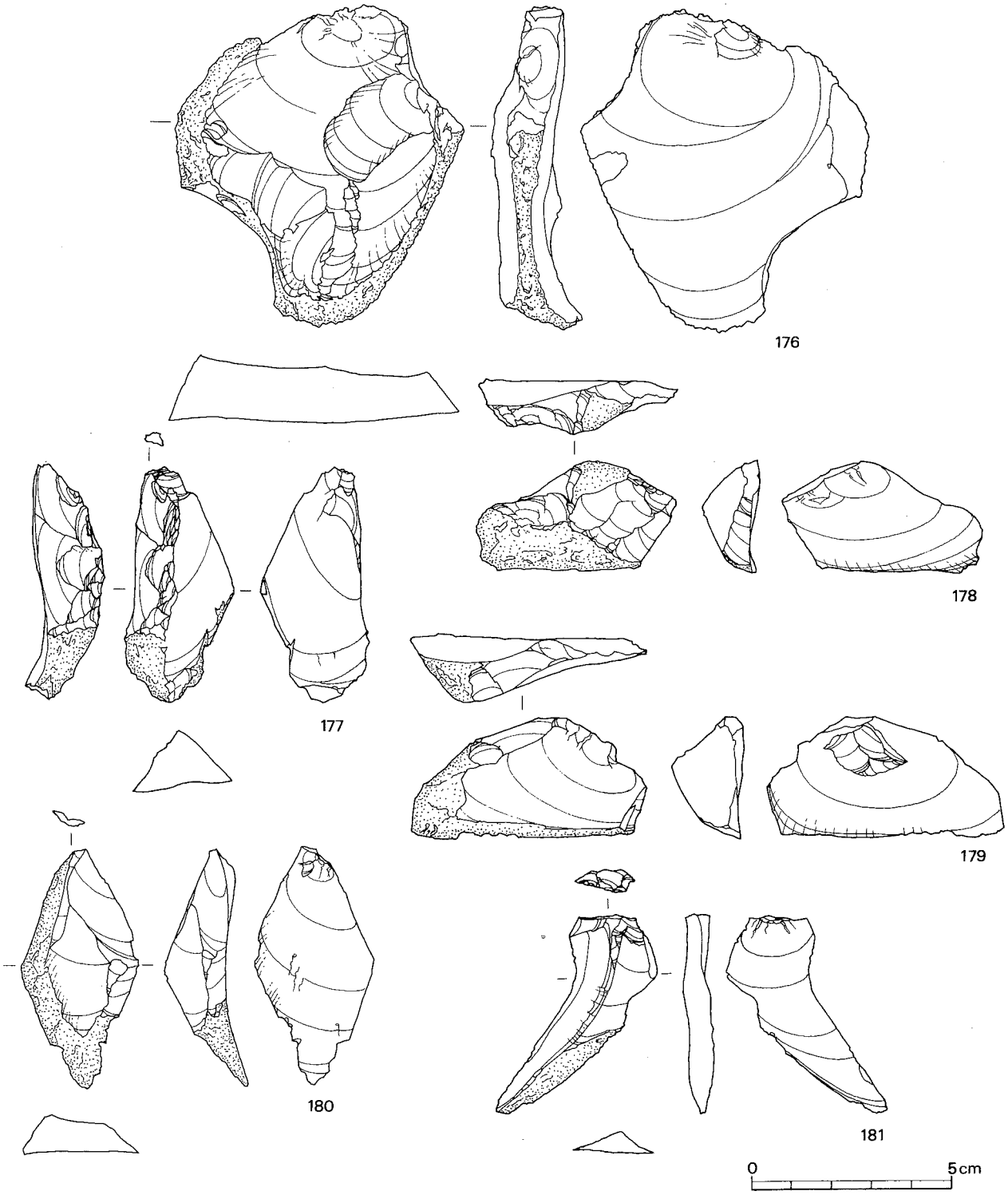
第29図　剥片（黒曜石Ａ－２）（２／３）



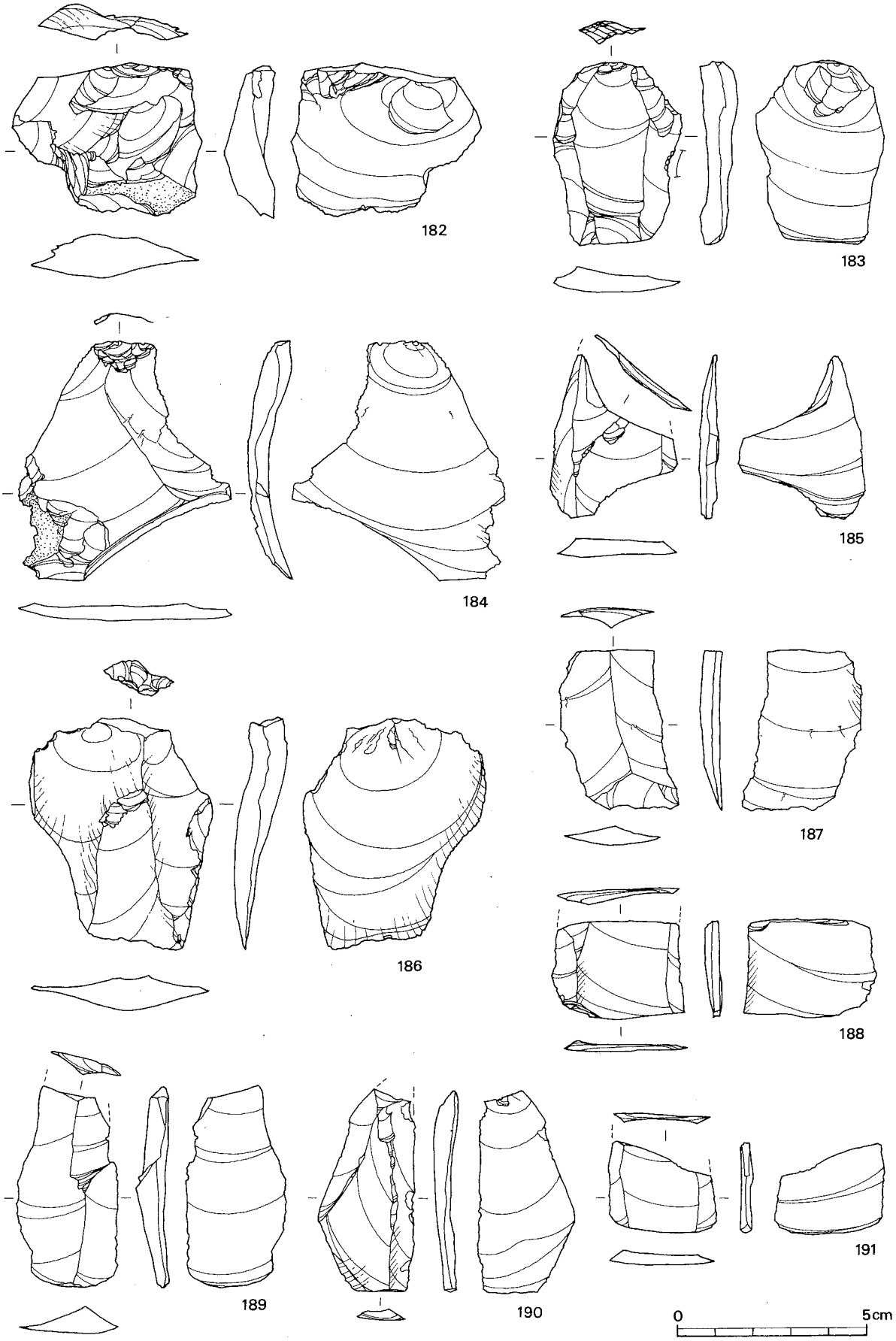
第30図　剥片（黒曜石Ａ－２）（２／３）



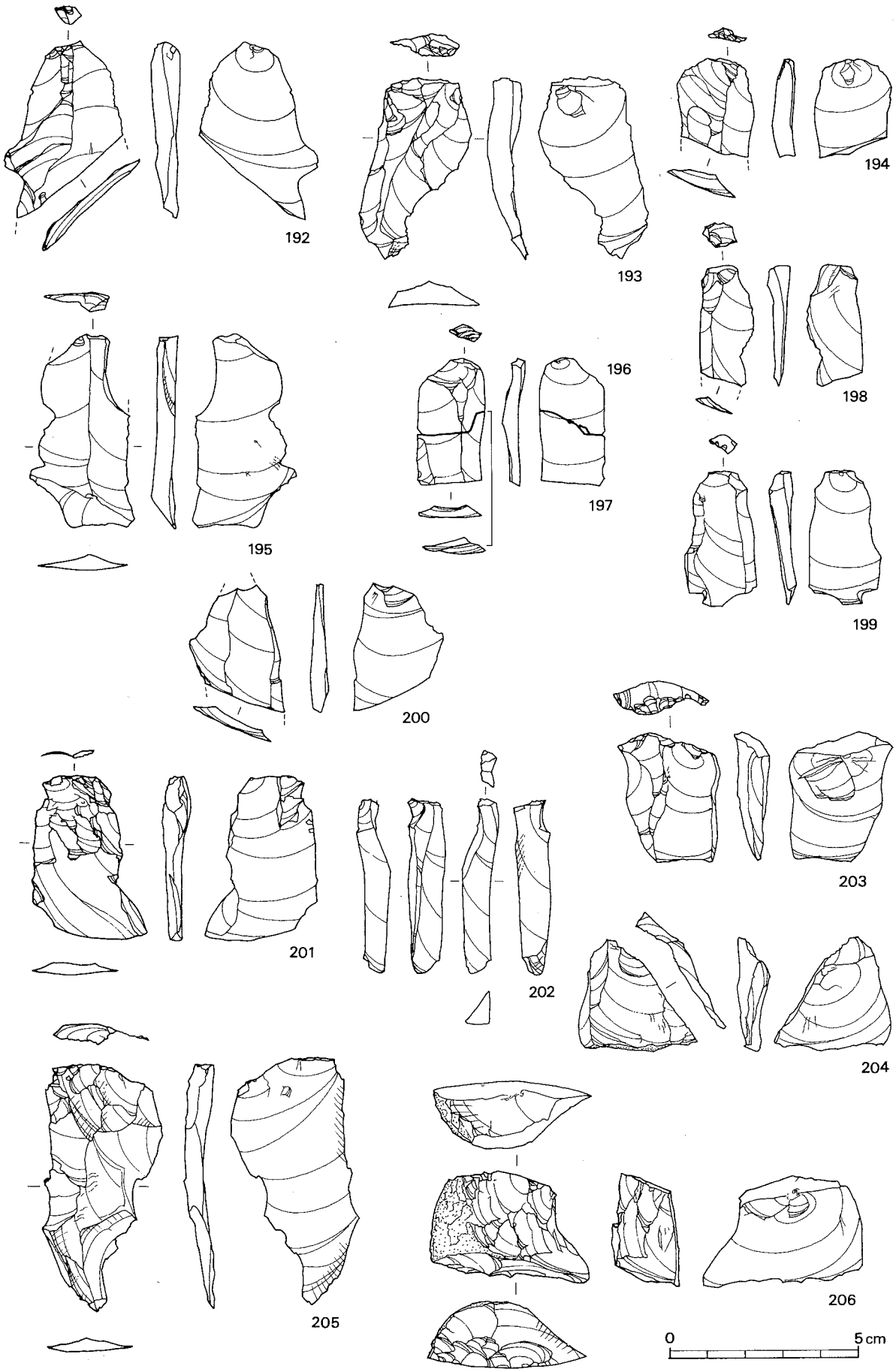
第31図　剥片（黒曜石Ａ－２）（２／３）



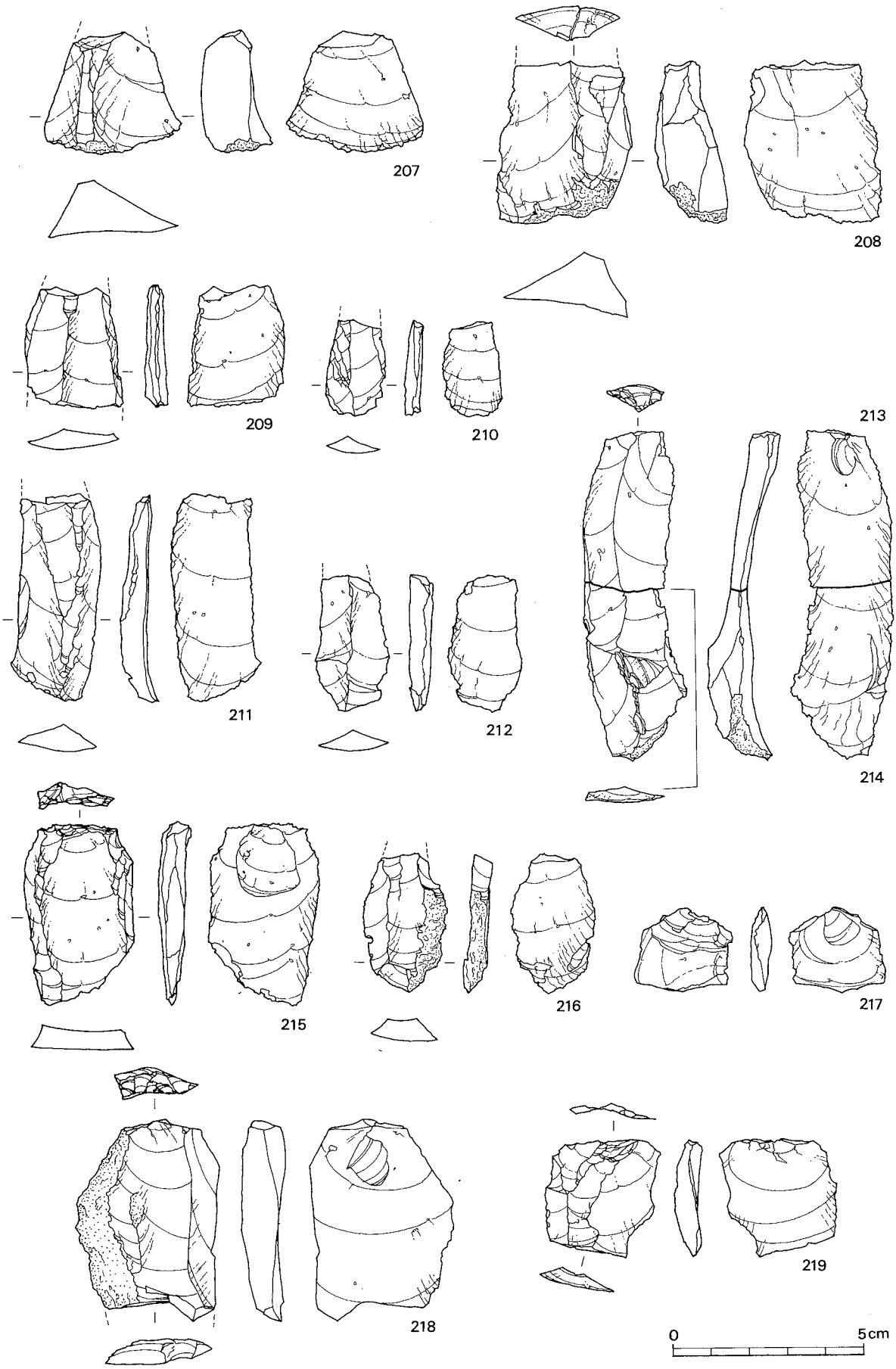
第32図　剥片（黒曜石B）（2／3）



第33図　剥片（黒曜石B）（2／3）



第34図　剥片（黒曜石B）（2／3）



第35図　剥片（玄武岩）（２／３）

図版番号	区	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	打面長	打面幅	重量	備考
1	A-4	ナイフ形石器	A-2	5.1	1.6	0.5			3.5	基部裏面調整・擦痕有り
2	B-5	ナイフ形石器	A-1	4.4	1.2	0.5			2.1	腰岳産黒曜石
3	C-1	ナイフ形石器	A-1	4.5	1.1	0.5			1.8	基部裏面調整
4	B-5	ナイフ形石器	A-1	3.8	1.6	0.6			3.4	上部折断・基部裏面調整
5	B-3	ナイフ形石器	A-1	3.4	1.6	0.6			1.9	下部折断
6	B-3	ナイフ形石器	A-1	2.7	1.7	0.6			2.1	上下折断
7	A-3	ナイフ形石器	A-1	2.4	1.6	0.7			2.6	表土
8	B-2	ナイフ形石器	A-2	4.1	1.7	0.8			5.1	
9	B-3	ナイフ形石器	A-2	6.3	3.0	0.9			12.7	下部礫面・点状打面
10	C-1	ナイフ形石器	A-1	5.6	2.5	0.8			11.2	
11	B-3	ナイフ形石器	A-2	3.1	2.0	0.4			3.3	
12	A-5	ナイフ形石器	A-1	2.6	0.9	0.4			0.7	下部折断
13	C-0	ナイフ形石器	A-1	3.0	1.1	0.3			1.0	
14	C-1	ナイフ形石器	B	5.1	1.8	0.6			3.8	
15	C-0	ナイフ形石器	B	4.8	2.1	0.4			3.6	下部折断
16	C-0	ナイフ形石器	B	3.3	2.5	0.6			8.3	
17	C-1	ナイフ形石器	B	5.1	2.1	0.6			5.5	
18	B-3	ナイフ形石器	B	3.8	1.7	0.6			3.1	下部折断
19	B-1	ナイフ形石器	B	4.8	2.2	0.9			8.5	上部折断
20	B-1	ナイフ形石器	B	3.7	2.4	1.0			7.0	先端部折断
21	A-4	ナイフ形石器	B	4.5	3.5	1.5			18.5	上部折断・下部礫面・被熱痕有り
22	B-3	ナイフ形石器	A-1	1.7	2.1	0.5			1.1	
23	B-3	ナイフ形石器	A-1	1.5	0.9	0.5			0.5	下部折断
24	C-0	ナイフ形石器	B	1.8	1	0.5			0.5	特殊な折れ
25		ナイフ形石器	A-1	1.6	1.1	0.3			0.4	表採
26	C-0	ナイフ形石器	A-1	1.4	1	0.4			0.3	上部折断
27	B-2	ナイフ形石器	A-2	1.1	0.8	0.3			0.3	先端部折断
28	C-3	ナイフ形石器	B	2.4	1.1	0.7			1.4	特殊な折れ・表土
29	C-1	ナイフ形石器	A-2	2.2	1.1	0.9			0.9	特殊な折れ
30	B-2	ナイフ形石器	C	5.9	3.0	1.1			19.7	
31	A-3	グレイバー	A-2	5.5	2.6	1.0			10.0	33と接合
32	C-0	グレイバー	A-2	4.5	2.0	0.8			7.9	左礫面
33	A-4	グレイバー	A-2	5.9	2.1	0.7			7.4	31と接合
34	B-3	エンドスクレイパー	C	12.0	3.5	2.7			112.1	
35	A-4	エンドスクレイパー	C	2.6	3.1	1.1			11.7	表土
36	B-6	スクレイパー	A-2	2.7	2.2	0.4			2.2	
37	B-4	エンドスクレイパー	C	5.8	2.7	1.3			17.1	表土
38	B-2	エンドスクレイパー	C	6.3	3.5	1.4			26.6	
39	B-3	スクレイパー	A-2	4.4	5.6	0.8	1.1	0.5	12.2	打面調整
40	B-2	Uフレイク	A-2	4.8	2.9	0.8	1.2	0.4	9.5	打面調整有り
41a	B-3	Uフレイク	A-2	3.6	1.7	0.8			3.0	左礫面・41bと折断面接合
41b	B-3	Uフレイク	A-2	4.5	2.0	0.8			6.5	線状打面・下部折断・左礫面・41aと折断面接合
42	B-2	Uフレイク	A-1	4.9	3.0	1.0	1.8	0.5	14.9	左礫面・打面調整有り・ポリッシュ有り
43	B-6	スクレイパー	D	4.3	4.4	1.1			19.0	
44	B-3	二次加工剥片	D	4.0	3.3	1.0			13.3	
45	B-3	フレイク	D	3.5	2.4	0.7			5.7	
46	C-2	フレイク	D	3.7	3.7	1.5			17.3	
47	B-3	Uフレイク	D	2.2	9.1	2.6		0.4		
48	C-0	石核	C	8.0	5.7	4.5			238.2	212, 207, 211, 216と接合
49	C-0	石核	C	4.8	9.4	4.0			259.8	円盤状石核
50	C-0	石核	A-2	6.8	4.0	3.4			85.5	
51	C-1	石核	A-2	5.1	3.9	3.1			61.0	
52	B-2	石核	A-2	5.8	5.3	3.1			70.1	125, 126, 127, 129と接合
53	A-4	石核	A-2	6.3	4.5	2.8			76.3	118, 123, 124と接合
54	C-1	石核	A-2	6.1	3.9	2.1			44.8	平坦打面・113, 114, 115, 116と接合
55	C-1	石核	A-2	5.2	3.6	1.7			23.2	139と接合
56	C-2	石核	A-2	4.7	3.5	2.4			33.5	平坦打面・140, 141と接合

表1　遺物計測表①

図版番号	区	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	打面長	打面幅	重量	備考
57	B-4	石核	A-1	4.8	4.4	1.8			34.5	88，93と接合
58	A-4	石核	A-1	7.3	4.4	3.3			96.7	
59	B-2	石核	A-1	6.0	4.1	5.0			121.1	
60	B-2	石核	A-1	7.9	7.1	4.5			207.2	腰岳産黒曜石・表土
61	B-3	石核	B	3.8	5.2	5.0			90.0	203と接合
62	B-2	石核	B	2.5	2.9	2.5			23.6	204と接合
63	A-4	フレイク	A-1	6.6	4.0	1.7			31.2	全礫面・63と接合
64	A-4	フレイク	A-1	6.5	3.8	1.0	1.4	0.2	16.5	全礫面
65	B-4	チップ	A-1	2.1	2.3	0.4			1.8	全礫面・66，69と接合
66	B-4	フレイク	A-1	5.5	5.4	2.0	3.1	0.6	44.0	ほぼ礫面・65と接合
67	B-3	フレイク	A-1	6.6	3.3	1.0	1.4	0.5	14.3	下部礫面・68，71，72と接合
68	B-3	フレイク	A-1	1.9	1.1	0.4			16.8	右礫面，67，72と接合
69	B-4	フレイク	A-1	3.1	3.3	1.4			15.1	全礫面・65，70と接合
70	B-4	フレイク	A-1	5.0	3.3	1.0			11.0	ほぼ全礫面・69，71と接合
71	B-4	フレイク	A-1	5.2	3.4	1.1			15.2	調整剥片・下部礫面・67，70，72と接合
72	B-4	フレイク	A-1	4.0	3.5	1.1			11.5	左礫面・線状打面・67，68，70，71と接合
73	C-0	Uフレイク	A-1	6.5	6.1	1.2			32.7	下部礫面
74	C-2	フレイク	A-2	4.3	2.0	1.0	1.1	0.4	7.2	調整剥片・下部礫面・平坦打面
75	B-3	フレイク	A-1	7.1	2.6	1.1	0.9	0.6	15.7	調整剥片・下部礫面・打面調整有り
76	C-1	フレイク	A-1	5.0	2.5	0.8	0.6	0.4	7.3	調整剥片・下部礫面・打面調整有り
77	B-4	フレイク	A-1	3.9	2.2	0.8			5.5	左礫面
78	C-0	フレイク	A-1	5.2	3.9	1.0	1.4	0.9	11.7	下部折断・打面調整
79	A-3	フレイク	A-1	5.3	3.5	0.8	1.5	0.4	11.7	左礫面・平坦打面
80	A-3	フレイク	A-1	3.7	3.4	1.0			11.8	下部折断・右礫面・点状打面
81	B-3	フレイク	A-1	2.3	3.2	0.8	3.6	0.7	8.7	打面調整有り
82	A-3	フレイク	A-1	3.5	4.8	0.8			8.9	上下折断
83	C-1	Uフレイク	A-1	5.5	2.0	0.7	1.1	0.4	5	下部折断・打面調整有り
84	A-4	Uフレイク	A-1	5.5	2.2	1.0	1.3	0.7	7.9	打面調整有り
85	B-3	Uフレイク	A-1	6.2	2.4	0.5	1.1	0.5	6.1	打面調整有り
86	C-1	Uフレイク	A-1	4.8	2.7	0.7	0.6	0.4	6.2	平坦打面
87a	B-4	チップ	A-1	0.9	1.7	0.3	1.6	0.3	0.3	87bと接合
87b	B-4	フレイク	A-1	4.7	2.0	0.4			3.6	折断剥片・下部礫面・57，87a，88と接合
88	B-4	フレイク	A-1	4.7	2.4	0.5	1.3	0.4	3.9	57，87bと接合
89	A-4	Uフレイク	A-1	6.8	1.3	0.5	0.9	0.2	3.2	打面調整有り
90	C-0	フレイク	A-1	4.3	1.0	0.3	0.9	0.5	1.3	打面調整有り
91	B-3	二次加工剥片	A-1	4.7	2.0	0.9			6.6	
92	B-5	フレイク	A-1	4.6	2.1	0.4	1.0	0.3	3.0	
93	B-3	チップ	A-1	2.7	1.1	0.4			0.6	57，87bと接合
94	B-2	Uフレイク	A-1	3.9	1.4	0.5	1.0	0.4	2.1	打面調整有り
95	C-1	フレイク	A-1	3.8	1.6	0.2			1.1	96と接合
96	B-1	フレイク	A-1	3.9	1.3	0.4			1.9	調整剥片・上下剥離痕・点状打面・左礫面，95と接合
97	B-4	Uフレイク	A-1	4.7	2.8	0.5			4.5	上部折断
98	B-3	フレイク	A-1	3.9	2.3	0.6			5.3	下部折断・ポリッシュ有り・打面調整有り
99	B-3	フレイク	A-1	3.7	2.7	0.8			4.9	上部折断
100	B-4	フレイク	A-1	6.7	3.5	1.4	0.8	0.3	23.8	左礫面・101と接合
101	B-4	フレイク	A-1	2.9	2.1	0.7			3.3	折断剥片・左礫面・100と接合
102	A-5	フレイク	A-2	3.5	2.7	0.7			4.5	
103	B-4	フレイク	A-1	3.8	2.1	0.4	0.7	0.2	2.4	
104	C-1	フレイク	A-1	7.3	4.4	1.4			36.8	全礫面
105	B-3	Uフレイク	A-2	5.5	2.9	0.9	1.8	0.4	15.1	下部礫面・打面調整有り
106	C-1	Uフレイク	A-2	6.2	5.5	2.3			49.3	上下礫面・シャッポ状剥片・ポリッシュ有り
107	A-4	Uフレイク	A-2	6.5	2.6	0.9			12.4	上部断折・右礫面
108	B-3	フレイク	A-2	4.8	4.2	1.6			29.9	全礫面・シャッポ状剥片
109	A-3	フレイク	A-2	4.3	4.5	1.3			22.5	調整剥片・打面調整有り・110，133と接合
110	A-3	フレイク	A-2	5.8	5.9	2.3			80.6	調整剥片・下部礫面・109，134と接合
111	C-1	フレイク	A-2	6.5	4.0	1.3	1.7	0.7	31.1	調整剥片・全礫面・114と接合
112	C-0	フレイク	A-2	5.8	2.6	1.1			11.5	全礫面・破砕打面・113，114，115，116と接合

表2　遺物計測表②

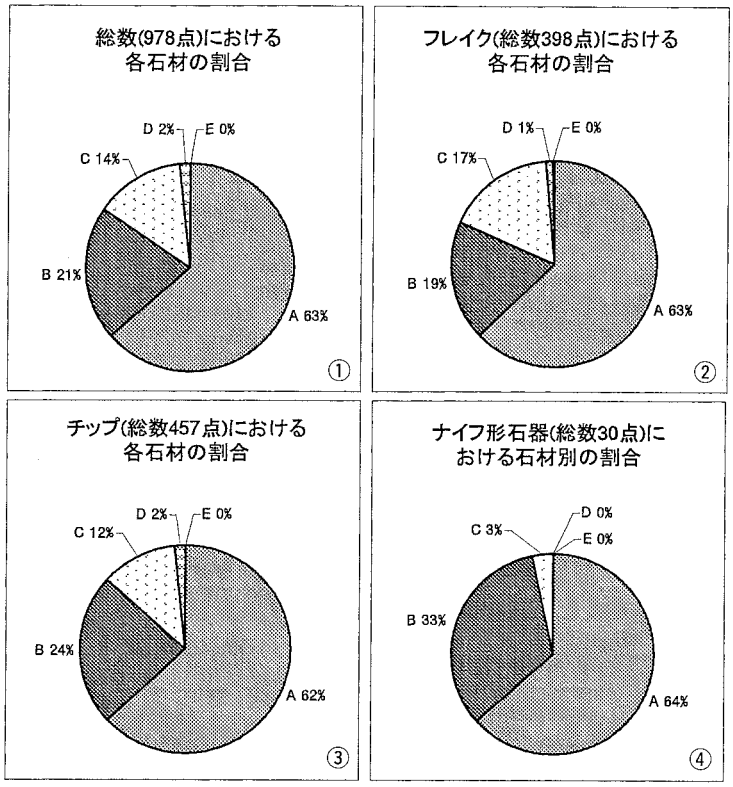
図版番号	区	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	打面長	打面幅	重量	備考
113	C-1	フレイク	A-2	4.8	3.8	1.0	1.3	0.4	15.0	左礫面・平坦打面・112, 115, 116と接合
114	C-1	フレイク	A-2	3.5	3.7	1.0	1.7	0.5	8.5	調整剥片・111, 112と接合
115	C-0	フレイク	A-2	4.9	4.3	1.3	2.0	0.3	19.1	左礫面・54, 112, 113, 116と接合,平坦打面
116	B-2	フレイク	A-2	3.0	2.2	0.5	1.1	0.4	2.4	左礫面・平坦打面・54, 115と接合
117	C-2	フレイク	A-2	4.4	2.2	0.5	0.9	0.4	4.7	下部折断・平坦打面・左礫面・54と接合
118	A-4	フレイク	A-2	3.9	2.8	0.8	1.2	0.5	9.1	下部折断・左礫面・打面調整有り・53, 122と接合
119	A-4	フレイク	A-2	1.8	1.6	0.3	1.5	0.3	1.3	下部折断・左礫面・打面調整有り・122と接合
120	B-3	フレイク	A-2	2.8	0.8	0.3			0.6	1, 121と接合
121	A-5	フレイク	A-2	2.6	1.3	0.6	0.9	0.5	1.2	下部折断・打面調整有り・1, 120, 124と接合
122	A-4	フレイク	A-2	4.8	1.8	0.7	1.3	0.3	5.0	左礫面・1, 118, 119と接合
123	A-4	フレイク	A-2	4.6	2.7	1.1			9.1	上部折断・53, 124と接合
124	A-4	フレイク	A-2	7.0	2.3	0.6	0.9	0.3	9.0	右礫面・打面調整有り・53, 123と接合
125	B-1	フレイク	A-2	4.5	3.3	1.0	1.6	0.9	11.2	52, 126, 127と接合
126	A-3	フレイク	A-2	4.5	3.0	0.4			3.0	線状打面・52, 125, 127, 128と接合
127	B-2	フレイク	A-2	2.7	1.7	0.3			1.2	線状打面・52, 125, 126と接合
128	B-2	フレイク	A-2	2.3	1.3	0.3			0.6	126と接合
129	B-2	フレイク	A-2	2.6	4.2	0.6	2.0	0.4	4.1	調整剥片・平坦打面・52, 130と接合
130	A-3	フレイク	A-2	2.1	3.1	0.8	2.1	0.8	3.3	調整剥片・平坦打面・129と接合
131	B-2	フレイク	A-2	3.7	1.7	0.6			2.0	下部礫面
132	B-4	フレイク	A-2	3.9	2.5	0.6	1.6	0.4	5.6	打面調整有り
133	B-5	フレイク	A-2	3.1	2.7	0.9			7.8	109と接合・表土
134	A-3	フレイク	A-2	3.4	2.8	0.5			4.0	上部折断・110と接合
135	B-3	二次加工剥片	A-2	4.7	3.6	1.8			21.9	点状打面・右礫面・136と接合
136	A-3	フレイク	A-2	2.0	3.0	0.4			2.1	135と接合
137	B-3	フレイク	A-2	3.2	1.5	0.6			2.5	138と接合
138	B-3	チップ	A-2	1.6	0.9	0.3			0.4	137と接合
139	C-2	Uフレイク	A-2	3.4	1.1	0.9			3.1	55と接合
140	C-2	フレイク	A-2	3.5	2.1	0.5			3.7	右礫面・56, 141と接合
141	A-4	フレイク	A-2	2.8	2.6	1.1			5.9	56, 140と接合・表土
142	C-1	Uフレイク	A-2	4.7	2.2	0.7	0.6	0.3	3.6	
143	C-1	フレイク	A-2	3.7	2.8	0.6	0.9	0.3	3.4	下部折断
144	B-1	フレイク	A-2	4.1	2.1	0.5			3.8	上下折断・右礫面
145	A-4	Uフレイク	A-2	3.6	2.8	0.6	0.8	0.4	5.2	下部折断
146	B-3	Uフレイク	A-2	3.8	2.5	0.5			5.4	上部折断・右礫面
147	B-5	フレイク	A-2	4.0	2.3	0.4			3.1	表土
148	B-3	フレイク	A-2	1.5	1.5	0.7			2.0	調整剥片・下部折断
149	B-2	Uフレイク	A-2	4.3	2.2	0.6	1.0	0.5	3.2	打面調整有り
150	B-2	Uフレイク	A-2	3.3	2.8	0.7			6.2	
151	B-3	Uフレイク	A-2	3.7	1.8	0.4			2.9	
152	B-3	フレイク	A-2	2.9	1.7	0.8			3.3	左礫面・上部折断
153	B-4	フレイク	A-2	3.8	2.0	0.4	1.3	0.1	2.1	線状打面
154	B-5	フレイク	A-2	3.5	1.8	0.5	0.8	0.2	2.5	線状打面
155	B-2	Uフレイク	A-2	6.3	2.7	1.0	1.5	0.4	13.4	下部礫面・表土
156	A-5	フレイク	A-2	4.1	1.6	0.5			3.8	左礫面
157	B-2	フレイク	A-2	3.3	2.4	0.5	1.1	0.4	2.6	打面調整有り
158	A-3	フレイク	A-2	3.2	2.5	0.7	2.3	0.5	3.3	下部礫面
159	B-3	フレイク	A-2	3.3	3.6	0.7	2.3	0.5	6.2	打面調整有り・下部礫面
160	B-6	フレイク	A-2	2.7	2.9	0.8			7.4	下部折断・打面調整有り
161	B-4	フレイク	A-2	4.0	1.4	0.5	1.0	0.4	1.6	打面調整有り
162	C-1	Uフレイク	A-2	3.7	1.5	0.5			2.2	上部折断
163	C-3	フレイク	A-2	3.7	1.9	0.5	1.0	0.4	2.6	打面調整有り
164	B-3	Uフレイク	A-2	2.9	2.6	0.5			3.4	上部右側折断
165	C-1	フレイク	A-2	2.2	2.7	0.4			1.6	調整剥片
166	B-2	フレイク	A-2	1.9	3.2	0.4	2.6	0.4	1.8	調整剥片
167	B-2	Uフレイク	A-2	4.6	2.3	0.7			5.1	点状打面・左礫面
168	A-5	Uフレイク	A-2	4.1	3.7	0.9	1.4	0.4	10.6	下部折断・表土
169	B-1	フレイク	A-2	3.5	3.0	0.6			5.4	上部折断・下部礫面

表3　遺物計測表③

図版番号	区	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	打面長	打面幅	重量	備考
170	C-1	二次加工剥片	A-2	3.9	3.5	1.1	1.4	0.5	10.5	平坦打面・石錐？
171	C-2	フレイク	A-2	2.4	2.3	0.6			2.3	下部折断・右礫面
172	A-3	フレイク	A-2	4.6	2.2	1.4	0.8	0.6	13.8	調整剥片・右礫面・表土
173	C-1	フレイク	A-2	5.4	2.2	0.6	0.9		6.8	線状打面
174	C-2	Uフレイク	A-2	5.1	2.5	0.9			8.5	点状打面・左礫面・175と接合
175	C-2	フレイク	A-2	3.0	1.5	0.5			1.7	左礫面，174と接合
176	A-4	フレイク	B	8.0	7.0	1.6		1.1	86.3	シャッポ状剥片
177	C-0	フレイク	B	5.9	2.9	1.6	0.5	0.3	16.7	調整剥片・下部礫面・180と接合
178	C-0	フレイク	B	3.8	4.1	1.2	1.3	0.6	12.3	平坦打面・左，下部礫面・179と接合
179	C-0	フレイク	B	3.0	5.9	1.1	1.5	0.5	17.1	左，下部礫面・平坦打面・178と接合
180	C-1	フレイク	B	6.0	2.9	1.3	1.3	0.2	14.3	左礫面・177と接合
181	C-0	フレイク	B	4.9	4.3	0.6	1.4	0.5	4.6	下部礫面・打面調整有り
182	C-0	フレイク	B	4.1	5.0	1.1	4.0	0.9	18.0	下部礫面・平坦打面
183	C-1	Uフレイク	B	4.9	3.5	0.9	1.8	0.6	11.9	平坦打面・左礫面
184	C-0	フレイク	B	6.4	5.5	0.7	0.7	0.2	12.3	左礫面
185	C-0	フレイク	B	4.3	3.3	0.5			4.2	上部折断
186	C-1	フレイク	B	6.2	5.0	1.2	2.0	1.0	23.9	打面調整有り
187	C-0	フレイク	B	4.4	3.0	0.5			5.4	上部折断
188	C-0	フレイク	B	2.6	3.5	0.4			3.7	上下折断
189	C-0	フレイク	B	5.3	2.7	0.7			7	上部折断
190	C-1	フレイク	B	5.4	2.6	0.5			5.5	下部折断・線状打面
191	C-0	フレイク	B	2.5	2.9	0.4			2.4	上部折断
192	B-2	フレイク	B	4.6	3.2	0.7	0.8	0.5	5.9	下部折断
193	C-0	フレイク	B	4.9	2.9	0.8	1.8	0.7	6.3	打面調整有り
194	C-0	フレイク	B	2.4	2.1	0.5	1.0	0.4	2.2	下部折断・打面調整有り
195	C-0	フレイク	B	5.1	2.8	0.5			5.2	破砕打面
196	C-0	フレイク	B	2.0	1.8	0.5	0.9	0.4	1.4	打面調整有り・197と接合
197	C-0	フレイク	B	1.9	1.8	0.5			1.1	上下折断・198と接合
198	B-2	フレイク	B	3.2	1.5	0.6	0.9	0.6	1.5	下部折断・平坦打面
199	B-2	フレイク	B	3.6	1.9	0.6	0.8	0.4	2.1	平坦打面
200	C-0	フレイク	B	3.3	2.7	0.3			2.3	下部折断
201	C-0	フレイク	B	4.3	3.1	0.6	1.3	0.2	4.9	
202	B-1	フレイク	B	4.6	1.0	0.7			2.9	
203	A-3	フレイク	B	3.7	2.7	0.9			7.7	61と接合
204	B-4	フレイク	B	3.0	3.1	0.5	3.6	0.7	4.3	下部礫面・62と接合
205	C-0	フレイク	B	6.6	3.2	0.6	1.8	0.5	7.4	平坦打面
206	C-3	二次加工剥片	B	3.0	4.5	2.0	2.8	1.3	22.9	左礫面・石核？・表土
207	C-0	フレイク	C	3.3	3.6	1.6			14.3	上部折断・下部礫面・48，208，211と接合
208	C-0	フレイク	C	4.4	3.6	1.5			23.4	上部折断・207，211，214と接合
209	B-3	フレイク	C	3.2	2.6	0.5			3.9	上下破砕・210，215と接合
210	B-3	フレイク	C	2.5	1.5	0.4			1.5	上下折断・209と接合
211	C-0	フレイク	C	5.4	2.4	0.7			8.9	上部破砕・48，207，208，209，210，212，215と接合
212	B-3	フレイク	C	3.5	1.9	0.6			4.0	48，208，211，215と接合・表土
213	C-0	フレイク	C	4.4	2.3	0.7			6.5	下部折断・打面調整有り・214と折断面接合
214	C-0	フレイク	C	4.8	2.7	1.1			12.1	上部折断・下部礫面・213と折断面接合・208と接合
215	C-1	フレイク	C	4.8	2.8	0.6	2.0	0.7	10.4	209，212と接合・表土
216	C-1	フレイク	C	3.6	2.2	0.5			4.5	48と接合
217	C-1	チップ	C	2.2	2.5	0.4			2.0	
218	C-0	フレイク	C	5.4	4.0	1.0	2.1	0.8	20.7	左礫面・打面調整有り
219	C-1	フレイク	C	3.1	3.0	0.5			5.1	下部折断

〔凡　例〕A-1：漆黒色黒曜石　A-2：茶褐色流理が入る黒曜石　B：青灰色黒曜石　C：玄武岩　D：玉髄（系）／単位：cm，g

表4　遺物計測表④



第36図　出土遺物の石材別割合

出土遺物の属性

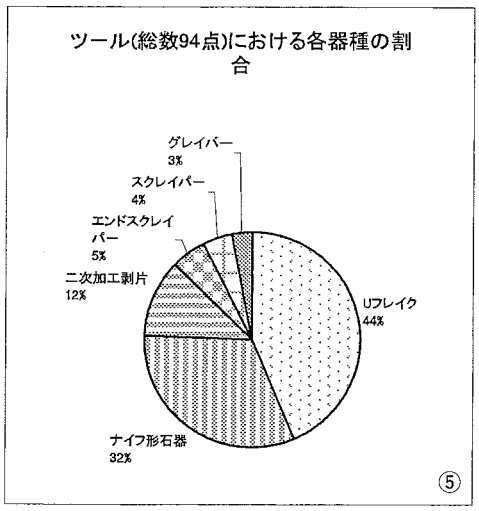
出土遺物の総数978点について，石材別・器種別にその属性をグラフに表した。グラフではチップ・フレイクにおいて，黒曜石Ａ－１とＡ－２の細分が不可能な遺物が多いため，一括してＡという表記をおこなっている。

第36図の各石材別の割合①～③のグラフは，ほぼ同一の傾向にあり，黒曜石Ａが60%，黒曜石Ｂが20%，玄武岩が15%前後をほぼ示している。

遺物総数に対するフレイク・チップの石材の割合に大きな変化がないということは，剥片剥離の工程のなかで得られるフレイク・チップの数には相関関係があることを示しているものと考えられる。石材のなかでＡ－１・Ａ－２の細分ができればさらに言及されるものと思われる。

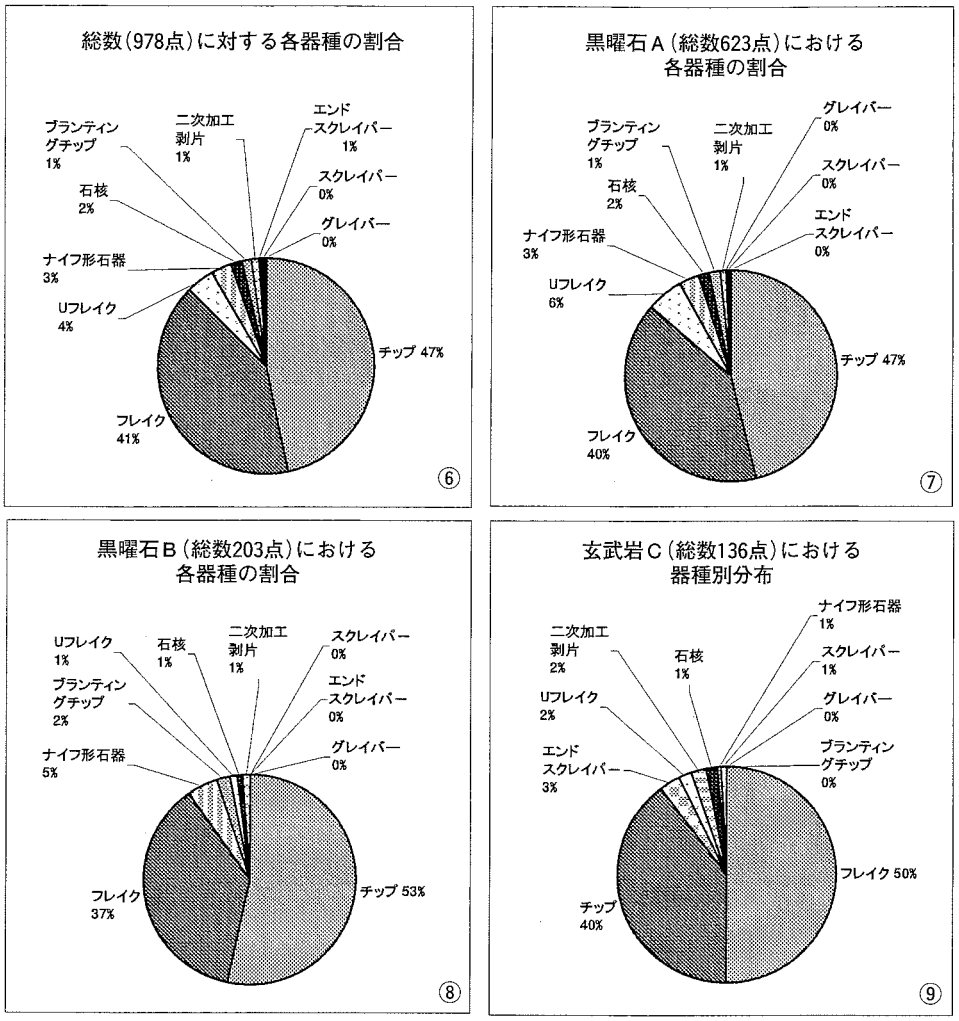
④は，本遺跡の主体的利器であるナイフ形石器の石材の依存表である。このうち，Ａの内訳はＡ－１素材が43%（13点），Ａ－２素材が21%（６点）で，剥片・チップを含めた黒曜石素材全体ではＡ－２が多いという傾向とは相違する。また，石材Ｂについては，①のグラフでは21%にすぎないが，ナイフの割合としては33%であり，石材Ａが表①②でほぼその比率が同率であることと相違し，石材Ｂについてはナイフとして加工する比率が高かったことを意味する。

第37図は石器の割合をグラフ化したものである。石器自体が，遺物総数の全体の約10%という中で，Ｕフレイクとナイフ形石器が際だっている。二次加工剥片・Ｕフレイク類をスクレイパー類として捉えることが可能であるならば，組成として尖頭器類，台形石器等を含まないという本遺跡の特徴から，本遺跡におけるナイフ形石器のほとんどが尖頭器的機能をもっていた可能性があると捉えることもできよう。



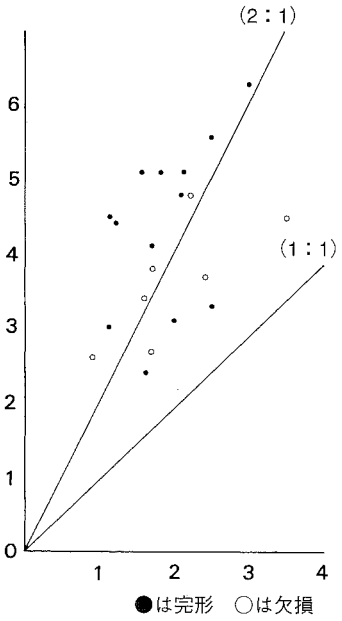
第37図　器種の割合

第38図の器種の割合で，⑥の遺物総数に対する各器種の割合では，チップ・フレイクで88%を占め，本遺跡が剥片剥離を主体的に行う場であったことを示す内容となっている。ここでのフレイクは剥片の項で述べたごとく，幅１cm，長さ２cmのものを基準に取り上げているのであ



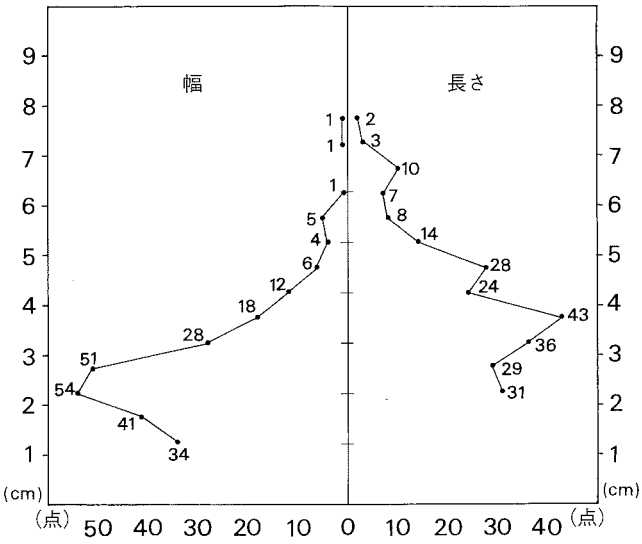
第38図　石材別器種の割合

って，内容的には石核調整時に剥離された剥片がほとんどであることを考えれば，チップと同類と考える必要もある。器種による石材別のグラフ⑦～⑨においても，石器は全体のほぼ10%という値が得られている。この値は，あくまでも本遺跡に残された物という視点を考慮すべきであり，遺跡から持ち出された遺物が反映されていないことを念頭に入れなければならない。ただし，本遺跡の素材に対する石器遺存比率が10%をどれも示すということは本遺跡のパターンの一つと捉えてよいだろう。



第39図　ナイフ形石器長幅表

第39図は，ナイフ形石器の長幅表である。長幅比２：１から３：１の間に集中する。３：１以上の長幅比をもつものもあり，大形の縦長の剥片を素材としていたことが窺われる。また，本遺跡の剥片の特徴を知るうえで，長さ・幅について分布の度合いを調べたのが第40図である。幅については，２～３cmにピークをもち，長さについては，４cmを頂点として分布のピークをもつことが理解できる。



第40図　剥片の長さと幅の相関表

剥片の取り扱いが幅１cm以上，長さ２cm以上のもの，長幅比２：１以上のものについて取り上げたが，第40図からは，２：１から，１：1.5の剥片にピークをもち，やや寸詰まりの剥片であることがわかる。本遺跡の主体利器であるナイフ形石器が２：１以上の長幅比をもち，３：１以上のものも素材としていることから，遺跡出土の剥片の多くは，目的的剥片とはかけ離れたものであることが理解できる。このことからも，本遺跡が素材剥片の生産の場であって，多くの石器素材，あるいは石器は調査区外に持ち出されたものと判断できる。

第６章　接合資料

石核・剥片間接合

接合資料は先に述べたように25例があり，その中でも石核と剥片との接合は，ユニット１～４の主体となるもので，剥片剥離過程を示す良好な資料が得られた。また，剥片間の単独接合については，第１ユニットと，第３ユニットを中心に多く接合している。特に第４ユニットでの接合の多さは，本遺跡のユニットとしては大きな広がりを持つ第３ユニットの設定に，一つの有効性が得られたものと判断することができる。

石核と剥片の接合

接合資料１（第42図）　玄武岩石核に８点の剥片が接合した資料である。剥離された剥片は，石核上に残された打面調整からも理解できるように，打面調整を丁寧におこなった縦長剥片が剥離されている。打面と主要剥離面はほぼ90度をなし，接合資料の剥片は末端部がやや内傾し，底辺に自然面を残す。剥離作業は最初図面左側を主作業面としており，208の剥片を剥離した後に徐々に石核の主作業面を90度変え，右側を主作業面へと移行していったことが理解できる。黒曜石素材の石核は，打面を傾斜させたり，丁寧な側面調整をおこなうことを特徴とするが，この石核の最大の特徴は，打面と剥離面との成す角度が90度であることと，打面調整が丁寧であることが挙げられよう。剥離された剥片は，側面の剥離痕から大形の縦長剥片も剥離したことが窺え，かなり良好な縦長剥片が剥離されたことを類推させる。剥片のほとんどは石核の周辺から出土しているが，210・212の剥片が15m以上の距離をもって接合するなど剥片剥離後の剥片がかなり移動している。ただし，210・212の剥片はチップ同様のものであり，廃棄的な意味があったことも考えられる。また，接合した剥片自体は，剥片上

に残された剥離痕から観察できる剥片のような目的的剥片の出土が見られないことから，目的的剥片はこの場から持ち出された可能性が大きい。したがって，この場では剥片剥離を目的とした場所と捉える必要があろう。

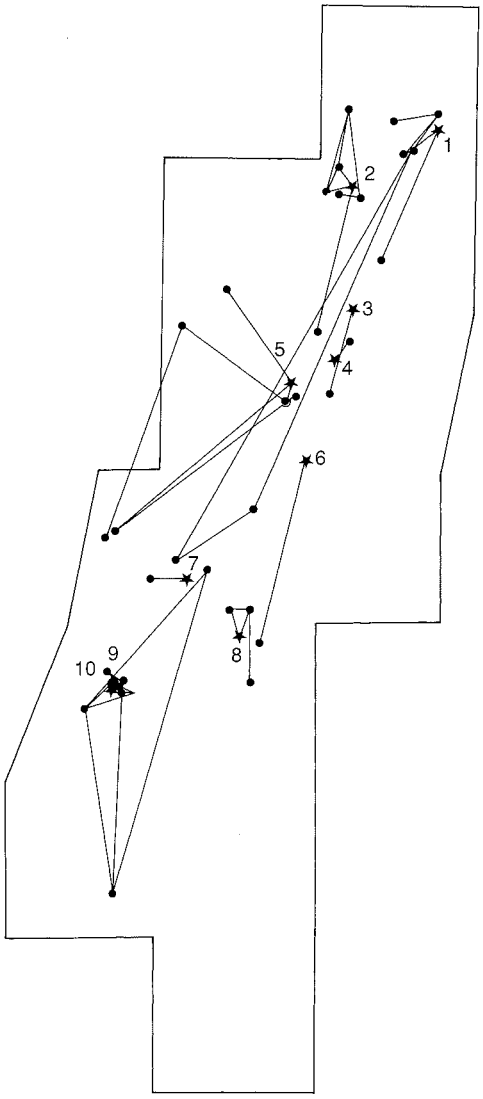
接合資料2（第43図） 黒曜石Ａ－２の円礫を素材とした石核54と，剥片111～117の接合状態である。接合状態から，最初に原礫の一端に打撃を加え111の剥片を剥離したのち，石核正面に112のような数条の礫面付着の縦長剥片を剥離し，その剥離面を打面として石核の背面に大きな調整を加えている。調整は石核正面から背後に113～116の円板状の剥片を剥離し，石核全体を薄く仕上げている。その後に縦長剥片の本格的な剥離作業をおこなう。石核前面の剥片剥離に対し，90度打面を転移して背面調整をおこなうことがこの石核の最大の特徴で，大胆に分厚い調整剥片を剥ぎ，その調整剥片は使用痕など一切確認されないことからも，純粋に調整のための剥片と捉えられる。

接合資料3・4（第44図） 卵状の礫の一端を加撃し，剥片を剥離している。礫の大きさが10cm前後と予想され，剥片剥離も他の石核のように整然とした剥離過程は看取できない。ただし，石核55に接合した剥片139は，使用痕が観察される。接合資料４は，上部に打面を形成した後90度打点を移し，楕円形の礫の長軸から打撃を加え，さらに90度打面を転移して長軸方向から剥片を剥いでいる。剥片140は途中でヒンジを形成したため，その次の剥離は下部から剥離をおこなって剥片141を獲得している。この２つは黒曜石Ａ－２の全く同じような小型の原礫を使用している。小型の円礫にたいしては，あるいは無作為的にも見える剥片剥離をおこなっていたような状況の資料である。

接合資料5（第44図） 断面三角形の52の石核に，129・130の横長剥片と，125～128の薄身の縦長剥片が接合している。石核の形状は円盤状を呈し，125～128の縦長剥片を剥離している一面は平坦で，129・130の横長剥片が接合している面は三角形を呈し厚みがある。横長剥片は調整のための剥片と思われ，横長剥片の剥離面を打面として薄身の縦長剥片を剥離するという過程を取っているようである。

接合資料6（第45図） 石核62に横長剥片204が接合したもので，甲板状の打面は本来の石核から分割して剥離された痕跡と思われる。

接合資料7（第45図） 円礫の最大厚の部分を半割



1～10は接合資料番号を表す。

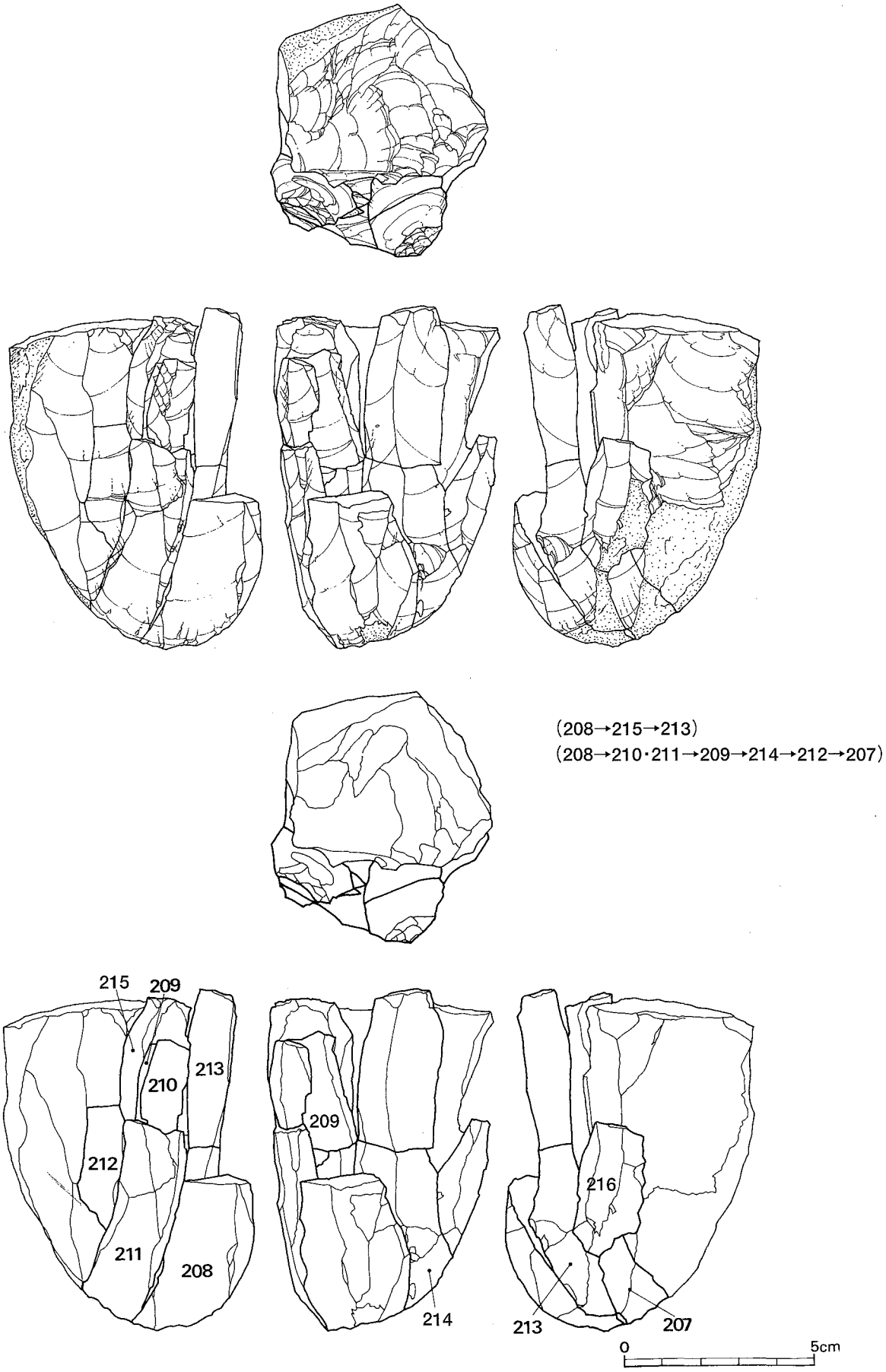
第41図　石核・剥片間接合

して打面とし，寸詰まりの剥片203が接合している。他の石核と相違し，円礫に対し横方向に垂直に打面を形成し，原礫半割の段階で剥片の長さは限定されていることから，接合の剥片203は目的的剥片に近いと考えられる。剥片の打面上に残された調整は，打点までは達しておらず，あくまでも平坦打面である。剥片の打面における調整は，剥離前の縁辺の調整で，打点を後退させて剥離をおこなったため石核前面に残された打点部は鋸歯状を呈している。素材は，黒曜石Ｂの中でも流理が走るもので，第１ユニットで多数出土した黒曜石Ｂの剥片やナイフ形石器の個体とは完全に相違する。また，第１ユニットを中心とする黒曜石Ｂ素材の剥片を剥ぐような剥離工程を取っていないことから，第１ユニットの黒曜石Ｂの剥片類とは異なる剥片剥離が存在したと考えたほうが良いものと思われる。

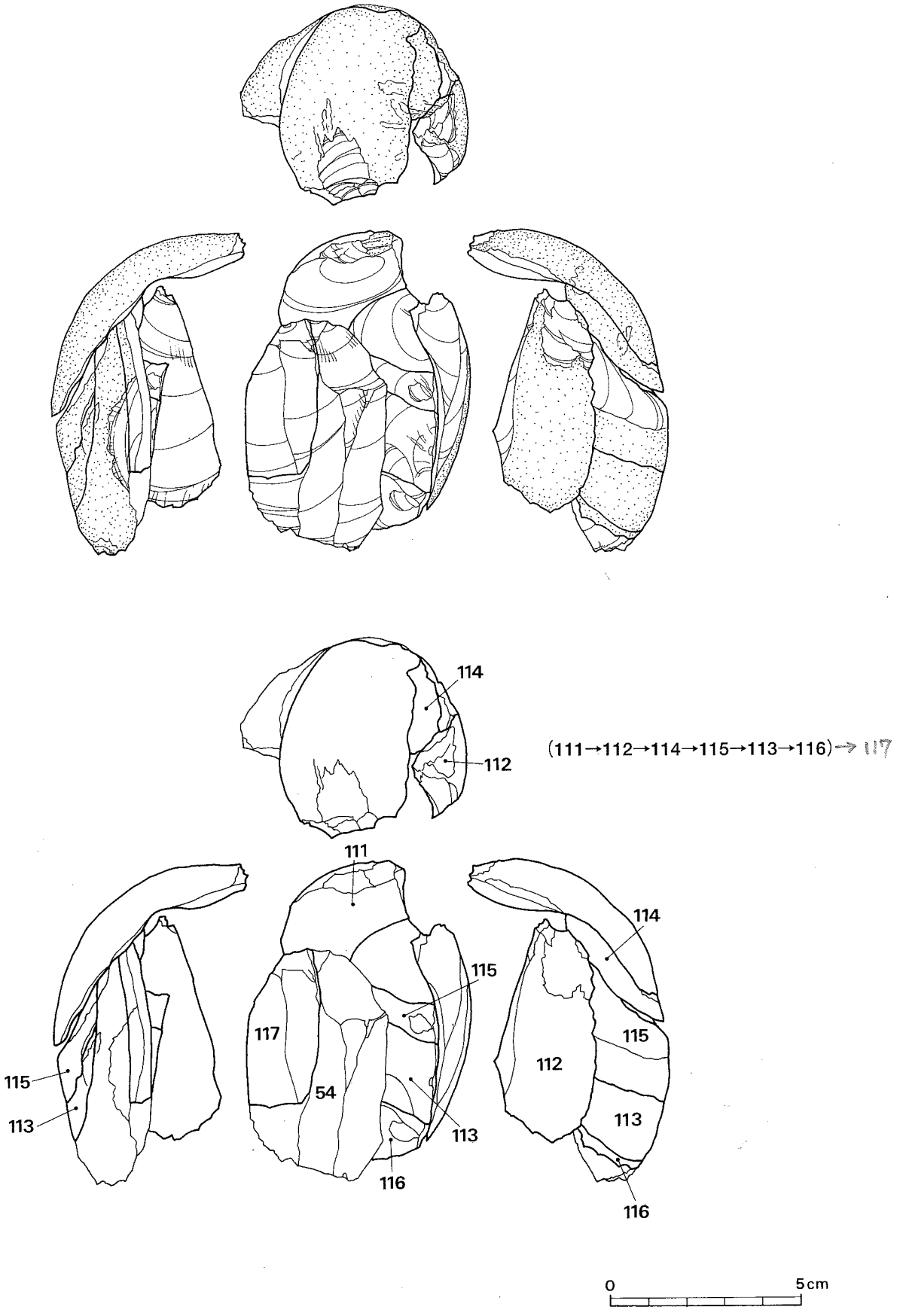
接合資料８（第45図） 急傾斜打面を特徴とする石核で，薄身の縦長剥片２点とチップ１点が接合している。ほかの剥片よりもかなり薄い剥片が剥離されており，剥片の打面も線状に近い打面である。側面調整は原礫段階で表皮を剥いだ段階のもので，その後に調整を入れた形跡はない。

接合資料９（第46図） 石核に剥片が８点接合した。このなかにはナイフ形石器も含まれており，しかもナイフ形石器に使用痕が看取できることから，剥離作業の場と石器の使用の場がほぼ同じであったことが予想される。剥片剥離は，最初に数回の打面調整をおこなった後，一面から剥離作業を繰り返し，ほぼ並行に縦長剥片を剥離している。この過程において，接合資料２のような背面調整などはおこなわない。原礫の最長軸面以上に剥離が進行していく過程で，剥片が内側に内湾するようになり，最後に遺棄されたものと思われる。この石核がナイフ形石器の素材を剥離することを目的とした石核であったことは，ナイフの接合から明らかであるが，ナイフの素材である断面台形の剥片を剥離するために，120のような断面三角形の剥片を剥離する過程があらかじめ準備されていたといえる。つまり，剥片の剥離に際してできた三角形の稜を除去することにより，断面が台形の剥片を剥ぐことができるのである。この石核から剥離された目的的剥片はせいぜい３～４枚と考えられる。

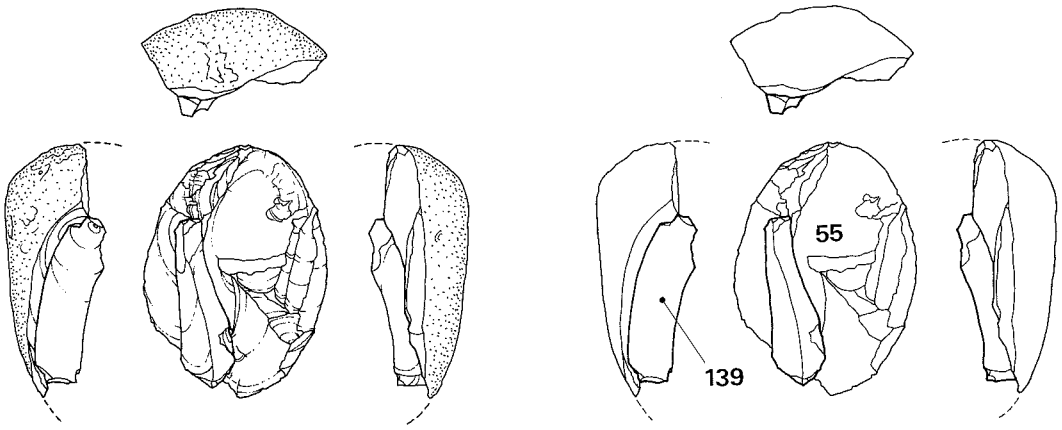
接合資料10（第47図） 原礫から最初の打撃を加えた時の資料である。接合資料２と同様に背面に大きな調整を加え，大幅に石核の形状を変えている。剥離作業面と背面調整面の成す角度は約50度を測り，稜を形成する。この２点の接合により，原礫の推定復元が可能で，最大長約10cm，最大幅約5．5cmの原礫を使用したことが理解できる。接合資料10は第４ユニット中にあり，黒耀石Ａ－１を使用しているが，この他に大型剥片の出土はほとんどなく，この石核が周辺で頻繁に移動した末に，最終的に最初の行程を行った場所に遺棄したのか，あるいは調整剥片を含む多くの剥片がこの場から持ち出されたのか，その動きについては再検討する必要があると思われる。


(208→215→213)
(208→210・211→209→214→212→207)
215
209
213
210
212
211
208
209
214
216
213
207
0
5cm

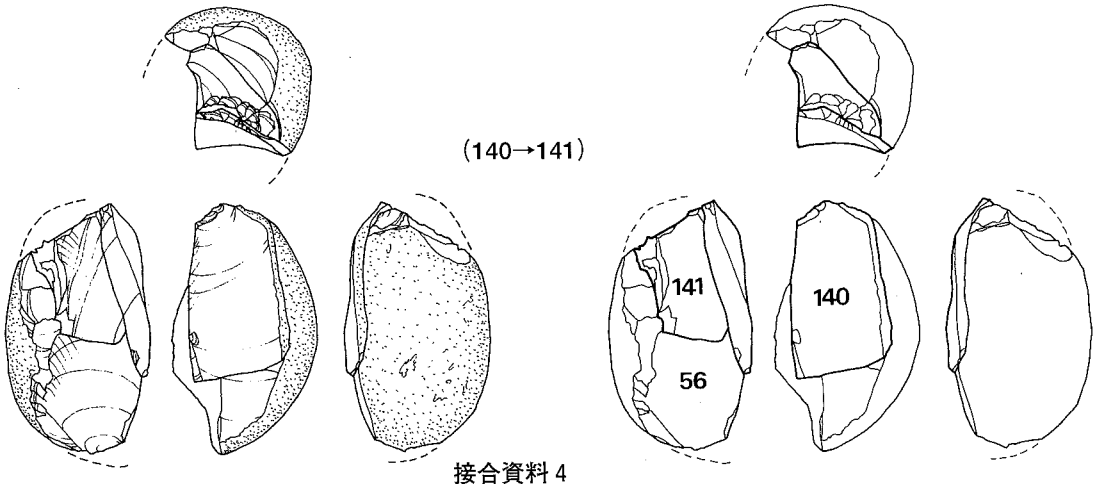
第42図　接合資料1


114
112
(111→112→114→115→113→116)→117
111
114
115
117
115
112
115
54
113
113
116
116
0
5cm

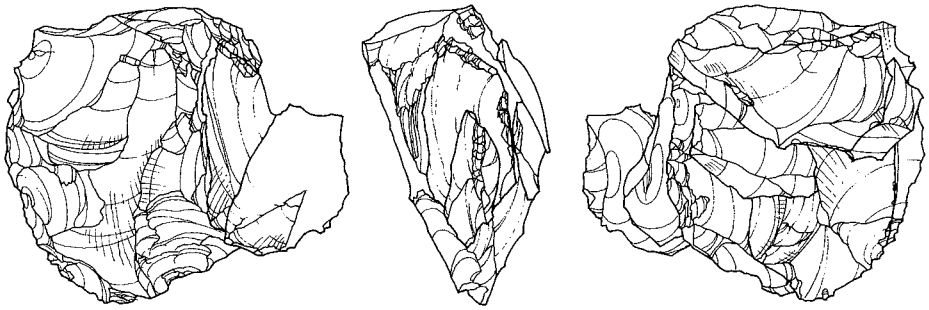
第43図　接合資料 2



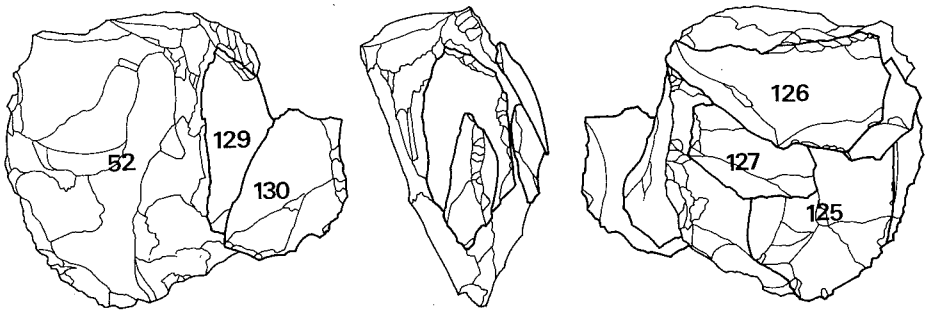
接合資料 3



接合資料 4



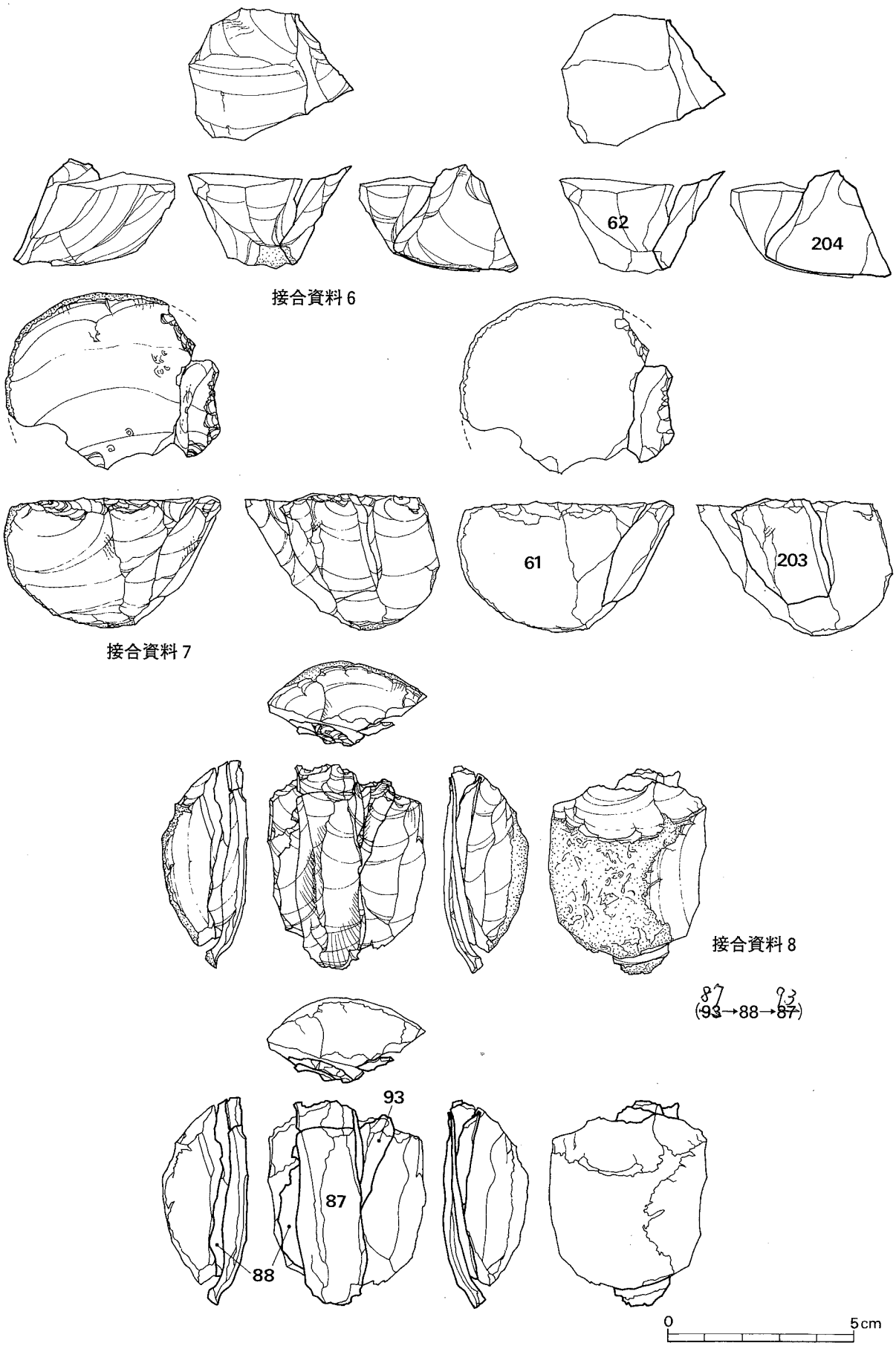
接合資料 5



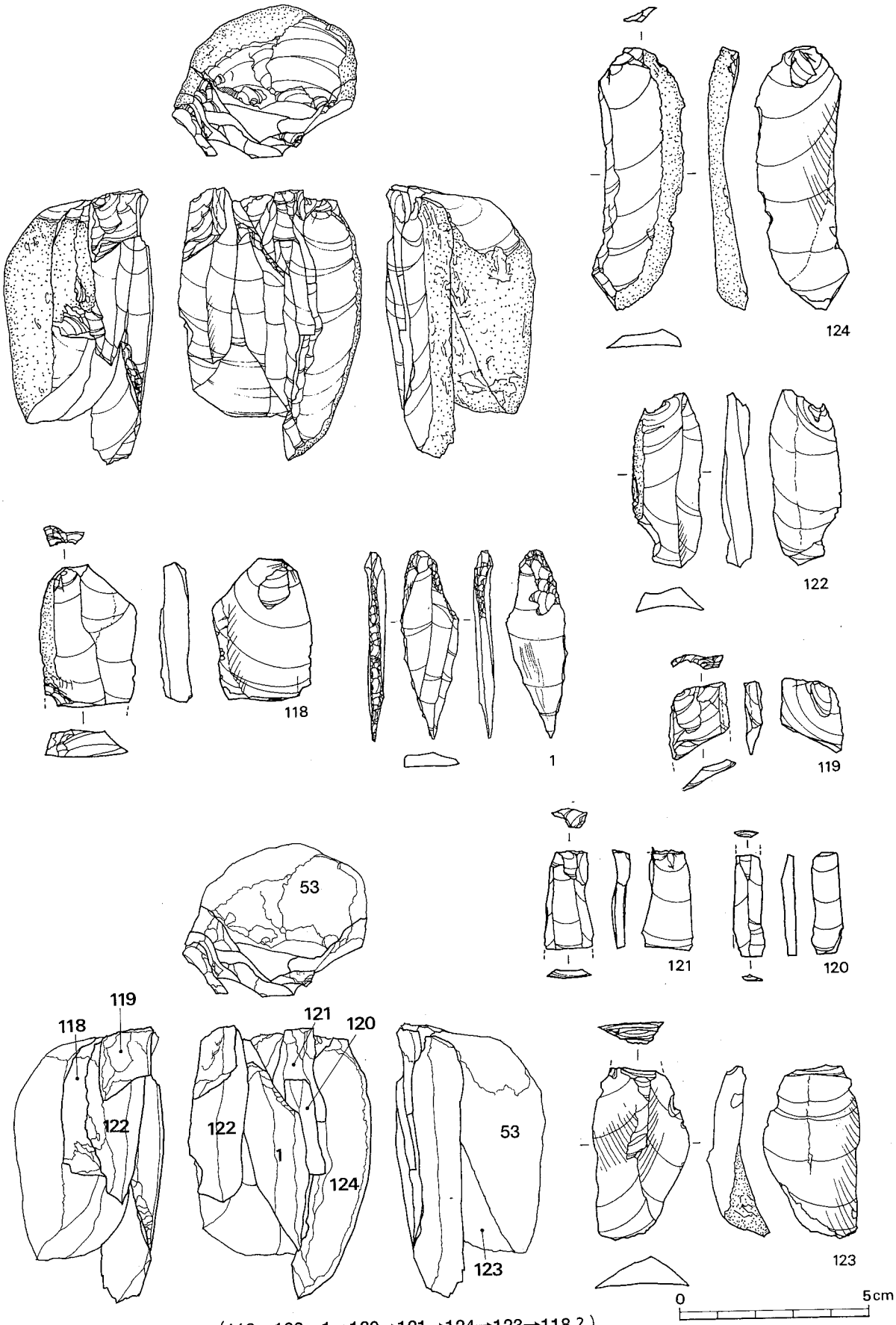
(130→129→126→127→125)

0 5cm

第44図　接合資料 3 ～ 5

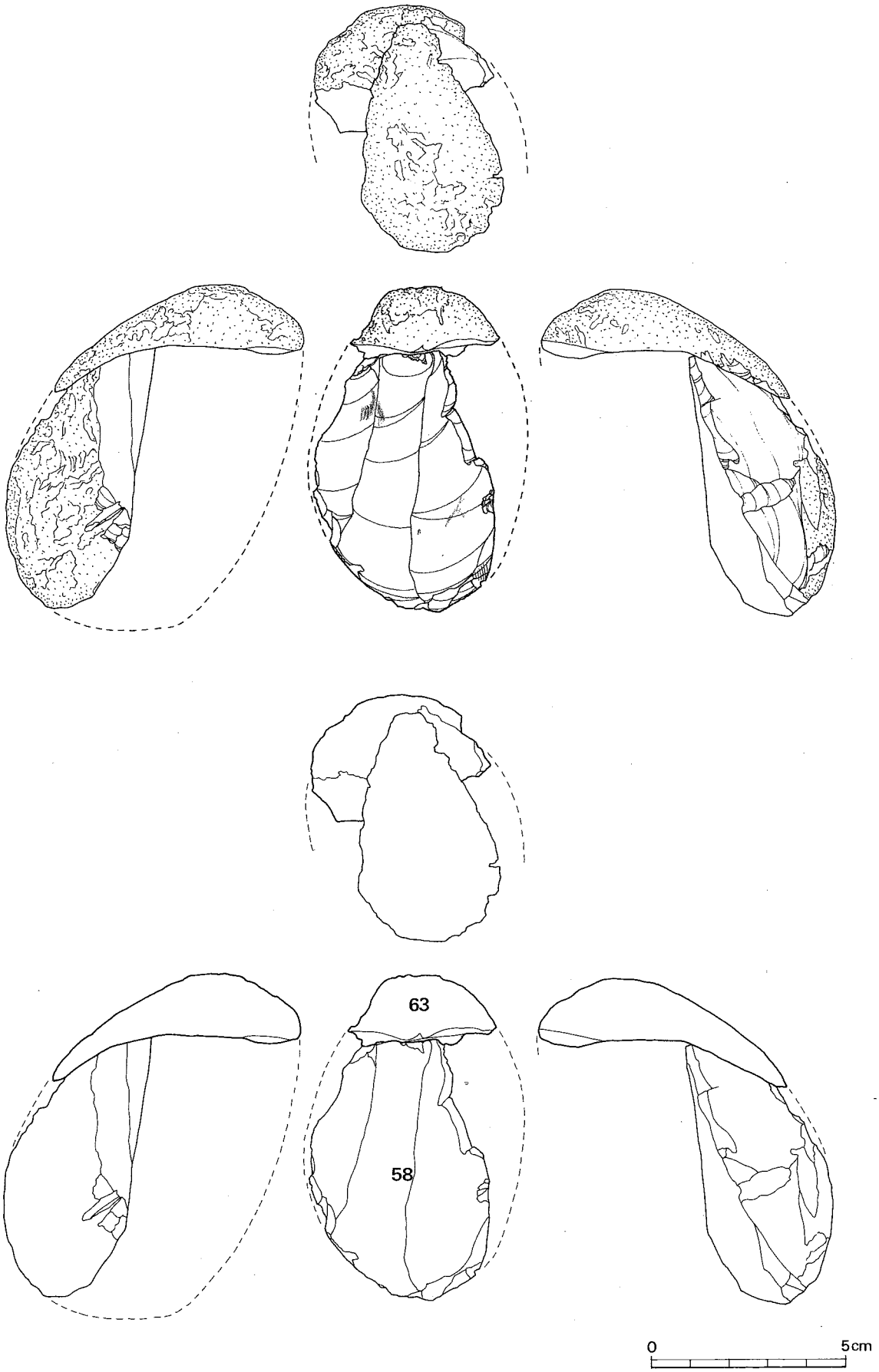


第45図　接合資料6～8



(119→122→1→120→121→124→123→118？)

第46図　接合資料９



第47図　接合資料10

剥片間接合

接合資料１・２　第１ユニット内の青灰色黒耀石を使用した剥片で，２例とも大きく礫面を残余させる。接合資料１は，１回の大きな剥離により打面が形成されており，その一端から連続的板状の剥片を剥離した結果得られた調整段階に得られた剥片と考えられる。接合資料２は，断面三角形の剥片どうしが接合し，互いに縦長剥片となっている。上部の剥片を剥離した後にその剥離面を打面として，90度剥離方向を転換して剥片剥離をおこなうが，その後に再度90度打面を転換して稜を除去するような剥離をおこなうことによって２つ目の剥片が剥離されている。横方向に剥離した剥離面は，薄い幅広の剥片が剥離されており，第１ユニット内出土の青灰色黒耀石の剥片類に近似した剥片が剥離されたものと考えられる。ただし，このユニット内に剥片剥離の痕跡を残すものは，この１点のみであり石核そのものはユニット外にあるものと考える。

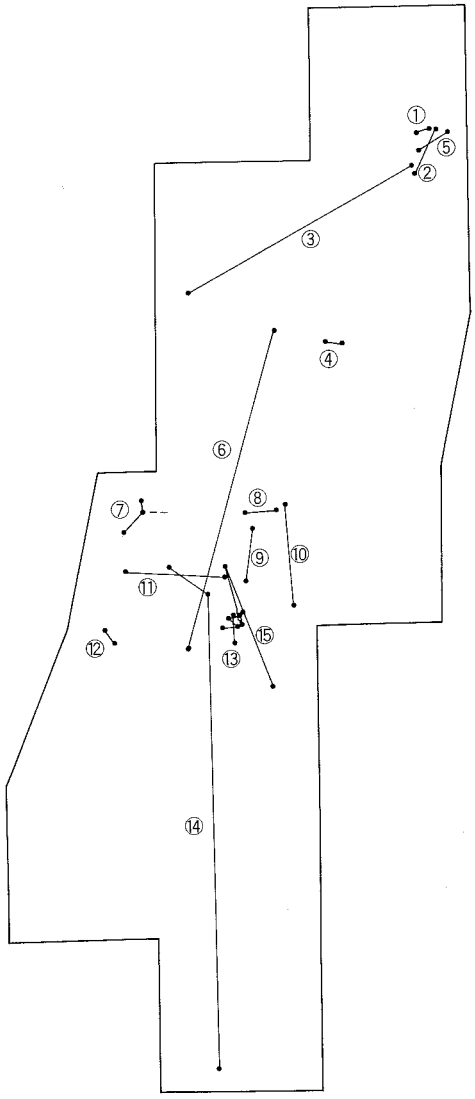
接合資料３　本遺跡内でも唯一交互剥離の痕跡を残す資料である。２点ともに薄身の剥片で，同じ方向から剥離されているが，背面の剥離痕は上下からの剥離を観察することができる。この資料の他は，上下方向の剥離痕を残すものは無い。黒耀石Ａ－１を素材としており，非常に薄身であることが特徴である。

接合資料４　石核の側辺調整のための剥片で左側に大きく礫面を残しており，中央部は石核の作業面にあたる。石核の側辺を順次調整した過程を示す。

接合資料５　黒耀石Ｂ素材の折断面接合例で，整った縦長剥片である。２点の剥片はほぼ均等に分割されている。

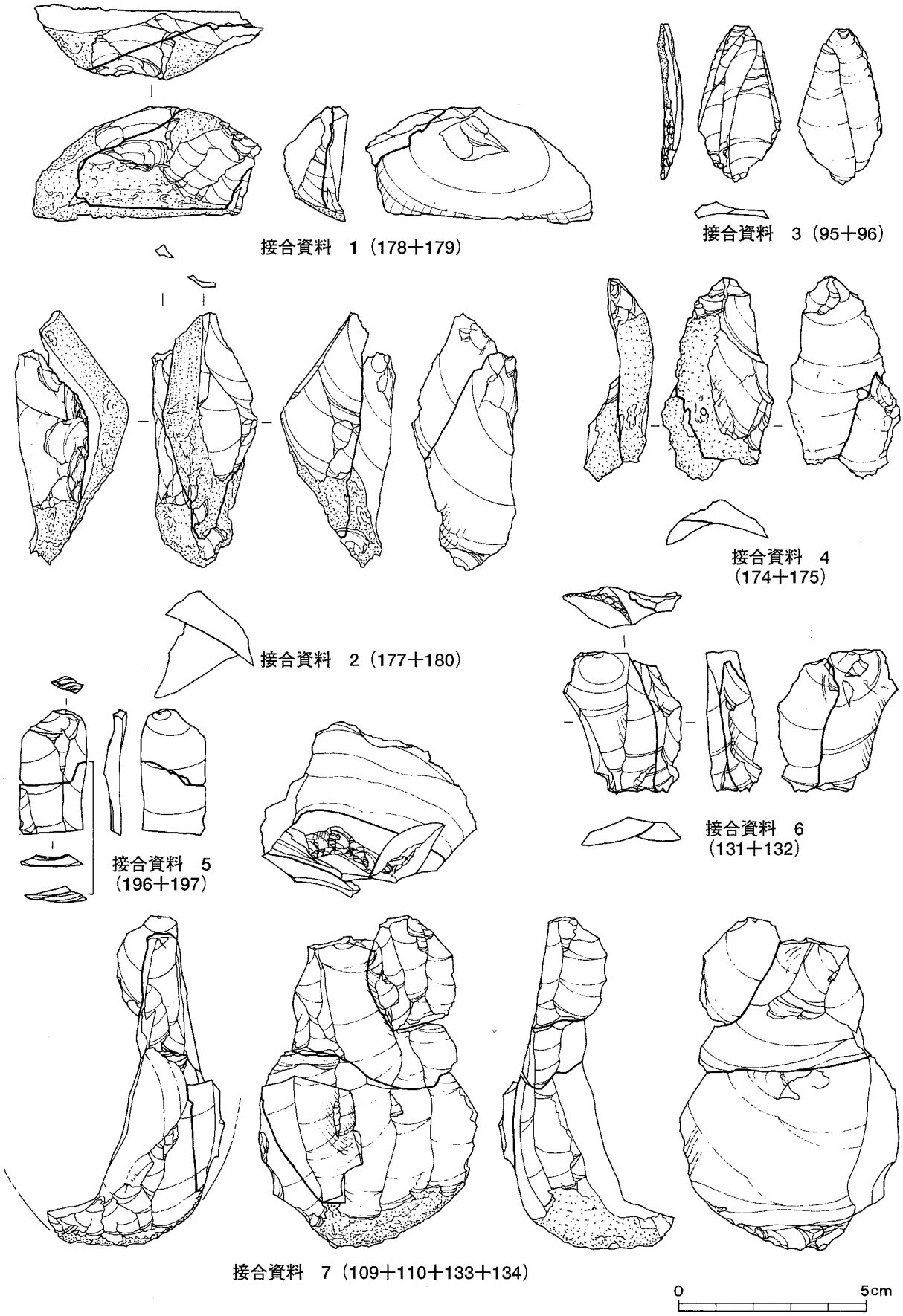
接合資料６　黒耀石Ａ－２素材の剥片の接合。

接合資料７　黒耀石Ａ－２素材の大形剥片に，３点の剥片が接合。石核の作業面調整の際に剥がれたもので，石核底部にまで剥離が及んでいる。旧剥離面の観察から，石核の作業面として存在したときは，整った縦長剥片が剥離されていたものと判断されるが，途中ヒンジが形成されたため，大幅な作業面調整が必要になったために剥離した大形剥片である。接合した剥片は，134のような整った縦長剥片と，133のような分厚い剥片で，133は途中で剥落し大きなヒンジを形成する。また，この大形剥片の剥離においても剥離の衝撃によって109と110に分割されており，本来の石核の作業面にも影響を与えたものと考えられる。



①～⑮は接合資料番号を表す。

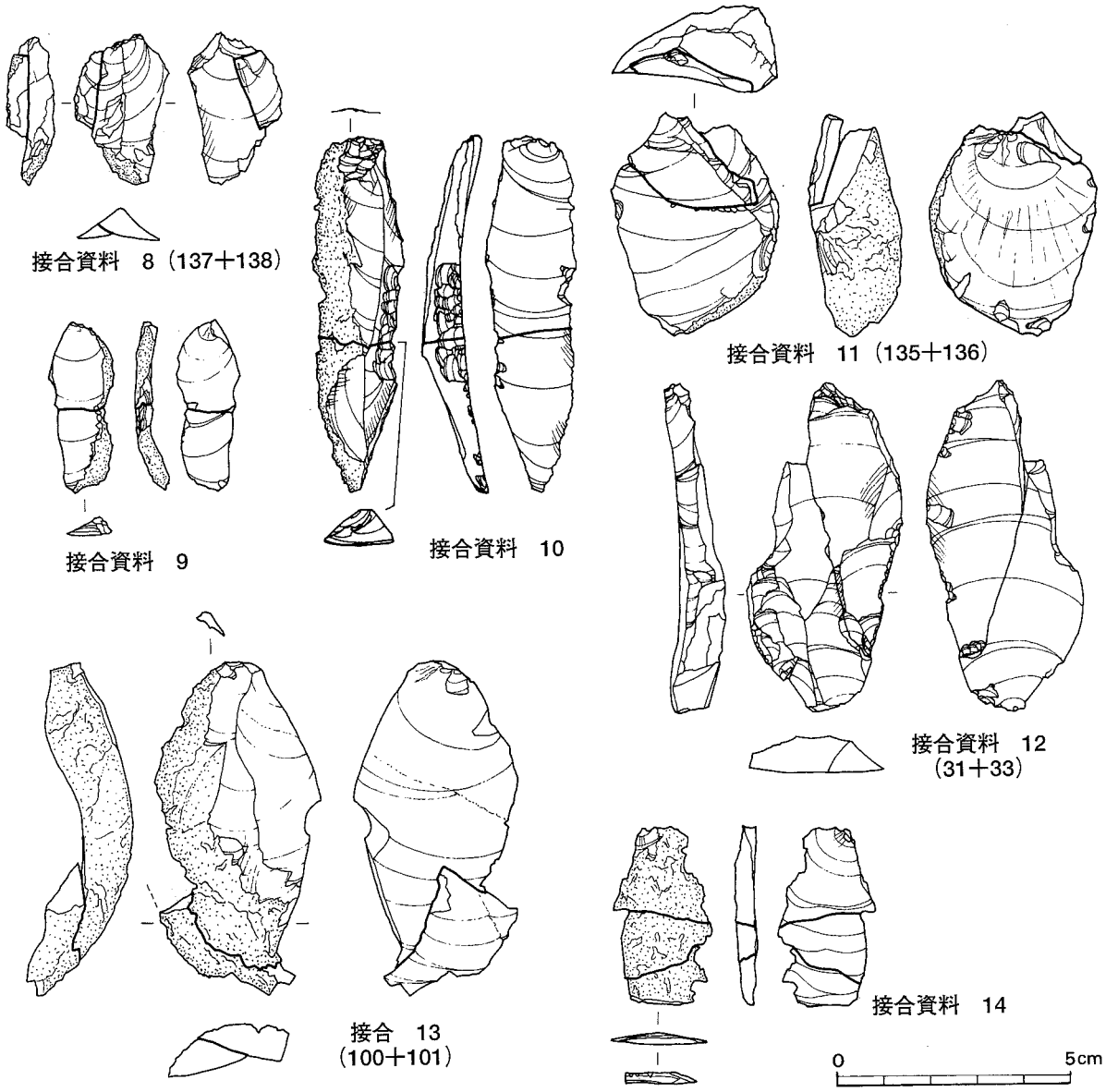
第48図　剥片間接合関係図


接合資料　1（178＋179）
接合資料　3（95＋96）
接合資料　4
（174＋175）
接合資料　2（177＋180）
接合資料　5
（196＋197）
接合資料　6
（131＋132）
接合資料　7（109＋110＋133＋134）
0
5cm

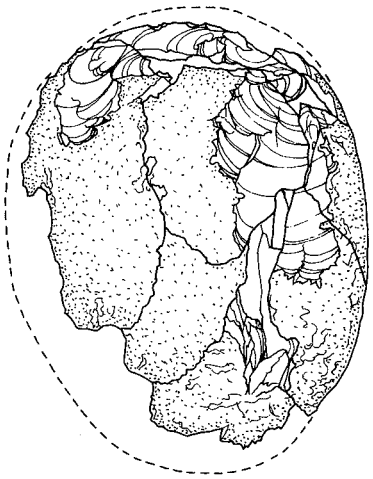
第49図　剥片間接合

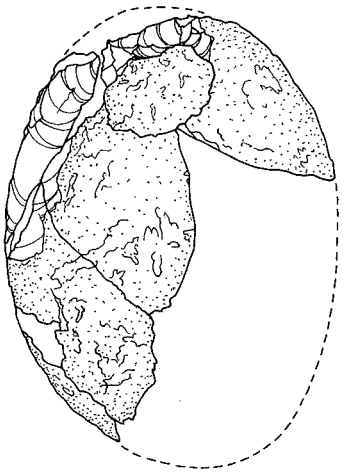
接合資料８～接合資料15は折断面接合とフレイクとチップとの接合関係である。

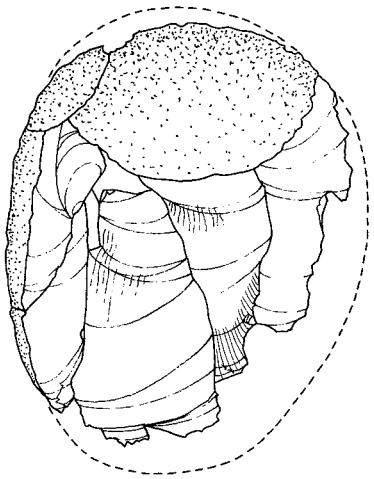
接合資料15　原礫の大きさが復元が可能な，調整剥片どうしの接合。円礫の外皮面の除去過程がわかる資料である。原礫の頭頂部（図面ｄ）に無作為に最初の打撃を加え，この打撃面を打面として外皮表面を剥離している。接合資料にみる剥離順序は，65→69・70→72→66→68→67→71となる。それぞれの主要剥離面はリングが詰まっており，かなりの力が加わっていることが読み取れる。66の剥片は，石核の打面部を形成するためのもので，ａ面が石核の作業面にあたる。66の大形剥片の角度から，石核はかなりの急傾斜打面となり，隣接して出土した57の石核の打面，外皮面とも共通する。接合面をもたないことから断定できないが，同一個体であるならば原礫から剥片剥離までが一貫しておこなわれたことを示す資料として特筆される。



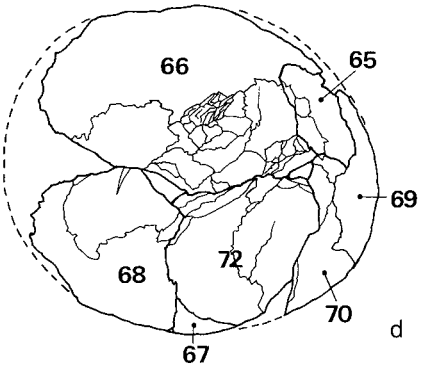
第50図　剥片間接合

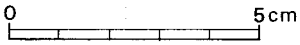




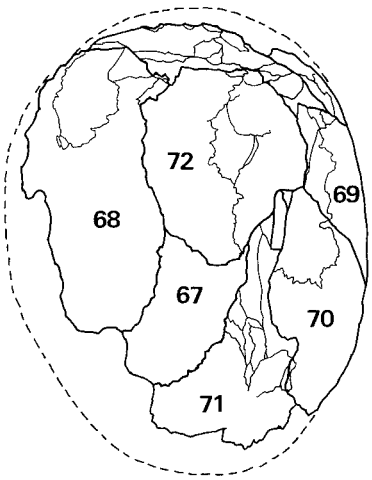


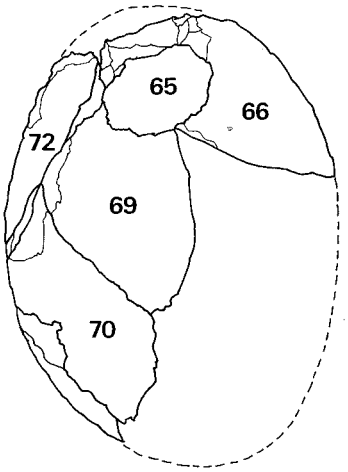
接合資料　15

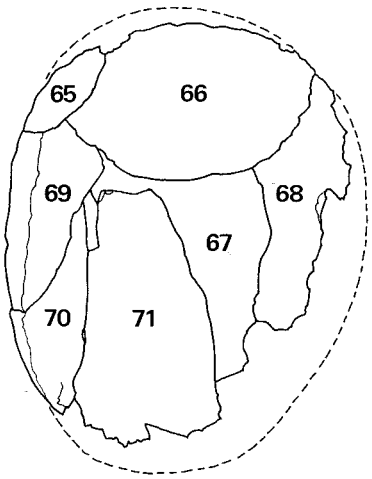




(65→69・70→72→66→68→67→71)







第51図　剥片間接合

第7章　ま　と　め

これまで遺跡の遺物分布・遺物内容・接合関係などについて触れてきた。結果，今回の調査区が遺跡の中で剥片剥離を主体的におこなうという空間であることが理解できた。このことについて，再度各ユニットの性格について通観してみる。

各ユニットの性格

第1ユニット　黒耀石A－1・黒曜石A－2・黒耀石B・玄武岩の4つの石材が半径1m内に集中する。このユニットで出土している石核は，黒耀石A－2の茶褐色のものは，石核調整段階でその場に廃棄され，玄武岩の石核は，剥片との接合関係が見られるが，製品が存在しない。黒耀石Bについては，石核の出土はないが，調整段階の剥片とチップの集中が見られるなど多様な在り方を示している。この状況から，この場に多様な石材を持ち込み，その石材に応じた多様な剥片剥離をおこなっていたことが理解できる。また，この状況は一度に多種の石材を搬入したか，あるいは一定の期間をおいて別々の石材が搬入され，同じ場所で剥片剥離をおこなった結果なのか興味深い。いずれにせよ，ほぼ同じ時期に使用され，剥片剥離の作業の場が限定されていたことを示す。第4ユニットと共通し，局所的に集中することが大きな特徴であろう。

それぞれの石材についてはその状況から次のようにまとめてみた。

玄武岩　　遺物の状況：石核・調整剥片・チップの局所的集中
　　原礫の持ち込み→剥片剥離→石核の遺棄→目的的剥片の持ち出し

黒曜石A－1　遺物の状況：調整剥片・チップの散在的集中
　　石核の持ち込み→極めて一時的な剥片剥離→石核の移動

黒曜石A－2　遺物の状況：石核の単独出土
　　原礫持ち込み→荒割段階で廃棄

黒耀石B　　遺物の状況：調整剥片・チップの局所的集中
　　石核の持ち込み→剥片剥離→石核の移動

第2ユニット　黒曜石A－2の石核と剥片の接合を中心とするユニットであるが，石核は多様である。背面調整をおこなう縦長剥片石核と，円盤状石核の他，小型の石核が出土している。剥片が拡散的に拡がりを見せ，ユニットとしては，第1・第4ユニットと相違し，大きな拡がりを見せる。

黒曜石A－2　遺物の状況：石核・調整剥片・チップ？
　　原礫持ち込み→剥片剥離→石核の遺棄→目的的剥片の持ち出し

(その他多くの石核が集中するが，第1・4ユニットのような局所的集中は見られず)

第3ユニット　広範囲に遺物の集中を見せ，この中でもいくつかに整理される可能性がある。黒耀石A－1を中心とするユニットで，特にユニット東側には原礫の調整段階の背面が礫

面のみで構成される大形剥片の接合が認められるとともに，石核と剥片の接合もあることから，原石から剥片剥離，遺棄の段階までを通した行為がおこなわれたことを示唆するユニットである。遺物の拡がりは第２ユニットと同様に拡散的である。

黒曜石Ａ－１　遺物の状況：石核・調整剥片の局所的集中

原礫の持ち込み→剥片剥離→石核の遺棄→目的的剥片の持ち出し

第４ユニット　第１ユニットと同様に，約半径１ｍに遺物が集中する局所的集中の在り方を示す。黒耀石Ａ－１と，黒耀石Ａ－２の石核を中心とするユニットである。第３ユニットと同様原礫搬入から，剥片剥離，廃棄までの課程がこの場でおこなわれているが，黒耀石Ａ－１については，剥片が１点接合するのみで，多くは他に持ち出されたと考えられる。一方，黒耀石Ａ－２の石核は剥片剥離から剥片・ナイフ形石器の接合まで，あり，原礫持ち込みから石器製作までおこなわれいる。２つの石核は，同じ作業場で剥片剥離をおこなっていながら，その後の剥片の動き大きな差がある。

黒曜石Ａ－１　遺物の状況：石核・調整剥片・石器・チップの局所的集中

原礫の持ち込み→剥片剥離→石器製作→目的的剥片の持ち出し→石核の遺棄

黒曜石Ａ－１　遺物の状況：石核・調整剥片

原礫の持ち込み→剥片剥離→剥片の持ち出し→石核の遺棄

各ユニットの性格について接合資料をもとにそのパターンを示した。各々のパターンについてはさらに母岩別資料の細分が必要不可欠であるが，黒耀石の細分は困難を極め，大まかな分類しか示せなかった。今後，この遺跡の石核を中心とする行動パターンについては，再検討する必要があることを痛感する。

総　　括

根引池遺跡はその石器組成として，ナイフ形石器を主体とし，これに彫器，エンド・スクレイパーを伴うことを特徴とする。言い換えれば，この石器組成は，ＡＴ降灰期以降に九州で発達する剥片尖頭器・三稜尖頭器・角錐状石器の出土がないことに最太の特徴があるとも言える。また，西北九州の多くの遺跡から出土する台形石器の出土もなく，九州のＡＴ降灰期以降のナイフ形石器文化期の特徴的石器が含まれていない。（註１）層位的には，旧石器時代の遺物の出土層位は３層にあり，３層全体から遺物が出土し，決め手となる鍵層や層内において比較しうる他の文化層の検出もできないという大きなハンディも抱えている。このことから，本遺跡の時期決定をおこなうにあたって，先の遺物の組成の特徴から，ＡＴ降灰期前後の他遺跡の出土遺物との比較検討を通して時期決定をおこなう以外にないと考える。この項では，本遺跡出土の個々の石器と他の遺跡との対比をおこない旧石器時代における時間的位置付けを試みる。まず本遺跡の石器と剥片剥離についてまとめてみる。

石器　ナイフ形石器は，柳葉形のナイフ形石器を主体としながらも，主要剥離面の方向に対し，斜めにブランティングするナイフや，小型ナイフ形石器，基部調整のナイフなど大きく４形態に分類することができる。柳葉形のナイフ形石器は，基部に裏面調整をおこなうものがあり，小形ナイフ形石器も柳葉形を呈し，主要剥離面の打面側にバルブ除去と思われる一回の剥離を加えることを特徴とする。また，基部にのみ部分加工を施すナイフ形石器も特徴的である。エンド・スクレイパーは玄武岩にその素材を求め，剥片端部に分厚い刃部加工を施すことを特徴とする。エンド・スクレイパーは西北九州のＡＴ降灰期以降の石器組成の中ではほとんど定着しない石器である。彫器は，素材剥片の主要剥離面に直交する刃部を特徴とする。この他，玉髄を使用する石器が出土しており，黒耀石を主体とする本石器群のなかでも特異な石器群を併せもつ。

剥片剥離　一部円板状の石核が認められるが，主体は円礫の長軸側を主作業面とする縦長剥片剥離技術にある。打面を一端に固定し，剥離作業面を一面にのみ設定する。調整打面のものと平坦打面とがあり，この変化は原礫の形に起因するようである。剥片の獲得の過程にはいくつかのパターンが存在する。打面調整を丹念におこない，打面が剥離作業面に対し垂直なもの。打面が急傾斜を呈するもの，背面調整が顕著なもの，などである。打面は打面再生や打面転移を行うことはなく，一回の剥離で構成される打面をそのまま最後まで打面として使用することを基本とする。

さて，先に述べたように，本遺跡の石器組成の特徴から時期的にはＡＴ降灰期以降の石器群とは様相が異なり，古い段階の石器群の様相とみる必要があるものと判断する。このことから，本遺跡出土の石器群と，ＡＴ降灰期前後の遺跡出土の石器群に求められる共通の要素を拾い上げてみる。本遺跡のナイフ形石器については，まず小型ナイフにその特徴が見出せる。小型ナイフは，長崎県では平戸の堤西牟田遺跡第Ｉ文化層（萩原1985），佐世保の上原遺跡（福田1986），国見町百花台遺跡Ⅶ層（田川・副島・伴1988），熊本県の狸谷Ｉ石器文化（木崎1987）等に類似し，いずれもＡＴ直下から直上の中に編年されている（註２）。この中で，小型ナイフ形石器とエンド・スクレイパーの組成をもつものとして，上原遺跡・狸谷Ｉ石器文化が挙げられる。特に上原遺跡では，その層序こそ不安定ではあるが、一括性の強い石器群で，３cm内外の小型ナイフを主体とし，本遺跡と同様尖頭器類や台形石器の出土がないことなどに共通性がみられる。また，ＡＴ下位に位置付けられる狸谷Ｉ石器文化の組成をみると小型ナイフとエンド・スクレイパーが顕著であることなどに本遺跡との共通性を見出せる。エンド・スクレイパーは西北九州のＡＴ降灰以降の石器群ではほとんど看取できない石器で，この石器もＡＴ前後の層準の時期まで求めなければならない石器の一つである。

剥片剥離については，ＡＴ下位において本遺跡のような整然とした縦長剥片剥離技術は堤西牟田第Ｉ文化層に認められるほか，大分県駒方古屋遺跡（橘1985），同じく駒方遺跡（橘1983）に縦長剥片剥離の技術が確認される。駒方遺跡の場合，両設打面石核とそれを素材とするナイフ形石器が単節打面の石核と同時に出土しており，本遺跡が単設打面のみであることと相違する。両設打面石核についてはＡＴ上位にある百花台Ⅵ層の大形のナイフ形石器にもその痕跡が認められ，ＡＴの下位から上位の段階まで両設打面の石核と単節打面の石核が同時共存する一時期が存在することが指摘できる。た

だし，先の百花台Ⅵ層以外，九州のＡＴ降灰期以降の石器群には積極的に両設打面石核を看取することはできず，単節打面による縦長剥片剥離技術が主流になる。松藤によれば，九州のＡＴ下位石器群の中でも比較的古い曲野遺跡Ⅳ層石器群で，交互剥離，求心剥離，打面転移剥離などの各類型が認められる（松藤1998）としており，ＡＴ下位における多用な石核の出土は他においても認められるが，本遺跡のような完成された縦長剥片剥離技術を主体とする遺跡は数遺跡に止まる。一方，南関東では寺尾Ⅵ文化層，鈴木遺跡などでＡＴ下位に茂呂型ナイフが出土し，石刃技法がすでに完成していることが知られている。関東の事例から考えるならば，本遺跡の剥片剥離技術をＡＴ下位に位置付けることは可能であり，遺跡の石器組成からもＡＴ下位におくことが九州の石器群の中では妥当であろう。しかしながら，剥片剥離技術を含めて現在の九州の状況の中でいえることは，ＡＴ下位にまで引き下げることができるかどうかである。今後の検討課題として，剥片剥離技術をふまえた根引池遺跡の再編成を創り上げていかなければならないと思う。

今回，本報告を書くにあたって，接合資料の図面等の展開を十分に提示できなかった。また，遺物についてもさらに検討が必要と思われる。九州の縦長剥片石核の中でも希有の接合資料をもつ本遺跡の分析は，今後さらに続けていくことを最後に記し，その責を今後果たしていきたいと思う。

註１

調査区域が道路部分にかぎり，遺跡の内容全体を示していないことを十分考慮しなければならず，現段階の石器組成として認識する必要がある。

註２

平戸市堤西牟田遺跡ではＡＴ下位に小型ナイフ・石核などが出土しており，長崎県下では百花台遺跡Ⅶ層の石器群とともにＡＴ下位の石器群として捉えられる石器群である。佐世保市上原遺跡は，ＡＴの確認こそなかったものの，Ａ地点の石器群は極めて斉一性の強い小型ナイフで占められ，狸谷Ⅰ文化層のナイフに近似し，また堤西牟田のＡＴ下位の石器群とも類似することから，ＡＴ降灰前後期に位置付けられている。百花台Ⅶ層の石器群については，調査によればＡＴ下位の石器群として報告されているが，門脇はこの石器群について，ＡＴ降灰期並行としている。

【参考文献】

橘　昌信1985『駒方古屋遺跡　発掘調査報告書』別府大学付属博物館

萩原博文1985『堤西牟田遺跡』平戸市教育委員会

福田一志編1986『上原遺跡』長崎県文化財調査報告書　第81集

田川・副島・伴1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第92集

木崎康弘編1987『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告　第90集

堤　隆1991「日本旧石器時代の石器」『季刊考古学－特集　石器と人類の歴史－』第35号

松藤和人1998『西日本後期旧石器文化の研究』学生社

門脇秀典1999「百花台Ｄ遺跡Ⅶ層出土遺物の検討」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ

図　　版

中央の山の頂上の真下に
ある森付近

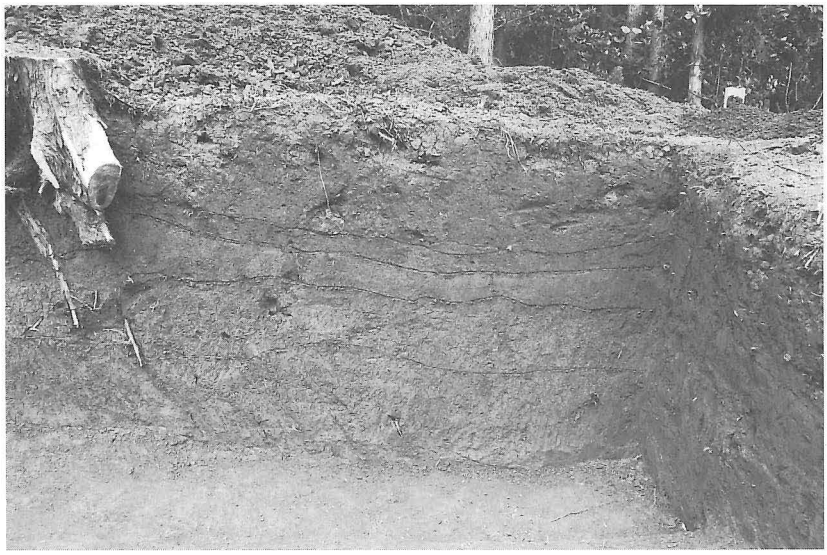
根引池遺跡遠景　北側根引池Ｂ地点より撮影

中央部がＢ列
手前は池の土手

遺跡遠景東側より撮影

作業風景（手前左側Ｃ－１区）

図版１　遺跡遠景・近景



A列からC列に向かって
土層の堆積環境は
良好なものとなる

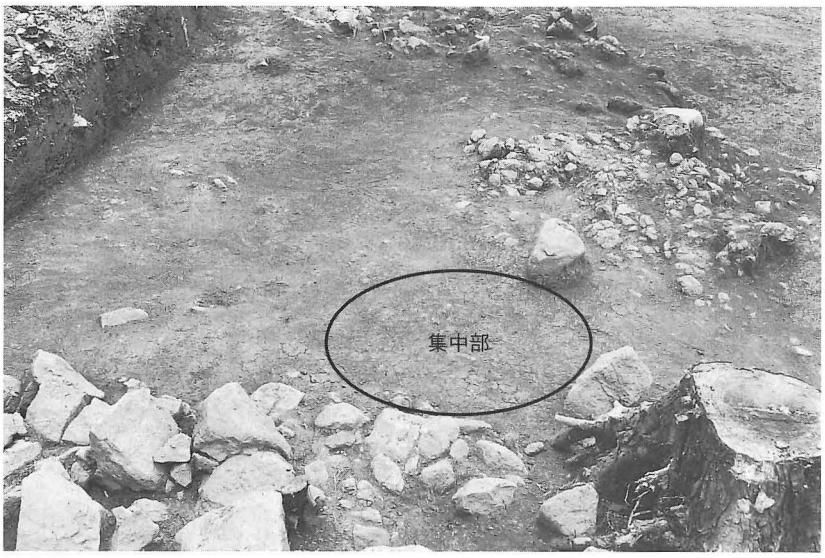
C－3区　北側土層断面

←3層
←4層
←5層

C－1区　北側土層断面

集石遺構検出状況

図版2　土層・遺構



第４ユニット完掘状況

Ａ－４区で検出された第４ユニットは周辺に基盤から遊離した玄武岩礫が周囲に多く出土し，礫と礫の間の場所を意図的に選択している。

第４ユニット北側より

Ａ－４区・Ｂ－４区は３層直下に礫が多く出土し以下，５区・６区も玄武岩風化礫が多く検出される。

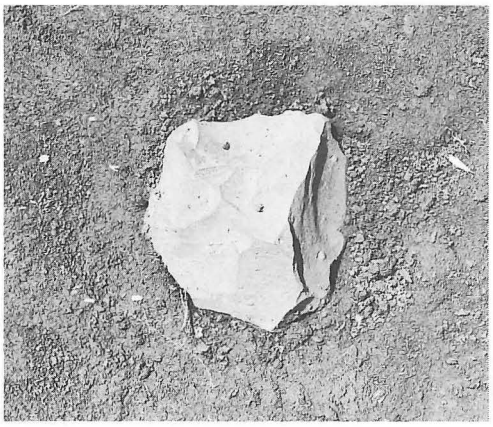
第４ユニット遺物出土状況

図版３　第４ユニットの状況

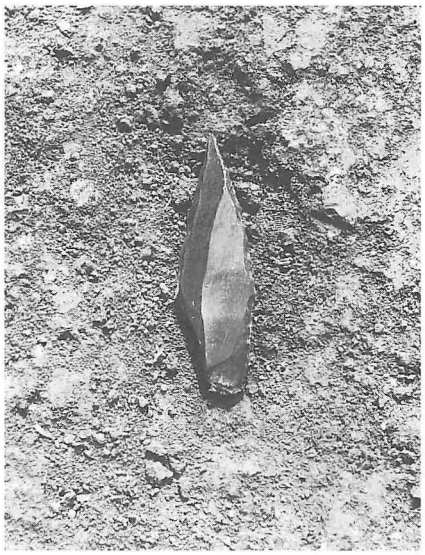
第１ユニット遺物出土状況

第１ユニット出土石核

第１ユニット出土石核

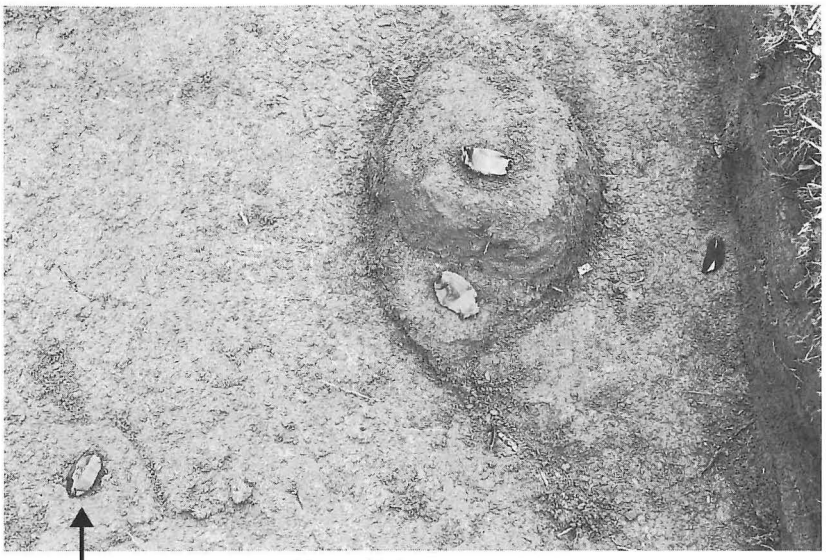


求心状別離の石核



第４ユニット出土ナイフ

図版４　第１ユニット遺物出土状況

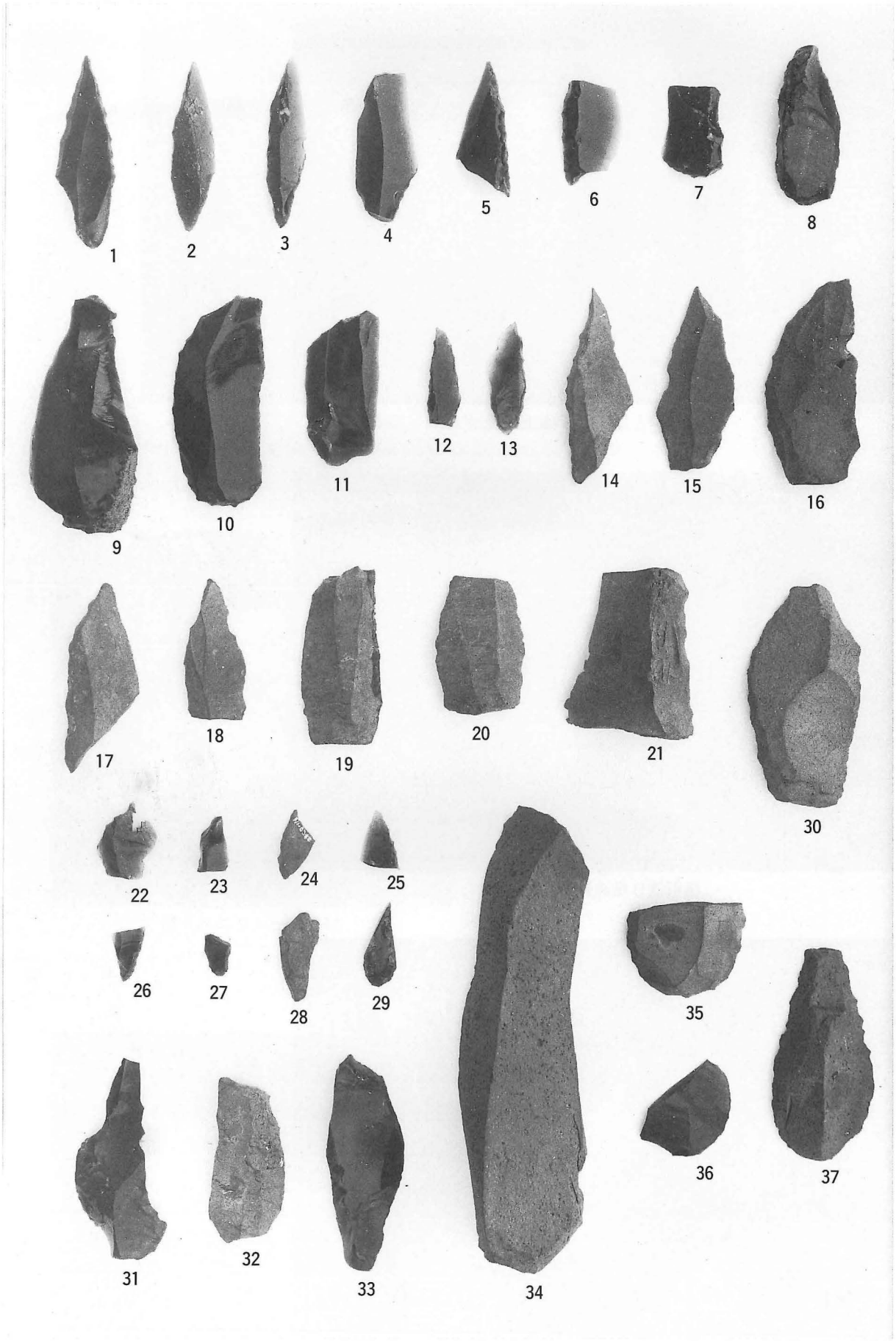


石核54と接合剥片出土状況

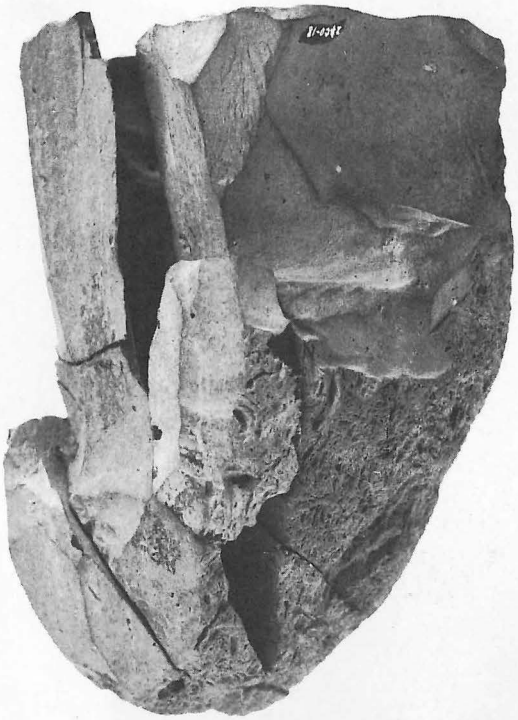
根引池Ｂ地点遺物検出状況

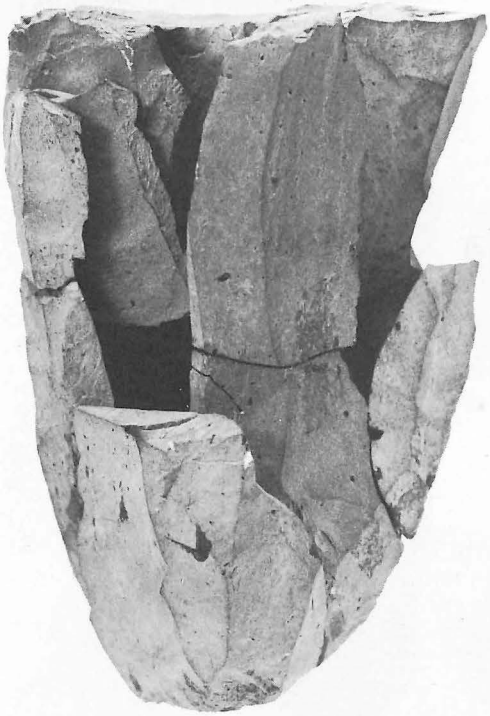
同上（拡大）

図版５　根引池Ｂ地点の土層状況

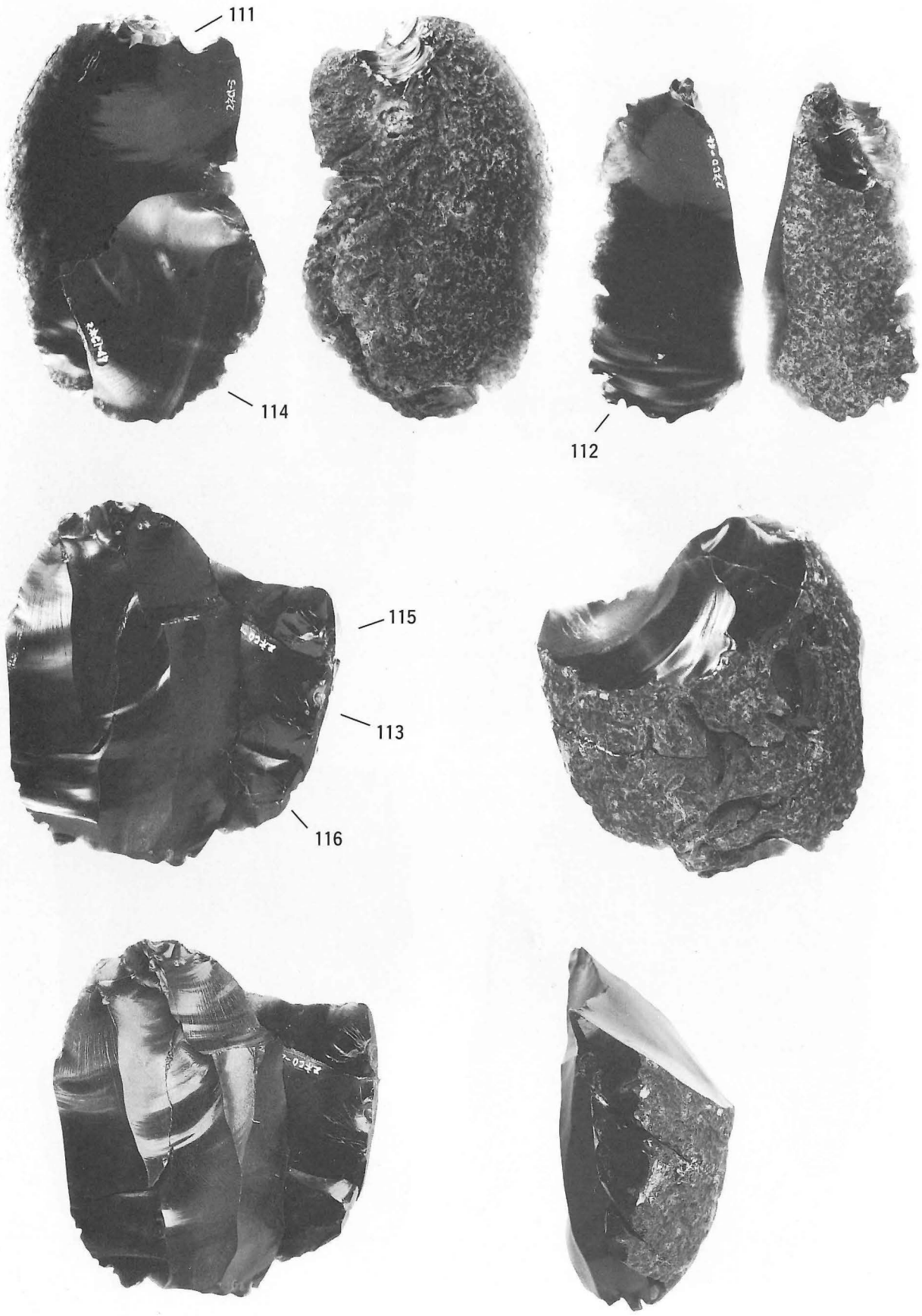


図版６　ナイフ形石器・彫器・スクレイパー（図版番号に同）

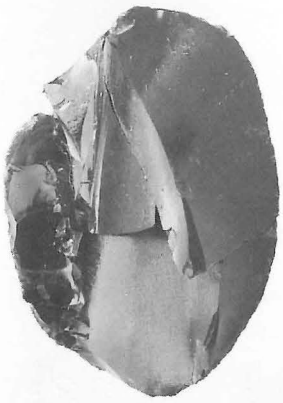




図版７　接合資料１

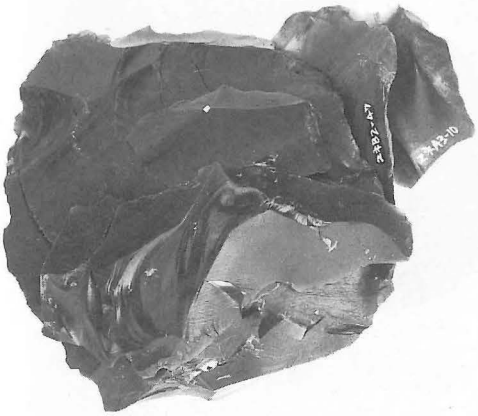


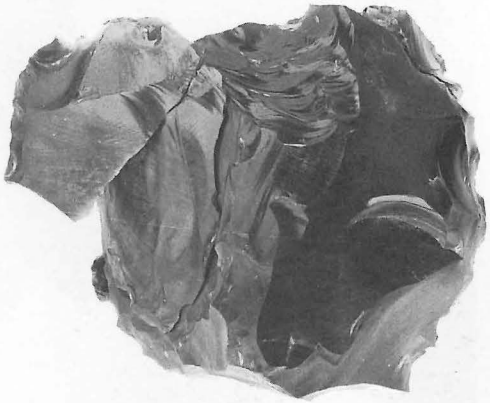
図版 8　接合資料 2



接合資料 3

接合資料 4





接合資料 5

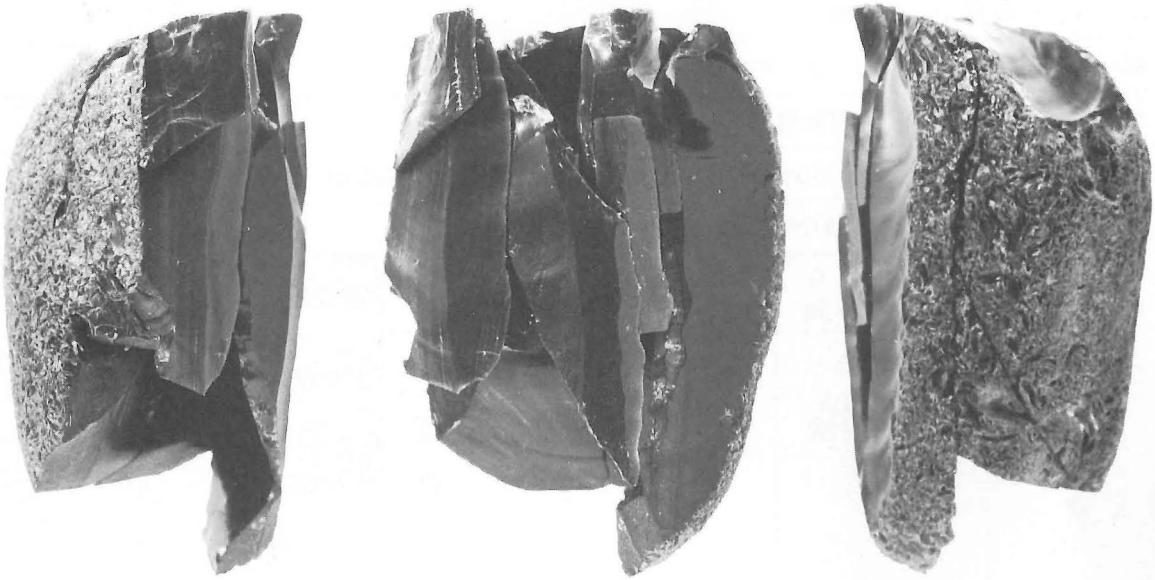
接合資料 6

図版 9　接合資料 3 ～ 6

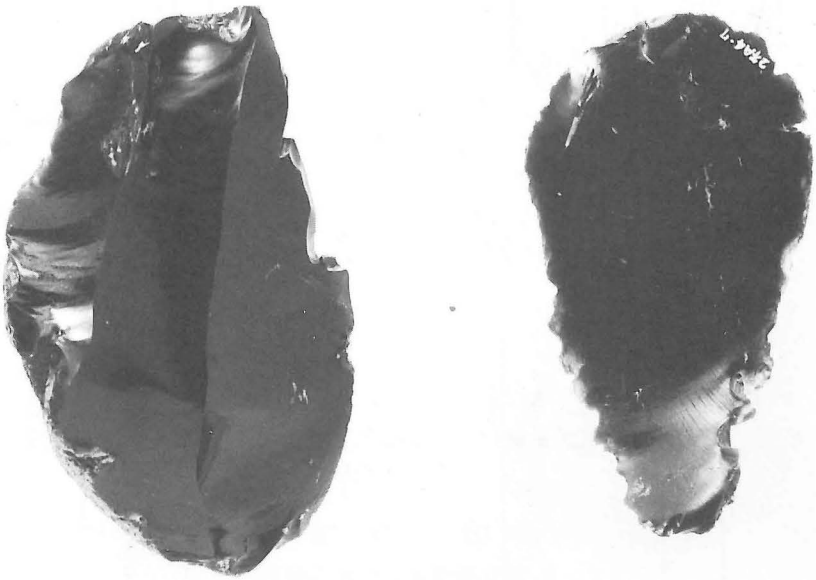
接合資料７

接合資料８

図版10　接合資料７・８



接合資料９



接合資料10

図版11　接合資料９・10

報告書抄録

ふりがな	ねびきいけいせき
書名	根引池遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	江迎町文化財調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	福田一志・中村　幸
編集機関	江迎町教育委員会
所在地	〒859-6101 長崎県北松浦郡江迎町長坂免104番地　TEL（0956）66－2175
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
根引池遺跡（ねびきいけいせき）	北松浦郡（きたまつうらぐん） 江迎町根引免（えむかえちょうねびきめん） 字根引（あざねびき）	42388	8	33° 19′ 33″	129° 38′ 42″	19990608 ～ 19990714	380m²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根引池遺跡	遺物包含地	旧石器時代	集石	ナイフ形石器 エンド・スクレイパー 彫器 石核	接合資料25例 剥片剥離の工房址

江迎町文化財調査報告書　第2集

根引池遺跡

2000年

発行　江迎町教育委員会
長崎県北松浦郡江迎町長坂免104番地
TEL0956-66-2175

印刷　㈱昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL0957-22-6000